

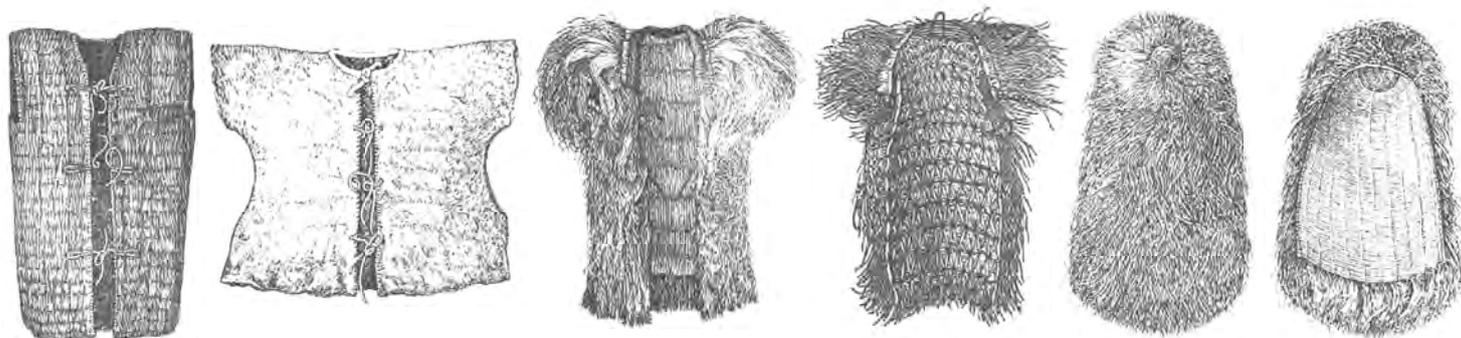
パレオアジア

—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究—

文化史学

Cultural History of PaleoAsia

計画研究 B01 班 2017 年度 研究報告



人類集団の拡散と定着にともなう

文化・行動変化の文化人類学的モデル構築

野林 厚志 編

表紙、裏表紙

台湾およびフィリピンの編製品

出典

鹿野忠雄（1952）『東南亞細亞民族学先史学研究 第二卷』東京：矢島書房

研究の目的と概要

本書は、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」の計画研究班 B01 班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の 2017 年度研究活動報告書である。

2017 年には、新人（ホモ・サピエンス）の起源のシナリオが大きく塗り替えられた。モロッコ西部のジェベル・イルード遺跡で約 30 万年前にさかのぼるとされる現生人類の化石が発見された。これで、新人がアフリカからアジアへ拡散する時間幅は 10～5 万年から十数万年と拡大することになった。同時に、アフリカの各地に新人の集団が存在していたことになり、新人と旧人の接触のみならず、新人と新人の接触が早い時期から生じていたことになる。すなわち、生物学的に同一の種である集団同士の接触による文化変化も重要な課題となり、文化人類学や民族誌の対象が、この領域の問題意識とよりつながってきたと言ってもよい。

本年度は領域の研究計画の 2 年目であり、当初の計画にしたがいながら、生業活動、生産活動、象徴化、社会関係等に焦点をあて、主としてアジア諸地域において、継承、製作、使用、流通してきた事物が変化する過程のフィールド調査、国立民族学博物館や国内外の博物館等に収蔵されてきた民族誌資料の熟覧調査、史料調査を実施した。

これらの調査において、班員が本年度に意識したことは、これまでの考古学的な知見から新人文化に特徴的であるとされてきた事象を調査、研究対象として組みこむことであった。墓制や埋葬、ビーズ、交易・運搬、具象イメージに関わる調査が予備的もしくは継続的に実施されている。また、博物館資料を活用した狩猟・採集用具をはじめとする生態資源獲得のための技術過程についての探究を個々の研究者だけでなく、領域内や外部の研究者に開いたかたちですすめてきた。

領域内においては他班との共同研究を開始している。野林が B02 班の中村光宏氏と民族誌データの定量分析に関する方法論的課題の検討、公募研究の山田が、A01 班の中沢祐一氏と先史時代の食品加工に関する民族誌・考古資料の比較を行い、学際的アプローチにも取り組むことになった。また、5 月には領域の研究大会を主宰し、「モビウスライン」を課題とした全体ワークショップを企画した。パレオアジアという地理的にも時代的にも大きなスケールでの文化変化の課題を扱うことで、領域の問題意識に合致するような研究の方向が確立されてきたと考えている。

計画研究 B01 班代表

野林厚志

国立民族学博物館・教授

研究組織

研究代表者

野林 厚志 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター・教授

研究分担者

池谷 和信 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・教授
上羽 陽子 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・准教授
藤本 透子 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・准教授
山中由里子 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・准教授

連携研究者

卯田 宗平 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・准教授
大西 秀之 同志社女子大学 現代社会学部・教授
金谷 美和 国立民族学博物館 外来研究員
菊田 悠 北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター・助教
中谷 文美 岡山大学 副学長／大学院社会文化科学研究科・教授
丸川 雄三 国立民族学博物館 人類基礎理論研究部・准教授
吉田世津子 四国学院大学 社会学部・教授

研究協力者

岸上 伸啓 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター・教授
戸田美佳子 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター・機関研究員
彭 宇潔 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター・プロジェクト研究員

招待研究者

山田 仁史 東北大学 文学研究科・准教授

目次

研究の目的と概要

オーストロネシア系諸集団の物質文化に関する人類学的研究	野 林 厚 志	1
ビーズ研究の枠組み		
— 素材論、技術論、社会文化論からの視点 —	池 谷 和 信	7
インド、アッサムにおける生態資源利用—「線具」を中心に	金 谷 美 和 上 羽 陽 子 中 谷 文 美	11
中央アジアの草原地帯における墓制の展開		
— カザフスタンでの調査から —	藤 本 透 子	16
墓の形態変化と集団間接触に関する一考察		
— 中央アジア・クルグズスタン調査から —	吉 田 世 津 子	23
中央アジアの「青い陶器」の誕生と発展		
— パレオアジア文化史学の視点から —	菊 田 悠	34
先史時代の想像的行為と生態系の相関関係		
— ベリゴール地方の先史時代洞窟画の調査報告 —	山 中 由 里 子	38
狩猟採集民に見られる道具利用の通文化的研究		
— アジアとアフリカの森林地帯を中心に —	彭 宇 潔	43
ストーンボイリングをめぐる文化の〈革新〉と〈退行〉	山 田 仁 史	48
生業活動の男女差と集団接触の様相にかかわる予備的メモ	卯 田 宗 平	68
文化概念をめぐる4つの諸相		
— 民族誌モデル構築のための予備的考察1 —	大 西 秀 之	71
研究計画 B01 班 2017 年度研究活動		77
「パレオアジア文化史学」第3回研究大会プログラム		79
研究計画 B01 班 2017 年度研究業績		84

オーストロネシア系諸集団の物質文化に関する人類学的研究

野 林 厚 志

(国立民族学博物館)

1. 調査の目的と概要

本研究の目的は、台湾から東南アジア島嶼地域、太平洋島嶼地域に拡散しているオーストロネシア系諸集団の社会や文化の動態について、1) 物質文化の変化、2) 社会関係の変化、に焦点をあて考察することである。

オーストロネシア系諸集団の拡散は、主として言語学的な知見を手がかりにして、台湾を起源地とする東南アジア、太平洋島嶼地域への展開が議論されてきた。しかしながら台湾起源モデルの根拠となる言語学的な現象が現存する言語をもとに構築されている点において、少なからず問題を含んでいる。

本研究はオーストロネシア系諸集団の起源そのものを議論するのではなく、オーストロネシア系諸集団が、集団同士、もしくは他の基層文化をもつ集団と接触した場合に生じる現象を、1) 物質文化の変化、2) 社会関係の変化、という2つの観点から考察していく。

パレオアジア文化史における文化人類学の研究分野の果たす役割は、文化人類学や民族学から引き出される人間行動モデルを構築することである。このモデルは、異なる文化的な基盤を有する集団が接触したときに、それぞれの社会にはどのような影響が与えられるかを示すモデルである。

旧人と新人という生物学的に異なる集団の接触は、現生の人類社会で検証することは不可能である。一方で、社会組織や制度、文化的背景が異なる集団の接触の様式、それによる双方の集団に生じる変化を検証することは文化人類学の分野では可能である。例えば、狩猟採集社会と農耕社会、遊牧社会と農耕社会等の接触は歴史的な記録もあわせながら文化人類学の研究対象とされてきた。こうした文化人類学の強みを活かした研究が本領域では求められている。

しかしながら、先史学、考古学が広義の物質文化研究であることに鑑みた場合、人間行動モデルの指標には物質文化、すなわち可視化され、それが物質的記録として残るものが含まれていることが望ましい。したがって、物

質文化を手掛かりにしながら、集団接触の影響について考察していく方法論をとることはこの領域における文化人類学研究のありかたとしては適切であると考えて良い。

こうした点に留意しながら、本年度は、1) マレー半島およびサラワクの槍製品、骨角器の形態学的研究、2) フィリピンにおける編製品の分布状況についての予備的調査を行った。

1) については、マレーシア国立博物館に収蔵されている槍資料の55点の計測調査を実施した。計測項目は、槍の全長、刃長、刃部の幅、重量等の12項目である。また、骨格器については装身具を中心に25点の形態観察と写真撮影を実施した。2) についてはフィリピン国立博物館の収蔵資料についての予備的観察を行い、文献資料等も参照しながら、編製品の分布、素材、製作集団の相違等の傾向を把握したうえで、国立民族学博物館に収蔵している資料の参照を行った。本報告では主に2) についての結果の概要をまとめる。

2. フィリピンにおける編製品

2-1. 編製品の分類、用途、分布

フィリピンにおける編製品は形態学的には基本的に籠とマットに分類される。籠は容器としての機能をもっとも重要であり、1) 食料の保存、調・料理、食事、2) 家庭や個人の持ちもの他からの分離、3) 漁労具、4) 食料を含めた長短期のもの保存、5) 内容物を好气的条件にさらず、といった使用における特徴がある。マットは敷物、着用品、容器としての機能を有している。

フィリピン国立博物館の資料、民族誌や文献資料から編製品の分布についての傾向をしめしたものが図1である。多くの地域では、籠とマットの両方を製作している。バスケットのみをもっぱら製作、使用する地域はルソン島、ミンドロ島、パナイ島、パラワン島、ミンダナオ島の内陸部に点在している。とりわけ、ルソン島はその民族集団数の多さも手伝い、地域差が生じる傾向が見られる。マットのみを製作する地域は限られており、海洋に

素材となっている。

めたものである。もちろん詳細に見ていくと、これらと

表1は、それぞれの地域で用いられていた材料をまと

は異なる素材が用いられていたことも十分に考えられる

表1 民族集団ごとの編製品制作と使用する素材（マニラ国立博物館の資料より作成）

Ethnic Groupe	Products	Area	Plant resource					
			Tikug	Nito	Bamboo	Rattan	Buri Palm	Pandan
Ivatan	B	Itbayat	-	○	○	○	-	○
Isinay	B	Luzon	-	-	-	○	-	-
Ibanag	B	Luzon	-	-	-	○	-	○
Gaddang2	B	Luzon	-	-	○	○	-	-
Tagalog2	B	Luzon	-	-	○	○	-	-
Ilongot	B	Luzon	-	○	○	○	-	○
Atta	B	Luzon	○	○	○	○	○	○
Sambal	B/M	Luzon	-	-	-	-	○	-
Itawes	B/M	Luzon	-	-	○	○	-	-
Gaddang	B/M	Luzon	-	-	○	○	-	-
Pangasinan	B/M	Luzon	-	-	○	○	-	-
Itneg (Tinguian)	B/M	Luzon	-	-	○	○	○	-
Bontoc	B/M	Luzon	-	-	○	○	○	-
Ifugao	B/M	Luzon	-	○	○	○	-	-
Ilokano1	B/M	Luzon	-	-	○	○	○	○
Isneg	B/M	Luzon	-	○	○	-	○	○
Kalingal	B/M	Luzon	-	○	○	○	○	-
Ilokano2	B/M	Luzon	-	-	○	○	○	○
Tagalog	B/M	Luzon	-	○	○	○	-	○
Tagalog3	B/M	Luzon	-	○	○	○	-	○
Bikolano	B/M	Luzon	-	○	○	-	○	○
Kasiguranin	M	Luzon	-	-	-	-	-	○
Kapampangan	M	Luzon	-	-	-	-	○	-
Agta	M	Luzon	-	-	○	-	○	-
Kalinga2	M	Luzon	-	○	○	○	-	-
Ayta Bataan	M	Luzon	-	-	○	-	○	○
Buhid	B	Mindro	-	○	○	○	-	○
Hanunuo	B/M	Miindro	-	○	○	○	○	○
Iraya	B/M	Mindro	-	-	○	○	-	○
Tagalog4	B/M	Marindurque	-	○	○	-	○	-
Waray	B/M	Samar	○	-	-	○	-	○
Romblonanon	B/M	Romblon	-	○	○	-	○	-
Ati	B/M	Panay	○	-	-	-	-	○
Aklanon	M	Panay	-	○	○	-	○	-
Kiniray-a	M	Panay	-	-	○	-	○	-
Bukidnon (Sulod)	B	Panay	-	-	○	○	-	-
Hiligaynon (Ilogmgao)	M	Panay	-	○	○	-	○	-
Cebuano	B/M	Cebu	-	○	○	○	○	○
Boholano	B/M	Bohol	-	○	○	○	○	○
Ata	B/M	Negros	-	-	○	-	○	○
Batak	B	Palawan	-	-	○	○	-	-
Tau't Batu	B	Palawan	-	-	○	○	○	○
Molbog	B/M	Palawan	-	-	○	○	-	-
Tagbanua	B/M	Palawan	-	○	○	-	○	-
Palawan	B/M	Palawan	-	○	○	○	○	○
Manobo	B	Mindanao	-	-	○	○	-	-
Ata Manobo	B	Mindanao	-	-	○	○	-	-
Bagobo	B	Mindanao	-	○	○	○	-	-
Tiruray	B/M	Mindanao	-	○	○	-	-	-
Blaan	B/M	Mindanao	-	-	○	-	-	○
Manobo (Higaonon)	B/M	Mindanao	○	-	○	○	-	-
Maranao	B/M	Mindanao	-	○	○	○	-	-
Mandaya	B/M	Mindanao	○	○	○	○	○	-
Maguindanao	B/M	Mindanao	-	○	○	○	-	○
Subanen	B/M	Mindanao	-	○	○	○	-	○
Tausug	B/M	Sulu	-	○	-	-	-	-
Sama	B/M	Sulu	-	-	○	○	-	-
Yakan	M	Sulu	-	-	-	-	-	○

が、一般的な使用概況が表のようになる。

素材ごとに見ていくと、ティクグが5集団 (B:1, B/M:4)、ニットが27集団 (B:5, B/M:19, M:3)、タケが最も多く、49集団 (B:12, B/M:31, M:6) に使用され、ラタンが39集団 (B:14, B/M:24, M:1)、プリパームが25集団 (B:2, B/M:17, M:6)、パンダナスが26集団 (B:6, B/M:17, M:3) で用いられていた。

製作する集団毎にこれらを分類すると、籠製作者16集団は、ティクグ1、ニット5、タケ12、ラタン16、プリパーム2、パンダナス6で、素材数別では1種類1、2種類7、3種類1、4種類4、5種類0、6種類1であった。籠・マット製作の35集団は、ティクグ4、ニット19、タケ31、ラタン24、プリパーム17、パンダナス17、素材数別では1種類2、2種類8、3種類11、4種類10、5種類4、6種類0で、マット製作者9集団は、ティクグ0、ニット3、タケ6、ラタン1、プリパーム6、パンダナス2、素材数別では1種類3、2種類2、3種類4、4種類以上は0という結果が得られている。

このことは、マット製作のみを行っている集団では使

用する植物が限定的であるのに対し、籠製作者は多様な素材を選択している可能性があることを示しており、6種類すべての素材を使用した籠製作者がネグリトで狩猟採集民である Atta であった。

東南アジアへの人類集団の拡散にタケが重要な役割を果たしてきたことは以前から指摘されてきたことである (山岡 2016)。一方でフィリピンにおける編製品製作の点においては、タケ以外の素材も相応に使用されていることが理解できる。図2から図4までは主としてマットの素材として用いられていたティクグ、プリパーム、パンダナスの生育領域が示されたものである。他の材種はその生育領域が限定的であることにも留意しておく必要がある。

3. 特徴的機能を有する編製品

編製品の主要な用途は容器としての使用である。容器は保存や運搬といった目的で使用されることが多い。またマットは敷物や家屋の壁、屋根などにも使用されたり、



図2 ティクグの生育領域 Miller 他 2010 [1913] より引用



図3 プリパームの生育領域 Miller 他 2010 [1913] より引用

雨風除けに着用できる蓑としても用いられる他、変形させて固定することによって容器もしくは運搬具としての機能も果たすものがある。

編製品の機能の多様性を検証することを目的として、国立民族学博物館が所蔵しているフィリピン収集資料を継続的に調査していたところ、特徴的な資料が観察されたので報告をしておく。

図5は資料情報によればAtaの漁労具とあることから、おそらくAttaといったネグリト系の集団の道具であると判断してよい。長さは約30cmで、直径が12～3cmの円錐状の筥である。特徴的なのは網目が大きいことである。筥は水中において魚が泳ぐ方向にあわせて設置し捕獲するための道具である。網目の大きさは一般には小さいがこの筥は網目が大きく、節の部分の側枝を先端を鋭く棘状に切っているのが特徴である。魚が網の目を通過するときこの棘状の部分に引っかかり捕獲できることが期待される。管見の範囲ではこの道具を使用した漁労活動を明記した民族誌が見つかっておらず、今後も文献調査による検証を継続していく必要はある。



図4 パンダナスの生育領域 Miller 他 2010 [1913] より引用

図6はイフガオの雨合羽である。同じ形態の雨合羽は台湾の原住民族のパイワン族の間でも用いられていた(鹿野 1952)。籐を網目状に編んで亀甲型のみのような形に整形し、下端は一直線状の切断したものに乾燥させた草を挟んでつくるものである。フィリピンでは近傍のイゴロッドにも使用され、大陸部ではナガ、カチャリ、カシの間でも見られるとされている(鹿野 1952:230)。オーストロネシア系の諸民族の基層文化なのか、技術的適応の結果、同じような形態のものが作られるようになったのか容易に結論づけることはできないが、東南アジア大陸部から島嶼部にかけて同じ機能をもつ形態的にも同じものが分布していることが理解できる。

また編製品は必ずしも編み込んだ構造をもつとは限らない。図7はハヌノオの背負い籠で、これは乾燥した植物の葉を重ねて連結させて結わえたものである。同じ背

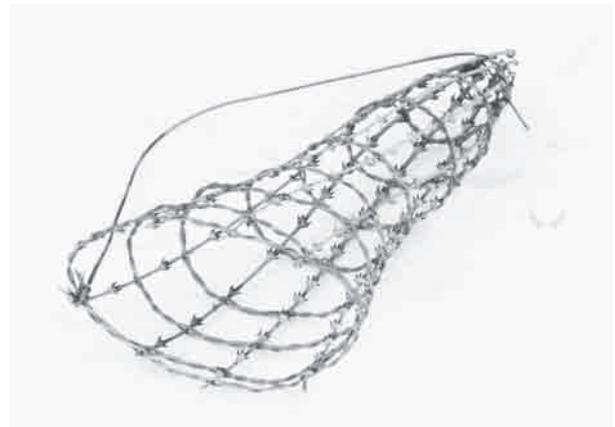


図5 魚筥 (国立民族学博物館蔵)



図6 雨合羽 (国立民族学博物館蔵)

負い籠でもイフガオは編み込んだ構造のものを製作使用しており（図8）、こうした構造の違いも分布比較の対象となるであろう。

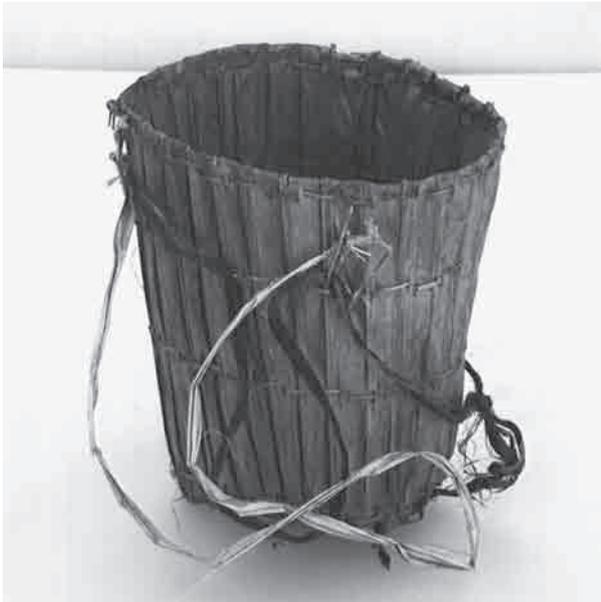


図7 背負い籠（国立民族学博物館蔵）



図8 背負い籠（国立民族学博物館蔵）

4. まとめ——編製品の考古学的含意

東南アジア、東アジアへの進出も含めて、新人の拡散の課題においてこれまで必ずしも議論の俎上に十分にのせられてこなかったことが、保存と運搬に関わる具体的な人間の行動である。これらは考古学的な記録として残りにくいということで、検証が敬遠されるのかもしれないが、生態学的資源の一時的な獲得と利用から継続的な利用への転換が、集団の移動や集団サイズの拡大につながった可能性は十分に考えられるであろう。局在的な資源の運搬や、幼生期間の長い人類集団にとっての乳幼児の運搬等、編製品の利用が果たす役割は小さくないと考えられる。

籠のみを製作、使用する集団とマットのみを製作、使用する集団の資源運搬や貯蔵等の比較は、生態資源利用の観点からの集団の性格の違いを考える材料も与えてくれることが期待できる。

一方で、棘つきの魚笥に見られる技術上の優位性、雨合羽の東南アジア地域での点在状況は、人類集団の拡散、とりわけ、オーストロネシア系諸集団の拡散の歴史的な背景を考えるうえでも示唆的である。台湾、フィリピン、マレーシアにおける文化的な多様性を、先住集団間ならびに先住集団と外来集団との接触のなかで考察していく必要がある。

参考文献

鹿野忠雄

1952 『東南亜細亜民族学先史学研究第二巻』東京：矢島書房

関西学院大学第二次パラワン島学術探検隊

1969 『パラワン島南部の山地民—関西学院大学第二次パラワン島学術探検報告書』兵庫：関西学院探検会

Miller, H., J. Minier, U. S. Andes, T. Muller and A. Brezina
2010[1913] *Philippine Mats* (Philippine Craftsman Reprint Series No.1). Manila: Bureau of Printing

Silvestre, R.

2000 *The ethnoarchaeology of Kalinga basketry: When men weave baskets and women make pots* Ph. D. Thesis. University of Arizona.

山岡拓也

2016 「東南アジアにおける現代人的行動に関する考古学的研究とタケ仮説」西秋良宏編『パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究第1回研究大会予稿集』pp.38-39. 東京：東京大学

ビーズ研究の枠組み — 素材論、技術論、社会文化論からの視点 —

池谷 和信

(国立民族学博物館・人類文明誌研究部)

1. はじめに

私たち人類（ホモ・サピエンス）の歴史を把握するために、これまで中期石器時代の人間の行動の研究が注目されてきた。なかでもビーズは、およそ10万年前に誕生したものであり世界中に広くみられることもあって、人間の象徴行動の芽生えを考える素材としてみなされてきた¹⁾。例えば、アメリカ・スミソニアン自然史博物館の常設展示のなかでも、ビーズの情報がみられて、その起源は7万5千年前から10万年へというように修正したパネルを見つけることができる（図1参照）。この図からも、この時期には、骨角器の利用や漁撈なども開始されており、ホモ・サピエンスが誕生した20万年前から10万年を経過してどのような状況が要因になってビーズなどが生まれたのが、多くの疑問が残される。同時に、人類がアフリカを出てアジアに拡散した各地においてもビーズが見出されており、これらが独立発生であるのか文化伝播であるのか否かも論議になるであろう。

筆者は、以上のような問題意識のもとに、10万年の人類史と地球空間のなかでのビーズ文化の共通性という視点からビーズを対象にした人類学的研究を行ってきた（池谷 2017a）（表1参照）。その成果の一つは、2017年

3月から6月にかけて開催された特別展示『ビーズ一つなく、かざる、みせる—』である（写真1）（池谷 2017b）。筆者が、実行委員長となり、館内や館外の多くの方々との協力のもとに展示をつくることができた²⁾。同時に、ビーズ展に関連する講演、ギャラリートークなどの活動によってビーズ研究の広がりや深さをアピールすることができた。しかしながら、ビーズ研究に関して残された課題は少なくない。例えば、考古学、文化人類学（民族学）、美術史などのさまざまな分野がビーズを対象にして研究をしてきたが、分野間をつなぐような論理、ビーズをめぐる

表1 ビーズがつくりだす人類文明誌（池谷作成）

20万年前	10万年前	1万年前	5千年前	500-200年前	現在
道具・言語					
	ビーズ				
		岩絵			
人類の誕生	人類の拡散	農耕	古代文明	大航海、近代化	
					
				貝の道	

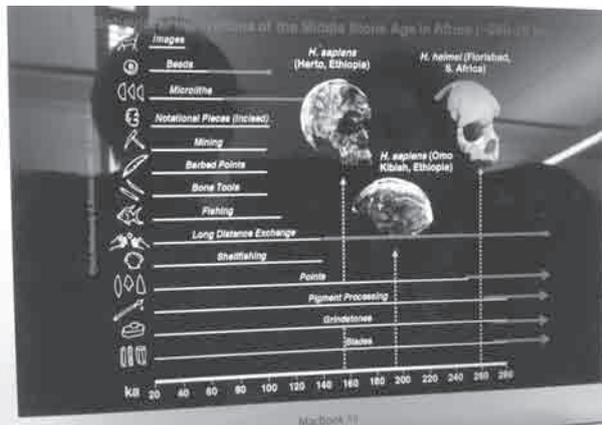


図1 アフリカにおける中期石器時代の人類の革新的行動（スミソニアン自然史博物館、撮影：池谷）



写真1 民博・ビーズ展の会場

る理論的枠組みがあまり提示されてこなかった点である。とくに、ビーズと人とのかかわり方をものからみる考古学と人からみる文化人類学との相互の交流があまり多くはないのが現状である。

本報告では、ビーズというものを、どのような研究枠組みからみたらよいか、文化人類学からの視点から見た理論的枠組みを提示することがねらいである。筆者は、これまで上述した展示の準備の段階において数多くのビーズを観察すると同時に、世界各地の主として辺境地での人類学的・地理学的な現地調査をおこなってきた。以下、①素材論、②技術論、③社会文化論の順に述べていく。なお、ここでは、勾玉、ガラス小玉、珠のような単体 (Bead) としての珠ではなくて部材をつなげたものをビーズ (Beads) として定義する (池谷編 2017a)。

2. ビーズ素材論

1) 部材

人類は、どれほどの多様な素材のビーズを使用してきたのであろうか。その総数は、現時点では明らかになっていない。ただ、自然素材と非自然素材とに分けられることは間違いない。自然素材には、ジュズダマやスイカの種のような植物、イノシシやジャガーやイルカやサルなどの歯、タカラガイやムシロガイのような貝類、ダチョウのような卵の殻などが挙げられる。また、局地的な利用ではあるが、スズメバチの頭、ピラルクのウロコ、ヘビの骨なども興味深い。また、採取・加工に労力はかかるが、カーネリアンやヒスイのような石も無視することはできない。インダス文明ではカーネリアンが、日本の縄文時代にはヒスイが生産地から遠方に運ばれて利用されてきた。この他にも、琥珀、珊瑚、メノウ、ラピスラズリなど地域性を持って利用されてきた。

一方で、非自然資源はどうだろうか。この場合、ガラスが代表的である。最初のガラス製作は西アジアが起源とされていて、現在では世界の隅々までにガラス利用は広がっている。例えば、イタリアのヴェネチアでは、ムラノ島にておいてのみガラスの製作技術が伝承されてきた。日本国内においても、ガラス産業は現在でも生きている。このほかには、鉄が挙げられる。鉄ビーズは、ケニア北部とナミビア北部の牧畜民のなかで共通して見出せる。

2) つなぐもの

ビーズには、部材をつなぐための紐や糸が必要である。それには、植物繊維が便利であることはいままでもない。しかし、これもまた考古資料としては残存しにくい。植

物繊維のほか、大型の野生動物のけんを取り出して糸のようにつなげてビーズに利用されていた。カラハリ砂漠の狩猟採集民サンシのなかでは、ゲムスボグ (大型のアンテロプ類) のけんが利用されている。

以上のように、部材には地域の条件に応じて多様な素材を見つけることができる。そして、部材のみならずつなぐものの素材においても残存しにくい植物などの存在には注意が必要である。

3. ビーズ技術論

ビーズの技術論は、①ビーズの部材に穴を開ける (穿孔) 技術と②部材と部材をつなげる技術とに分けられる。石やガラスなどの部材の生産地では穿孔技術の情報が欠かせないが、石やガラスの消費地ではつなぎの方が重要なポイントになる。例えば、ビーズ細工のなかで線状から面状への技術の展開を指摘することができる。日本のビーズ史のなかでみると、古代エジプトの面状のビーズのようなものは近代に入ってから生まれたビーズバッグが挙げられる程度である。

ここでは、穴をあけるための道具の素材と使い方や担い手の記述が欠かせない。カラハリ砂漠の狩猟民が利用するダチョウの卵の殻の場合には、罟猟で捕獲されるステーンボック (小型の哺乳類) の角が利用されている。また、ナイジェリアのヨルバの場合には、王国の時代以来の「ビーズ職人」が担い手になっている。彼らは、現在では中国産のガラスビーズを利用するが、伝統的に帽子や杖などを各地の首長におさめていたという。

技術論のなかでは、地域社会におけるビーズに関する伝統的な技術を記述すること、ビーズ職人が集まる職業集団の形成と展開を把握することなどが研究テーマになるであろう。ヴェネチアのムラノ島 (ガラス)、インドやミャンマー (石、ガラス)、古代日本 (石) などでの事例を詳細に記述して、それらを比較することも興味深いであろう。

4. ビーズ社会文化論

1) 交換と交易 (担い手や交換率ほか)

ビーズの流通をみていくと、ローカル、リージョナル、グローバルのように空間的な流通の範囲が異なるという研究枠組みを示すことができる。例えば、多くの植物素材や動物素材はローカルである。貝のなかでもタカラガイの一部 (キイロタカラ、ハナビラタカラ) やヨーロッパで産出される琥珀はリージョナルに展開される。そして、ガラスビーズの場合は、古代から近代、現代に至る

までグローバルである。

これらの結果、ビーズは地域と地域をつなげることになるのでその交換率や、交換する担い手の把握が必要になってくる。17世紀の文献では、オランダ人がケープタウンにて先住のコイコイ人と会った際に、ガラスビーズと羊を交換している。アイヌの場合には、詳しい資料が多くはないが、中国産のガラスビーズと毛皮が交換されている。古代日本の場合にはどのような交換率であったものか、興味深い。

2) ビーズと社会文化：色や形の選択基準、装飾の仕方、社会のあり方

ビーズと社会とのかかわり方は、人類の生業のあり方に依りて異なっている。以下では、4分類した社会のなかで言及してみよう。

まず、狩猟採集社会では、世界の視点から外部からのファーストコンタクトのあり方にガラスビーズが利用されている。17-18世紀には、貨幣というものが地域の人からみると有効な手段ではなかった。しかしながら、各地の社会のなかでビーズに対する色や形など好みの違いがあった点が重要である。また、アフリカのサン（ブッシュマン）の場合には、ガラスが外部から導入されるとダチョウの卵殻の利用が衰退する側面もみられる（写真2参照）。アイヌの場合も同様である。人々のあいだで大きな玉を求めてアイヌらしい玉の配列をつくるのが広まった結果、自然素材からなるビーズは衰退した可能性がみられる。

牧畜民や農耕民の場合には、ビーズが民族内や民族間のなかで個々の集団のアイデンティティを示すように展開する地域がみられる。例えば、南アフリカのズールー社会では、ガラスビーズの色の配列の違いで地域の集団の違いを示したといわれる。南スーダンのディンカ社会では、ガラスビーズ製のコレットを男性も女性も身



写真2 カラハリ砂漠のサン
（左：ナミビア北東部・南アフリカのオリジンセンターの展示、
右：ボツワナ中央部・池谷（2002）より）

に付けることが富の違いを示すものになっている。

つぎに、王国や首長国では、ビーズは王様と庶民のように社会階層とのかかわりを示すことにもなる。ナイジェリアのヨルバ社会では、伝統的な首長がいるが、彼らの帽子や杖などは、地域のビーズ職人が製作していた。カメルーンの王国において、王の椅子の装飾には長距離交易で入手されるタカラガイが利用されている。

最後に近代文明社会では、とくに儀礼の中でビーズは利用されている。現代日本では、葬式の際の数珠、結婚式の際の女性による真珠の首飾りなどである。また、最近では男性が身に付けるブレスレットや女性のシルク製の首飾りも広くみられる。

以上のように、世界の諸社会のあり方とビーズとのあいだにどのようなかかわり方があるのか否か、興味深い課題である。

6. まとめと考察

冒頭でのべたように、ビーズと人とかかわり方を「ものからみる考古学」と「人からみる文化人類学」との間には相互の交流があまり多くはなかった。しかしながら、ここでは素材、技術、社会文化という3つの視点からビーズ研究の枠組みを考える試みをおこなった。現時点では十分な資料を提示してはいないが、ここでは今後の論点を整理してみよう。

まずは、素材の稀少性、穿孔の難易度とビーズの持つ社会的価値の大小とのかかわりである。これは、考古学と文化人類学が学際的に協力できるテーマである。また、個々の素材別の議論を越えて、より一般的な理論的な追究にもなっている。人類にとってビーズとは何か？ 交易・交換とは何か？ というような問いへの答えにもつながるものであろう。

その際には、素材の組み合わせ方にも注意が必要である。現代は、ガラスのみのように等質の素材で構成されることが多いが、アマゾンの首飾りの場合、1つのなかに10種類の異なる素材が組み合わせることもある。世界中の違いと共通性を把握することが、個々の地域の特性を見出すことにつながるであろう。

最後に、素材（もの）の人類史を構築することである。世界には、貝の道、ガラスの道、石の道などがつくりだされて、「ガラス革命」によって世界の諸地域がつながり新たな地域システムの構築にビーズも貢献している。そのなかで、社会のなかでのビーズの形成・衰退過程とその要因は常に問われることになるであろう。同時に、人類は石からガラスへの移行、卵殻と貝殻、真珠とコットンパールのような共存状況など、素材を変えることでビーズ文

化が維持されてきた点にも注目してよいであろう。ビーズ研究では、まだまだ残された課題は多い。

注

- 1) Using beads have been paid attention as an index of symbolic behaviors by early modern humans as well as using pigments and burial items (McBrearty and Brooks 2000).
- 2) 民博所蔵資料 34 万点のうち 3% はビーズ資料であった点は注目される。このうち、民博・特別展示ビーズでは、約 2 千点が利用された。

参考文献

池谷和信

- 2002 『国家のなかでの狩猟採集民—カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌—』国立民族学博物館研究叢書 [4] 国立民族学博物館

池谷和信編

- 2017a 『狩猟採集民からみた地球環境史—自然・隣人・文明との共生—』東京大学出版会。
2017b 『ビーズ—つなぐ、かざる、みせる—』国立民族学博物館 (特別展示図録)。

McBrearty S. and Brooks A.

- 2000 The revolution that wasn't: a new interpretation of the origin of modern human behavior. *J Hum Evol.* 39 (5): 453-563.

インド、アッサムにおける生態資源利用 —「線具」を中心に

金 谷 美 和 (国立民族学博物館)
上 羽 陽 子 (国立民族学博物館)
中 谷 文 美 (岡山大学)

1. はじめに

これまでの考古学的研究により、ネアンデルタール人が繊維状の紐(図1)という線状道具を使用していたことが明らかになっている(Hardy et al. 2013)。本研究は、インド北東部に位置するアッサム地域での調査に基づき、「線具」利用の分析を通じて、生態資源の利用の諸相を明らかにすることを目的とする。その成果を通じて、新人が紐状の道具をどのように展開してきたかに関する可能性を探るための手がかりを提供し、パレオアジア文化接触についての理論的構築に寄与することをめざす。

「線具」とは、1)素材を加工した線状物である、2)線状物自体が完成品である、3)線状物自体に使いみちがある、という特徴をもつ道具のことである(上羽・金谷・中谷 2017: 12)。「線具」は、単純な形態と機能を備えているために自然環境や生業との結びつきが強く、その素材と使用法に地域差が顕著にあらわれやすい。さらに技術、社会制度、観念との関わりをみるのに適している媒体でもある。他方、「線具」は、一時的に使用された後は捨てられるものが多く、植物・動物素材の性質から遺物として残りにくく、また博物館資料としての保存対象とはなりにくい。現地調査により、制作・使用現場をおさえることが肝要である。そのため本研究では、特定の地域を選択して、「線具」の生産と使用について現地調査をおこなった。

2. 研究の方法と調査地

本研究の調査地は、インド北東地方に位置するアッサム地方である(図2)。アッサムは、石器形式の境界線である「モビウスライン」上にあり、物質文化的に重要な地点にある。

アッサム地方は、地理的にはチベット高原南西部を源流とするブラマプトラ川渓谷内の平野部と周辺の丘陵地帯に大きく分けられる。気候は温暖夏雨気候に属し、4

月と5月のプレモンスーン期、6月から9月のモンスーン期、10月から3月までの乾期に区分される。年間降水量は少ないところで2,000mm、多いところでは4,000mmに達する(浅田 2014: 30)。そのために、稲作が卓越し、森林資源にもめぐまれている。

アッサム地方を含むインド北東地方は、東南アジア、チベットに近接する地理的条件から、多民族社会を形成している。言語系統で分類すると、北インドの主要民族であるインド・ヨーロッパ語族、チベット・ビルマ語族、タイ語族、オーストロアジア語族の4つに大別される(浅田 2014: 32)。

地域研究者の浅田晴久によると、アッサムは英領時代に欧米人による研究がなされたものの、独立後は近年にいたるまで民族紛争による治安の悪化や外国人に調査許可が出ないなどの理由から、現地調査をともなう研究には制限があった(浅田 2015)。例えば、国立民族学博物館の栗田靖之らによる文化人類学的研究は、文献研究が主にならざるを得なかった(栗田 1989)。近年になってようやく、現地調査をふまえた地域研究の成果が現れるようになってきている。民族紛争に焦点をあてた(木村 2012)、多民族間関係を生業活動との関係から分析する(浅田 2017)などがある。

「線具」に関連する物質文化や手工芸に関する研究は、タケ(Ranjan 1986; Nath, Das & Das 2007)、野蚕織物(Baruah & Bhattacharjee 1981; Konwar 2013; Maxwell-Lofroy & Ghosh 1912; Mazumdar 2013; Sarma 2008; Zethner, Koustrup & Barooah 2012; Zethner, Koustrup etc. 2015)がある。しかし、生産者や生産構造、あるいは使用方法についてとりあげたものは極めて少ない。たとえば、(Ranjan 1986)は、アッサムを含むインドの北東州におけるタケの手工芸品についての包括的な研究であるが、素材と技法の詳細な記述に比べ、生産者についての記述は少ない。手工芸に関する先行研究の多くは、製品そのものについての紹介である。つまり製品の素材に注目したり、文様から分析するよう

なものが主である。

筆者等は、インド西部やインドネシアで物質文化にかかわる研究をおこなってきたが、アッサム地方は、いまだに「線具」が生活のなかで生産、使用される現場を観察することのできる稀少な地域である。

以上のように、アッサム地方を研究対象として選択した理由は、自然素材の「線具」の制作と利用の実態を観察できること、自然素材から人工素材への変化の過程を観察できること、さらにモビウスラインに位置することから、パレオアジア研究に寄与できると考えたことである。

3. 現時点で明らかになっていること

現地地点で明らかになっているのは、以下の5点である¹⁾。

1) 環境

環境が多様であるために生業が複合的に展開し、周辺の自然から多種類の材料が得られることが、「線具」の多様性を生みだしている。世界的にみても、アッサムにおける「線具」の多様性と利用の多さは群をぬいている。浅田は、ブラフマプトラ川渓谷内部は、大きく氾濫原地形で湿潤モンスーンだと一括できるものの、内部の地形や気候の地域差が大きいとして、自然環境に加えて土地利用や生業活動を加味した「生態区」という概念をもちいている。「生態区」に従うと、ブラフマプトラ川渓谷内部はさらに、山地区、山麓区、平野区、氾濫原区、河川区の5つに分けられる。そして、それぞれの生態区において特定の民族が卓越して居住し、生態環境に適した生業を組みあわせて生活を営んでいることが示されている(浅田 2014: 31-32)。それら生業には、移植栽培と直播栽培の二種類の稲作、漁業、家畜飼養、養蚕、林業などがあり、生態環境にあわせて複合的に展開している。そして、生業に必要な道具として個別の用途に見合った多様な「線具」が制作、使用されている。

たとえば、家畜飼養という生業にはウシをつなぐという作業があり、その作業を可能にするためにヒモという「線具」が作られている。また、ウシをつなぐ、という用途には、紐の強度と柔軟性が求められ、それを満たすための素材としてジュートが選択されている。「線具」の素材として、植物性のタケ、ラタン、ジュート、ヤシ、木綿や、動物性の野蚕が観察された(図3~6を参照)。

2) 技術

「線具」をうみだす技術的特徴としてもっとも重要なのは、線から面や立体をうみだすことができるということ

である。たとえば、糸から布、タケヒゴからカゴや屋根材を製作することができる。例えば、エリ蚕(*Samia cynthia ricini*)から糸という「線具」がつけられている。糸は加工されることでさらに、布という面をうみだす。タケを割ったものは、それ自体で「線具」として成立し、柵として使用されるが、さらに加工されることで、扉(面)や、漁具のビク(立体)をうみだす(図7~12を参照)。

3) 社会制度

アッサムにおいて、「線具」の多くは、素材の採取から製造の各工程にいたるまで一貫して自家生産される。インドで製造業の多くは、カーストによる分業と結びついているが、「線具」の生産にはそれがみられないのが特徴である。また、素材と技術がジェンダー化されている。すなわち、糸や布は女性、タケは男性が扱うという社会的分業がなされている。

4) 観念

「線具」には守護的な意味をもっているものもある。たとえば、アッサムでは、冬の終わりに「悪い風」から身体を護るために、女性達が家族の手首に糸を結びつける(図13参照)。

5) 文化接触の事例

工業製素材による代替がおこなわれている場合でも、従来の道具の構造自体が代替されるのではなく、「線具」の組み合わせのなかに部分的に組み込まれている。たとえば、高床式の柱部分のみコンクリートに代替されるものの、上部は天然素材の「線具」が残されている。あるいは、タケの柵は、タケを割った棒状のものをタケヒゴで括り留めるが、タケヒゴがプラスチック製の紐に代替されている。また、タテ糸に工場製糸をつかい、ヨコ糸に手紡ぎ糸を使って、手織りで布を織るなどがみられる(図14~16を参照)。

4. まとめ

本研究では、インド北東部に位置するアッサム地域での調査に基づいて、「線具」利用の分析を行った。そこで得られた知見は、パレオアジアにおいて新人が紐状の道具をどのように展開してきたか明らかにする手がかりを提供すると考える。なぜなら、道具の展開は、単に技術的な側面のみで理解できるものではなく、環境、社会制度、観念といった領域との関わりのなかで理解すべきであり、「線具」の製作・使用現場における現地調査は、技

術とそれらの領域との関わりを観察可能にするものだからである。

今後の展望として来年度は、多様な植物由来の「線具」のなかでもとりわけ、タケに注目して研究を進めることを想定している。タケに注目するのは、アッサム地方においてタケ利用が多いこと、タケ素材の栽培から利用までの現場をおさえられること、タケの種類別の使い分けが明確になされていることなどが理由である。

注

- 1) 今後は、アッサムにおいて「線具」の悉皆調査をおこなう予定である。そのための調査項目の策定にあたって、本年度は、アイヌの民具資料の調査をおこなった（上羽・金谷・中谷 2017）。

参考文献

Baruah, S. K., Bhattacharjee, N. (ed.)
 1981 *Census of India Part-XD series3, Assam, Handicraft Survey Report, Endi Silk Industry of Assam*. Delhi: Controller of Pub.

Cantlie, Audrey
 1984 *The Assamese: religion, caste, and sect in an Indian village*, London: Curzon Press.

Hardy, Bruce L. et al.
 2013 Impossible Neanderthals? Making string, throwing projectiles and catching small game during Marine Isotope Stage 4 (Abri du Maras, France). *Quaternary Science Reviews* 82: 23-40.

Konwar, Juri Gongoi
 2013 *Warp & Weft textile tradition of the bodos*. Guwahati: Purbanchal Prakash.

Maxwell-Lefroy, H., and Ghosh, C. C.
 1912 *Eri silk. Memoirs of the Department of Agriculture in India, Entomological Series. vol.4, no.1*. Thacker, Spink & Co, W. Thacker & Co.

Mazumdar, Labanya
 2013 *Textile Tradition of Assam: An empirical study*. Guwahati: Bhabani Books.

Nath, AJ, G. Das & AK Das
 2007 Traditional knowledge base in the management of village bamboos: A case study in Barak Valley, Assam, Northeast India, in *Indian Journal of Tradi-*

tional Knowledge Vol.8(2), April pp.163-168.

Ranjan, M. P.
 1986 *Bamboo and Cane Crafts of Northeast India*. National Institute of Design. New Delhi, India: Development Commissioner of Handicrafts.

Sarma, Mrinmoy K.
 2008 *Traditional Crafts of Assam*. Delhi: Anshah Publishing House.

Zethner, Ole, Rie Koustrup, A M Saleh Reza, D & N Barooah, D K Subba, M M Win, S Tiwari, Y Dhoj, G & R Ali Bajwa, D Ahangama.
 2015 *South Asian Way of Silk*. Assam: Book bell.

Zethner, Ole, Koustrup, Rie and Barooah, Dilip
 2012 *Indian ways of Silk*. Bhabani Books.

浅田晴久
 2014 「インド北東地方の生態環境と多民族社会—アッサム州ブラフマプトラ川溪谷の事例より—」『広島大学現代インド研究—空間と社会』Vol.4: 29-40

2015 「アッサム地域研究の現状と課題」『奈良女子大学地理学・地域環境学研究報告』8: 31-47。

2017 「インド・アッサム州、ブラマプトラ川氾濫原におけるムスリム移民の生業活動と土地利用—ヒन्दゥー教徒住民との比較を通して—」『広島大学現代インド研究—空間と社会』7: 1-18。

上羽陽子、金谷美和、中谷文美
 2017a 「線具 lineware」—紐と糸をめぐる技術民族誌的研究」『パレオアジア文化史学 B01 班研究報告書 No.1』10-15 頁。

2017b 「アイヌ民族の可塑性「線具」にみる素材・製作技術の多様性」パレオアジア文化史学第4回研究大会発表、2017年12月9～10日、東京大学理学研究科。

金谷美和、上羽陽子、中谷文美
 2017 「インド、アッサムにおける生態資源利用—「線具」を中心に」パレオアジア文化史学第3回研究大会発表、2017年5月13～14日、国立民族学博物館。

木村真希子
 2012 「特集論文 社会運動と集会的暴力—アッサムの反外国人運動と「ネリーの虐殺」を事例に」『現代インド研究』2: 21-34。

栗田靖之編
 1989 『北東インド諸民族の基礎資料』国立民族学博物館研究報告別冊9号。

* 本研究の一部は、科学研究費補助金 (26244053) により行われたものである。

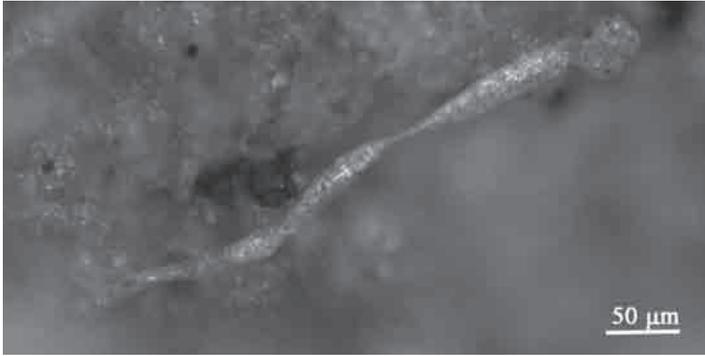


図1 ネアンデルタール人が使用していたとみられる繊維状の紐
[Hardy 2013: 28]

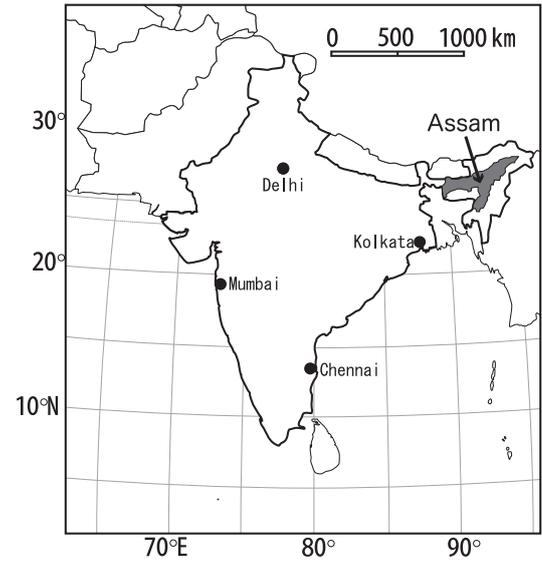


図2 インド、アッサム地図



図3 車幅を測るためのタケ尺



図4 農地を区切る柵と門はタケ製



図5 キンマの葉を束ねるヤシの葉軸



図6 ウシをつなぐジュート製ヒモ



図7 エリ蚕



図8 エリ蚕糸



図9 エリ蚕の布



図10 タケ加工



図11 タケ製の扉



図12 タケ製の漁具



図13 守護の糸



図14 住宅の柱はタケ製からコンクリートに代替されている



図15 タケの結束具



図16 プラスチックに代替された結束具

図3～図16はすべて、2017年3月アッサムにて撮影。
図6、図9、図13は上羽陽子撮影、その他は金谷美和撮影。

中央アジアの草原地帯における墓制の展開 —カザフスタンでの調査から—

藤 本 透 子

(国立民族学博物館)

1. はじめに

本稿では、複数の集団間の接触のなかで、墓をめぐる社会的制度（墓制）がどのように展開してきたのかを、考古学や歴史学の文献も参照しつつ、主に文化人類学的手法（聞き取り、参与観察）を用いた現地調査に基づいて検討する。文化人類学は現生人類を対象としており、「パレオアジア文化史学」プロジェクトのなかでB01班は、新人の文化や行動にかかわる研究を担当している。現代における文化人類学の調査から、旧人と新人の接触がどのようなものであったのかを、直接的に敷衍することはできない。しかし、新人の集団が自然環境に適応しながら多様性を獲得し、新人の集団どうしが接触する中でいかなる社会的プロセスが生じたのかを検討することは可能であろう。また、新人の行動と物質文化の関連を検討することも、文化人類学の調査から可能な点である。

特に墓制に着目するのは、墓や墓地という目に見える具象物が、社会関係のあり方や、死後の世界の観念を反映していると考えられるからである。つまり、考古学が具体的に対象とする物質文化と、文化人類学が参与観察や聞き取りによって明らかにし得る社会関係や宗教的観念が重なり合うテーマであり、本プロジェクトにおいて共同で研究を進めていく手掛かりになるだろう。

実際に、考古学においても文化人類学においても、墓制は重要なテーマのひとつとなってきた。マックブレアティとブルックスは「現代人的行動の考古学的指標」を「生態」「技術」「経済と社会構造」「象徴行動」の4つに分類し、「副葬品、顔料、儀礼品を伴う埋葬」を「象徴行動」のひとつとして指摘した（McBrearty and Brooks 2000）。こうした研究をふまえて、本プロジェクトに先行する「ネアンデルタールとサピエンス交代劇の真相」プロジェクトでは、西アジアの事例に基づき現代人的行動（新人的行動）の出現パターンが検討された（門脇 2013）。何をもちて旧人と異なる新人の行動の特徴とみなすのかは議論されているところであるが、少なくとも新人の社会に関して考える上で墓制が重要な点のひとつであるこ

とは間違いないであろう。これまで筆者が行ってきたカザフスタンでの人類学調査に基づく（藤本 2011）、マックブレアティとブルックスが「経済と社会構造」に含めた「人工物による集団・個人の表出」「居住域の構造化」なども（McBrearty and Brooks 2000: 492）、墓の形状や墓地形成に関わる重要な点である。以下では、2017年3月と7月のカザフスタン調査および文献調査に基づいて報告する。

2. 集団の移動と接触

はじめに、中央アジアがどのような地域であるのかを確認し、人の集団の移動と接触について概観しておきたい。新人がユーラシア大陸に拡散した際のルートとして、西アジアから東アジアへ向けて、ヒマラヤ山脈をはさんで「北廻り」と「南廻り」の2つが想定されているが、中央アジアはこの「北廻り」ルート上にある（西秋 2016: 36）。中央アジアの地理を概観すると、西部のカスピ海周辺には海拔以下の低地があり、東部に行くにしたがって次第に高度が上がり、南東部には6000～7000メートル級のパミール高原がそびえて東部の天山山脈につながる。中央アジアの北東部にはアルタイ山脈があり、モンゴル、シベリアに接する。一部の山岳地帯をのぞけば、中央アジアの自然環境は全体的に乾燥しており、南部にはオアシスが点在し、北部には草原（ステップ）地帯が広がる。オアシスが点在する地域は現在のウズベキスタンなどにあたり、草原地帯（カザフ草原）は現在のカザフスタンにあたる。

中央アジアに新人がどのように進出して定着していったのかについては、A01班によってウズベキスタンとカザフスタンでの考古学調査に基づいて研究が進められている（西秋 2017, 国武 2017）。一方、B01班では筆者を含む3名が中央アジアのウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン（キルギス）で文化人類学の調査研究を行っている。文化人類学が主な対象にし得るのは19世紀以降であり、狩猟採集を主な生業とする社会は中央アジ

アにすでにない。B01 班の池谷は「先史時代と現在との間に、いくつかの時期を仮に設定して歴史的に長期間にわたる狩猟採集民の動向をみていく」ことを提唱しているが（池谷 2017：6）、狩猟採集民が現在ではない地域ではどのような方法があるだろうか。狩猟採集に限らず、牧畜や農耕も含めた生業に着目しながら、中央アジアの先史時代から現代までを概観することが、集団の形成、移動、接触の見取り図を得ることにつながるだろう。

狩猟採集の時代を経た後、西アジアで始まった農耕と牧畜はユーラシアに広く伝わっていった。青銅器時代に南シベリアから中央アジアにかけて広がっていたアンドロノヴォ文化では、定住集落が形成され農牧複合経済が営まれていた。やがて気候の乾燥化にともなって、紀元前 1,000 年頃に北部の草原でウマの騎乗が一般化して移動しながら牧畜を営む遊牧民が生まれ、南部では農耕に特化した集団が生まれた（林 2000：19-23）。つまり、農耕牧畜複合から、遊牧と、定住型の農耕が分離し、それぞれに生業の異なる集団が生まれたことになる。

このことは、集団の移動や接触と深くかかわってくる。石器時代における人の集団の大きな移動の波は、西から東に向かっていた。これに対し、後期青銅器時代から鉄器時代以降には、東から西へと向かう移動が見られるようになり、その主力が遊牧民であったとされる（林 2012：200-201）。さらに時代を下ってからも東方から西方へと遊牧民の移動が見られ、6～8 世紀にはテュルク系の遊牧民である突厥がモンゴル高原から西方に進出して、それまでイラン系の住民が主であった中央アジアがテュルク化する契機となった。13 世紀にやはり東方から進出したモンゴル帝国は、中央アジア現地の言語や生業を大きく変えることはなかったが、支配層が土着化してテュルク系遊牧民のあいだで影響力をもった。例えば、15 世紀～19 世紀にはテュルク系遊牧民であるカザフが草原地帯で国家（カザフ・ハン国）を形成し、モンゴル帝国時代のチンギス・ハンの子孫が支配者層の中心を担った。一方、オアシス地帯では、イラン系に加えて一部のテュルク系遊牧民も、都市とその周辺の農村に定住化した。大きく見れば東から西へと移動してきた流れは、17～18 世紀ころからロシア帝国が西から東へと拡張したことで変わっていった。特に 19 世紀以降には、中央アジアの草原地帯にスラヴ系の農耕民が移住してテュルク系遊牧民と直接的に接触するようになった。

こうした移動と接触によって、移住者集団と先住者集団のいずれの要素が強く表れたかは一律ではない。また、集団間の接触により、ある社会が全面的に変化するかどうかではなく、社会の諸側面で異なる変化が実際には見られることを、中央アジアの事例は示している。つまり、

生業、居住形態、言語、宗教などの諸側面によって変化が異なる場合が多い。言語は変化しなかったが生業は変化する、あるいは生業は変化したが生業は変化しないなど、部分的な変化が生じてきたのである（藤本 2017：26）。

さらに、集団の直接的な接触の範囲を越えて、宗教が広範に伝播する可能性があることにも留意しておきたい。イラン系の定住民として紀元前から紀元後 10 世紀ころまで栄えたゾロアスター教を信仰した一方、6 世紀ころから隆盛したテュルク系遊牧民はテングリ（天）への信仰を特徴としていた。しかし、8 世紀にアラブによって西アジアから中央アジア南部に伝播したイスラームは、定住民から遊牧民へと伝わり、次第に中央アジア全体で信仰されるに至った。以上の集団の移動や接触と宗教の伝播は、墓制にも大きな影響を与えた。

3. 墓制の歴史の変遷

中央アジアにおける集団の移動と接触の状況をふまえて、墓制の歴史の変遷を見ていきたい。2002 年から、筆者はカザフスタン北東部のパヴロダル州バヤナウル地区（図 1）で文化人類学の調査研究を行ってきたが、本プロジェクト開始後の 2017 年 3 月に、州都にあるパヴロダル国立大学の考古学資料室を見学した。考古学資料室には、州内で発掘された資料が展示されていた。旧石器時代の石器が本プロジェクトのテーマに関係するものであったが、旧石器時代と新石器時代の墓制に関する出土資料は残念ながら展示されていなかった。

墓制にかかわる考古学資料としては、パヴロダル州で発掘された墓地の復元展示が 3 点あった。もっとも古いものは、青銅器時代、紀元前 16 世紀のアンドロノヴォ文化に区分されている屈葬（パヴロダル州イルティシュ地区カラトムスクで出土）の写真と、その復元模型であった。次に、同州クダイクル湖近郊に位置するクルガン（古墳）の写真が展示され、匈奴とサルマタイの時代に同定されていた（紀元前 2 世紀から紀元 2 世紀頃を指すと見られる）。また、匈奴とサルマタイの時代の埋葬の復元展示では、人骨の頭部近くにウマの頭骨 3 点とアルガリの頭骨 1 点とみられる動物の骨、人骨の手にはウマなどの肩甲骨と見られる骨が副葬されていた。最も時代の新しい復元展示は、9～10 世紀のキマクと呼ばれる遊牧民の墓であり、鎧と土器と家畜の骨らしきものが副葬されていた。

調査地周辺におけるこうした墓制の変遷は、大きく見れば中央アジア北部を含めたユーラシア大陸内奥の草原地帯の特徴を示しており、中央アジア南部のオアシス地

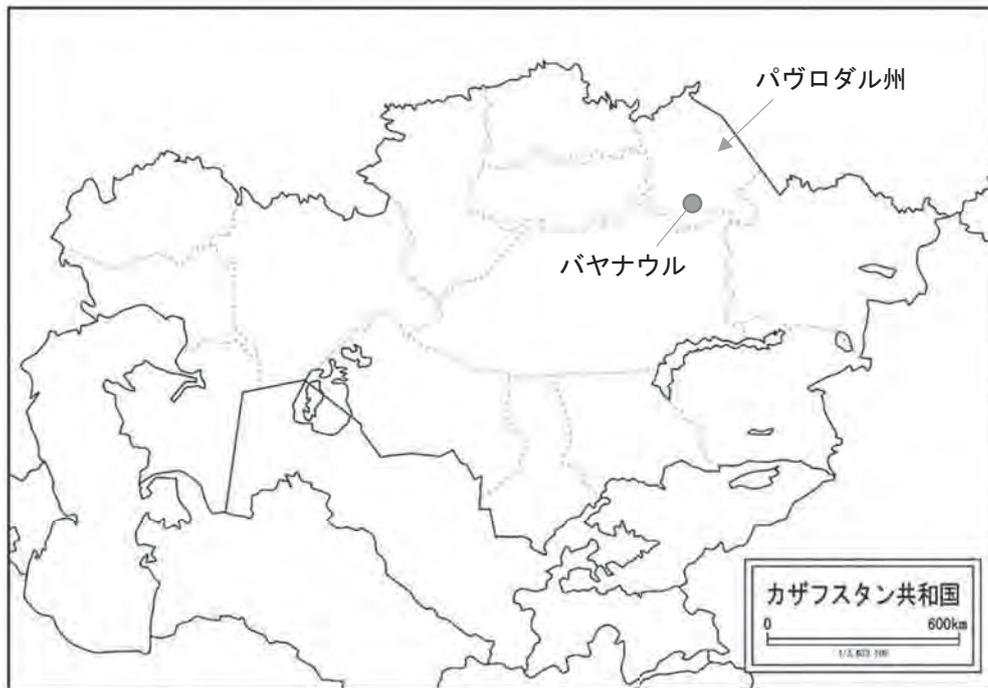


図1 カザフスタン

典拠：白地図 (<http://www.freemap.jp/item/asia/kazakhstan.html>) を基に筆者作成。

帯における埋葬方法とは異なっている。オアシス地帯の墓制を全体的に把握するには至っていないが、例えばソグドのオッサリと呼ばれる粘土製の蔵骨器（納骨器）が、現在のウズベキスタンから出土しており、5～8世紀と同定されている。ソグドは、死者を集落から離れた小高い丘に置き、鳥や特別に飼われた犬に死体を食ませた後、オッサリに骨を入れ墓に収めた。これは、イランで誕生してソグドで独自の展開を遂げたゾロアスター教の観念に基づいているという（荒井 2005：138-141）。

しかし、草原地帯とオアシス地帯それぞれに特徴的であったこうした墓制は、現在では見る事ができない。8世紀にアラブとの接触によりイスラームが伝えられて以降、イスラームはオアシス地帯の定住民から草原地帯の遊牧民へと徐々に伝播していった。それに伴って、土葬で副葬品を伴わない埋葬が広まっていったと見られる。イスラームの教義に基づく、死は最後の審判までの一時的な状態である。死者には死装束を着せ、葬送礼拝をおこなった後、メッカの方角に顔を向けて横たえて土葬し、副葬品は特にない。パヴロダル国立大学の考古学資料室には、15～17世紀のカザフ・ハン国時代の墓の写真も展示されていたが、目立った副葬品は無く、地上には石碑や墓廟が築かれていた。こうしたイスラーム化以降の墓制が、現在の中央アジアの墓制に直接的につながっている。

では、イスラームの伝播により墓地のあり方は均質化

したのだろうか。実はそうではなく、草原地帯とオアシス地帯で異なる傾向が見られる。オアシスでは、イスラームの聖者の墓に墓廟が建てられ、周辺には定住民の墓地が形成されてきた。その一方で、草原や山岳の遊牧民のあいだでは、父系出自集団ごとに墓地が形成されることが多かった。居住形態と社会関係が、墓地形成に深くかかわってきたのである。こうした変遷をふまえた上で、19世紀頃から草原地帯でロシアの農耕民とカザフ遊牧民が直接的に接触し、20世紀にカザフが定住化したことが、墓制とどのように関係するのかを次節以降で検討していきたい。

4. 居住形態と墓地形成

カザフスタンの広大な草原を移動すると、墓地が点在していることに気づく。カザフスタン北東部の調査地の事例を中心に、居住形態と墓地形成の関係をみていくと、遊牧に従事し季節移動していた20世紀初頭までと、1930年前後に定住化して以降とで、墓地のあり方は大きく変化したことがわかってきた。

まず、カザフが季節移動していた時代には、移動の単位は父系出自集団であった。中央アジアにおける季節移動には、山岳地帯における高低差を利用した移動と、草原における南北の気候の差を利用したものがある。カザフ草原は多少の起伏はあるものの平原であり、季節移動

は基本的に南北移動であった。夏は草が豊かに生い茂る草原で小規模な移動を繰り返しながら放牧したが、冬には丘陵や森の近くなど風雪を避けることができ、小川や井戸などの水源にも恵まれた地点に天幕を張った。冬営地に適した場所は限られており、5～6世代の深度で祖先を共有する父系親族が、ひとつの冬営地を共有することが多かった（藤本 2011：224-226）。冬営地は夏営地に比べて固定的であり、冬営地付近には父系親族の墓がしばしばまとまっている（写真1）。つまり、19世紀から1920年代までの墓地は、主に父系出自集団ごとに、丘陵近くや川辺などの冬営地の近くにあることが多い。

なお、モンゴル出自でチングス・ハンの末裔である人々（トレ）と、アラブ出自で預言者ムハンマドの子孫などを名乗るイスラーム布教者の家系の人々（サイイド、コジャ）は、「白い骨」と呼ばれ、19世紀にはカザフ社会の上層部を形成していた。調査地では、モンゴル出自のトレの墓はないが、アラブ出自とされるコジャの墓がある。19世紀にはコジャは知識人として、カザフ人有力者に雇われていたという。このため、カザフ人有力者の冬営地付近の墓地に、アラブ出自とされるコジャの墓もある。

ロシアが中央アジアに進出すると、19世紀にロシア農耕民が大量に中央アジア北部に入植したことにより、従来のカザフの放牧地はしばしば占領された。土地不足により季節移動の距離は短くなり、18世紀に1,000キロであった南北移動は、20世紀初頭には100～200キロと短くなり、定住化の傾向が見られるようになっていった。冬営地には、しばしば定住家屋も設けられた（藤本 2017）。こうした定住化へ向けての流れを決定的にしたのが、1920年代末におけるソ連の政策であった。ソ連領中央アジアにおける遊牧民の強制的な定住化政策は、父系出自集団を基盤とする生業形態を根本的に変えようとする意図のもとに行われた。新たな定住村落は特定の父系出自集団を基盤とせず、複数の父系出自集団が集住する形をとっていた。これにともなって、定住村落の共同墓地が形成された。5～6世代の深度をもつ父系出自集団の墓地が点在する状況から、定住村落の共同墓地に複数の父系出自集団に属する人々が埋葬される状況へと変化したのである。

5. 墓の形状と宗教的観念

現在の村落の墓地（写真2）は、前節で述べたカザフの有力者一族の墓地が、定住村落の形成後に、複数の父系出自集団の人々が埋葬される共同墓地として発展したものである。このため、19世紀から現在に至るまで墓が作られ続けている。網羅的な調査は今後の課題であるが、

今年度までの調査で分かったおおよその傾向について整理しておきたい。墓の年代は、墓碑に記載された没年から推定できるが、墓碑や囲いが後年に設置された場合もあるため注意が必要で、村人からの聞き取りをもとにおおよその年代を確認しつつ作業を進めている。

19世紀から20世紀初頭までの墓の多くは、盛り土の上に自然石だけが置かれている。カザフは多くの遊牧民と同様に口頭伝承が発展していた一方で、識字は一部の知識人や有力者に限られていたため、19世紀の有力者などの墓にのみ墓碑が見られる。墓碑銘は主にアラビア文字表記のカザフ語だが、19世紀にロシア帝国から地域の行政官に任命されていた有力者の墓にはロシア語で墓碑銘が書かれていた。有力者が他の集団との接触の局面に立ちやすいことが、墓碑にも表れているといえよう。ただし、ロシア語の墓碑銘はきわめて少なく、カザフ社会全体には定着しなかった。

村の共同墓地の一角には、ほぼ平坦な地面に自然石のみが点在する墓が見られるが、これは1930年代初めの餓死者の墓であるという。前述のように1920年代末に定住化政策がとられ、それまでの父系出自集団を基盤とした生活形態が大きく変化させられ、財産（主に家畜）の分配によって平等な社会が目指されたが、このことは逆に社会の混乱を生み、寒雪害とあいまって家畜頭数が減少し、食糧不足から餓死者が続出したのである。当時は飢餓のために余裕がなく、埋葬して自然石を目印に置くことしかできなかったという。

次に墓碑銘が確認できたのは、主に1950～1960年代以降である。カザフ語などの中央アジアの諸言語は、1938～1940年にキリル文字で表記されるようになったが（帯谷 2005：506）、調査地では1960年代までの没年の墓に、キリル文字表記のカザフ語とアラビア文字表記のカザフ語が併記されている墓碑が見られた。1960年代の墓碑は、アラビア文字に親しんだ世代の人々がまだ多かったことを示すものだろう。1970年代以降の墓碑は、ほぼキリル文字表記のみとなっており、アラビア文字からキリル文字への転換が、政策より少し遅れて墓碑に反映されたことになる。

墓碑に記されている内容は、埋葬者の名前、生年と没年、父系出自集団名などである。このことは、定住村落においても、父系出自集団の意識が継承され続けたことを示している。また、1950年代以降の没年が記された墓碑の多くに、イスラームを象徴する三日月や、三日月と星の印が刻まれていた。当時はソ連時代であり、イスラームが限定的に認められていたものの、反宗教宣伝が繰り返行われていた。にもかかわらず、墓碑を建てる習慣が一般化していく過程で、墓碑にはイスラームの印が刻



写真1 定住化前の冬营地近くにある古い墓地。川の向こうに低い石積みの囲いが見える。カザフスタン、パヴロダル州バヤナウル地区、2016年撮影。



写真2 現在の定住村落の共同墓地。墓地全体を囲む柵の向こうに、1990年代以降の墓があり、石積みのドームや三日月の印が見える。カザフスタン、パヴロダル州バヤナウル地区、2007年撮影。

まれる場合が多かったことがわかる。その一方で、ソ連時代には、肖像写真を焼き付けたプレートが墓碑に取り付けられていることも多い。これは偶像崇拜につながる肖像画などを禁じたイスラームの規範には反しており、ソ連時代に肖像写真が普及したことの影響である。ソ連が解体してカザフスタンが独立した後も、肖像写真をもとに墓碑そのものに線刻するかたちに変化しながら、2000年代まで肖像画が見られた。しかし、2000～2010年代に三日月と文字のみの墓碑もあることは、ソ連解体後に再びイスラームへの関心が高まり、イスラームの規範に基づいて肖像を刻印しなくなった人々がいることを示している。2010年代の墓碑のひとつには、クルアーンの章

句と見られるアラビア文字も、三日月の印のそばに刻まれていた。このように、宗教をめぐる状況の変化のもとでの個々の家族の選択が墓碑から読みとれる。

もう一つ注目されるのは、墓の囲いである。現在の村の共同墓地（写真2参照）は、家畜が踏み込まないように墓地全体が柵で囲われている。また、家畜だけでなく人が誤って埋葬場所を踏むことがないように、個々の墓の盛り土の周りを鉄製の柵や漆喰の壁などで囲むことが多い。没後しばらく経った墓に改めて囲いを設置することもあるため、正確な年代を推定することは難しいが、19世紀までは一部の墓のみが干し煉瓦や低い石積みなどで囲われ、ソ連時代以降に鉄製の柵や漆喰塗りの壁などが設

けられ始めたようである。1990年代頃から墓の囲いは大規模化し、コンクリートの土台の上に、近郊で採取した緑色がかった石や赤褐色の石を1メートル以上の高さまで積み、その上部を漆喰で固めた形状がみられる。さらに、いくつかの墓は、囲いの四隅にドーム状に石を積み、囲いの入り口には人の背丈より高くアーチ状に石が積まれている。ドームなどの上部に三日月の形の金属板が設置されている場合もある。カザフは、死者儀礼を盛大におこなう場合が多いという特徴があるが（藤本 2011）、墓も重視していることがうかがわれる。

集団の移動や接触との関連をいま一度検討すると、カザフの墓には、父系出自集団の意識、ロシアとの接触の状況、イスラームにかかわる宗教的観念などが表出していた。父系出自集団ごとに墓地が形成されていた時期を経て、定住化にともなって共同墓地が形成された後、区別のために父系出自集団の名称が墓碑に刻まれた可能性がある。さらに、父系出自集団を越える、より大きな集団としてロシアとカザフという民族間の接触が見られた。ロシアとカザフの差異は、基本的に定住農耕民と遊牧民であったという生業の違いだけでなく、キリスト教（ロシア正教）とイスラームという宗教の違いにも対応していることが、墓の形状に示されていた。カザフスタンに移住したロシア人の墓地にはロシア正教の十字架が立てられており、カザフなどムスリムの墓地に三日月の印などが見られることは対照的である。

カザフはロシアとの接触により居住形態を変化させ、それにもともなって墓地の場所や埋葬される人々の範囲も変わったが、宗教的観念に基づく埋葬の基本的な形態は継承してきたことが、墓の形状から読みとれる。外部から新たにもたらされた肖像などの要素は、宗教をめぐる状況が変化する中で、個々の家族や個人による選択の積み重ねにより、社会に定着するか否かの過程が進展中であつた。墓の周囲に高く石を積み上げてドームやアーチを作ることについては、今後さらに聞き取りを進める必要があるが、カザフ社会の内部における新たな展開である可能性が高い。

6. おわりに

中央アジアにおける集団の移動と接触を概観した上で、文化人類学が対象とする19世紀から現代にかけての事例を分析してきた。現地調査の方法として、大きく分けて定性調査と定量調査があるが、本稿では墓制にかかわる定性調査の結果（集団間の接触、居住形態、社会関係、宗教観念とその変化など）を報告した。定量調査として今後考えられるのは、人口の変化、墓地の分布数、各墓

地の墓（埋葬者）数、形態別・年代別の墓の数などをできる限り把握することである。比較の視点から、中央アジアの山岳地帯、草原地帯、オアシスの事例を検討することも今後の課題である。その最初の試みとして、2017年12月の第4回研究大会では、藤本、吉田、菊田が共同で「集団間接触と墓制の変遷—中央アジアにおける定性・定量調査の可能性」というタイトルで口頭発表した。本稿では筆者が調査した草原地帯の事例を中心に取り上げたが、山岳地帯やオアシスの事例と比較検討していくことで、異なる環境のもとでの集団の接触と社会の変化を明らかにしていくことができるだろう。

B01班の代表者の野林は、外部集団との接触による変化に加えて、集団内での自律的・偶発的変化も、分析の視点となることを指摘している。また、変化が生じる要因だけではなく、変化が定着する条件にも留意する必要があると述べている（野林 2017:3）。生業などにかかわる技術のみならず、墓制に関して分析を進めていく上でも、これらの点は重要である。さらに、外部の影響を取り込みながら集団内の論理で再解釈し位置づけていく文脈化の過程にも、注意を払う必要があるだろう。カザフ社会では、イスラームが浸透する以前からの信仰に根差すとみられる、大規模な死者儀礼も行われている（藤本 2011:212-14,313）。こうした大規模な死者儀礼ではウマが屠られ共食されるが、考古学調査から明らかになっている過去のウマの副葬が、現代のカザフの死者儀礼におけるウマの屠畜に変化したという指摘もある（Toleubaev 1991）。本稿で取り上げた墓制は、死者のために儀礼をするという行動とも密接に関係している。物質文化と行動との関係をさらに検証していくことで、社会が連続性をもちながらも大きく変化していく過程を探っていきたい。

参考文献

- McBrearty, S. and A. S. Brooks
 2000 The Revolution That Wasn't: A new interpretation of the origin of modern human behavior. *Journal of Human Evolution*, 39: 453-563.
- Toleubaev, A. T.
 1991 *Relikty doislamskikh verovanii v semeinoi obryadnosti kazakhov*. Alma-Ata: Galym.
- 荒井信貴
 2005 「シルクロードの交易—ソグド人とゾロアスター教」加藤九祚監修『偉大なるシルクロードの遺産展』東京：キュレイターズ、pp.132-139.
- 池谷和信
 2017 「序論 狩猟採集民からみた地球環境史」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史—自然・隣人・文明との共生』東京大学出版会、pp.1-21.
- 帯谷知可
 2005 「支配者と文字—文字政策 [旧ソ連地域]」小松久男ほ

-
- か編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、pp.505-506.
- 門脇誠二
2013 「アフリカと西アジアの旧石器文化編年から見た現代人的行動の出現パターン」西秋良宏編『ホモ・サピエンスと旧人—旧石器考古学から見た交代劇』東京：六一書房、pp.21-37.
- 国武貞克
2017 「カザフスタン南部における後期旧石器時代遺跡の踏査」小林豊編『パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第4回研究大会』（予稿集）、pp.43-45.
- 西秋良宏編
2016 『パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第1回研究大会』（予稿集）。
- 西秋良宏
2017 「アジアにおけるホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年的枠組み構築—2016年度の取り組み」西秋良宏編『文部科学省科学研究費補助金（新学術領域研究）2016-2020 パレオアジア文化史学 A01班 2016年度研究報告』pp.1-9.
- 野林厚志
2017 「計画研究 B01 班のねらい」野林厚志編『パレオアジア文化史学 B01班 2016年度研究報告 人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』pp.1-4.
- 林俊雄
2000 「草原世界の展開」小松久男編『中央ユーラシア史』山川出版社、pp.15-88.
2012 「ユーラシアにおける人間集団の移動と文化の伝播」窪田順平監修、奈良間千之編『中央ユーラシア環境史1 環境変動と人間』pp.164-208.
- 藤本透子
2011 『よみがえる死者儀礼—現代カザフのイスラーム復興』風響社。
2017 「集団間の接触にともなう居住形態の変化—中央アジアのカザフスタンの事例を中心に」野林厚志編『パレオアジア文化史学 B01班 2016年度研究報告 人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』pp.25-30.

墓の形態変化と集団間接触に関する一考察 ——中央アジア・クルグズスタン調査から——

吉田 世津子

(四国学院大学)

1. はじめに

人がどのようにして死を扱うのかは、同時代に生きる人間集団を研究対象とする文化人類学（以下、「人類学」）にとって非常に重要なテーマである。死への対処方法、死者の処遇の仕方は、生きることへの意味づけ、個人と集団との関係を浮き彫りにする（波平 2002: 220）。人類学と同様に考古学においても、死者の埋葬方法や埋葬地、墳墓とその形状、副葬品は中核的な研究対象といえる。マックブレアティとブルックスは「現代人的行動の考古学的指標」を4つに分類しているが、そのうちの1つである「象徴行動」に、「副葬品、顔料、儀礼品を伴う埋葬」を含めている（McBrearty and Brooks 2000: 492）。中央ユーラシアにおいても、「青銅器文化編年」のための2基準のうちの1つが葬制であったことから（藤川 1999: 6-8）、葬制、また墓制研究の重要性は明らかである。

このように埋葬とそれに伴うモノの研究は、人間集団の研究に不可欠のテーマといえるが、それは集団内に限定されるものではない。死者にどのような姿勢を取らせるのか、何かに納めるのかまた包むのか、どのような墓を作るのか、何を副葬品とするのか等々、一つ一つの項目を吟味することは、集団間の接触や交流の検討にもつながってゆく。本稿では上述のうちのような墓を作るのか、その形態に注目したい。筆者は北クルグズスタン（キルギス）においてクルグズ（キルギス）人社会を対象にフィールドワークを行ってきた。そこでは集団間接触によって居住地が変化し、それと共に墓の形状や場所にも変化が起きている。「パレオアジア文化史学」プロジェクトにおいて2017年に収集した資料を活用し、墓の形態変化と集団間接触について考えてみたい。まずは本論に入る前に、筆者の用いる研究手法とそれにより収集される資料の性質について触れておく。

人類学のフィールドワークは質的（定性）調査に分類され、現地の文化の厚い記述と深い考察を目的としている。フィールドで観察する事実を最大限に客観的に記録

し、現地の人々の解釈や観念を聞き取り、これらの調査データに文献研究を加えて考察し分析する（木下 2013: 248-312）。従って直接の対面調査が可能な地理的範囲（例えば町や村・集落等）で行なわれることが多く、筆者も一村落を対象としており、そのため本稿は極めて局地的な事例といえる。だがそこで観察され考察されることは、他地域、また異なる時代の社会（人間集団）とモノの関わりや集団間接触を検討する際の、参照枠となると考える。

それでは本稿の射程範囲を明らかにしておこう。本稿は主に、北クルグズスタン・ナルン州コチコル地区（図1）の一村落で収集した資料に基づいている。加えて首都ビシケク市で収集した資料をも活用する。時代的には20世紀前半（1920年代）から現在までが対象となる。上記資料に基づいて、①どこに死者を埋葬するのか（墓地の場所）、②誰を埋葬するのか（墓地のメンバー）、③地上に何を残すのか（墓とその形態）の3点を検討し、それが居住地の変化、集団間接触とどのように関わっているのかを考察する（以下、適宜表1参照）。

2. 歴史的背景

中央アジアにおいて遊牧が数千年の歴史を持つ生業であることは広く知られてきた事実であり、クルグズ人も伝統的に遊牧民であったテュルク系諸民族の一員である。また中央アジアではオアシス定住地帯を中心にイスラーム化が進展し、それはやがて草原や山岳地帯のテュルク系遊牧民にも波及していった。その歴史のなかでクルグズ人もムスリム（イスラーム信徒）となっている（吉田 2004: 58-60）。

19世紀後半からはロシア帝国の支配下に入り、現在のクルグズスタン北部にはスラヴ系のロシア人・ウクライナ人農民が大量入植した。このためクルグズ人とスラヴ系住民の間では、遊牧民の放牧地の大規模収用に端を発する土地問題と民族間対立が起きている。だがスラヴ系住民の中央アジア流入は、のちのクルグズ人の生活全般



図1 クルグズスタン（キルギス共和国）
白地図（<http://www.freemap.jp/item/asia/kyrgyzstan.html>）を基に筆者作成

表1 墓の形態変化と歴史的背景

	I	II	III-1	III-2	IV
時代	1920年代以前	1930～40年代	1950年代～1974年	1974年～1991年	1991年～現在
居住地	高山～山麓地帯	平原・川岸地帯	平原地帯		
	夏営地・冬営地	集落（複数）	村落（単独）		
メンバー	父系クラン（単独）	父系クラン（単独～複数）	父系クラン（複数）		
生業	遊牧	コルホーズ（複数）	コルホーズ（単独）	ソフホーズ（単独）	多様化
①墓地の場所	冬営地	集落近く	（旧集落近く）	共同墓地	
②墓地のメンバー	クラン・メンバー	クラン・メンバー		同一村落住民	
		同一コルホーズ員	（旧コルホーズ員）		
③墓と形態	盛り土				
	木片	粘土を固めた墓標	鉄柵		
			日干しレンガ		
			御影石		
			肖像写真プレート		
	(石)		文字のみ墓碑（コンクリート・石板）		
			造花		
			焼成レンガ		
大理石 写真絵付墓碑					

に多大な影響を与えている。1917年のロシア革命、1922年のソ連成立により、クルグズ人も社会主義体制下に入り定住した。全面的な定住化が進行したのは1920年代末～1930年代である（吉田 2004：60-61）。

定住化以前のクルグズ遊牧民の間では父系親族集団（父系クラン）が放牧地テリトリーを保有し、そのなかで近親のメンバーがグループを構成して共に遊牧してきた。

本稿の対象地域（以下、「対象地域」）は天山山脈北西端に位置するが、標高2,000m前後の山麓地帯を冬営地、標高3,000～3,500m前後の高山地帯を夏営地に、山岳地帯を垂直に季節移動していた（写真1・3、図2）。定住化に際しては主に平原地帯を中心に、1つの父系クラン、または複数の父系クランが合同して定住集落が形成された。1930～1940年代、複数の生産組織（コルホーズ＝集団

農場)が創設され、人々はいくつかの小規模な集落に分かれて居住した。1950年代には複数の生産組織が1つに統合され(コルホーズ、のちにソフホーズ=国営農場)、それに伴い人々も1つの大規模な村落に集住することになったのである(写真2・図2)(吉田 2004: 75-76, 85-97)。その後1991年にソ連が崩壊したためクルグズスタンは独立し、政治経済体制は劇的に変化した。対象地域の大部分の人々は、現在では農業を生計の柱としつつ家畜飼育・小売業・運送業等に従事している(吉田 2012)。

以上のことから対象地域の歴史的背景を時代・居住地・生業の観点から整理すると、

- I — 1920年代以前(ソ連以前)
標高2,000m前後の山麓地帯-冬営地/標高3,000~3,500m前後の高山地帯-夏営地
父系クラン保有の放牧地テリトリーを季節により垂

直移動-遊牧

- II — 1930~1940年代(ソ連時代)
標高1,900m前後の平原・川岸地帯
1つの父系クランまたは複数の父系クランが合同して複数の集落に定住-コルホーズ
- III — 1950年代~1991年(ソ連時代)
標高1,900m前後の平原地帯
複数の父系クランが合同して1つの村落に集住-コルホーズ/ソフホーズ
- IV — 1991年~現在(ソ連崩壊後)
居住地はIIIに同じ、生業は多様化

の4つに大別できる。なお、I~IVを通じて住民の圧倒的多数はクルグズ人である。IIIの時代にロシア人が数家族住んでいたが、1985年前後にはみな対象地域を去って行ったという(吉田 2007: 231)。それではI~IVと前



写真1 対象地域 高山地帯~山麓地帯~平原地帯 (2013年撮影)



写真2 対象地域 高山地帯(~平原地帯)~村落 (2013年撮影)

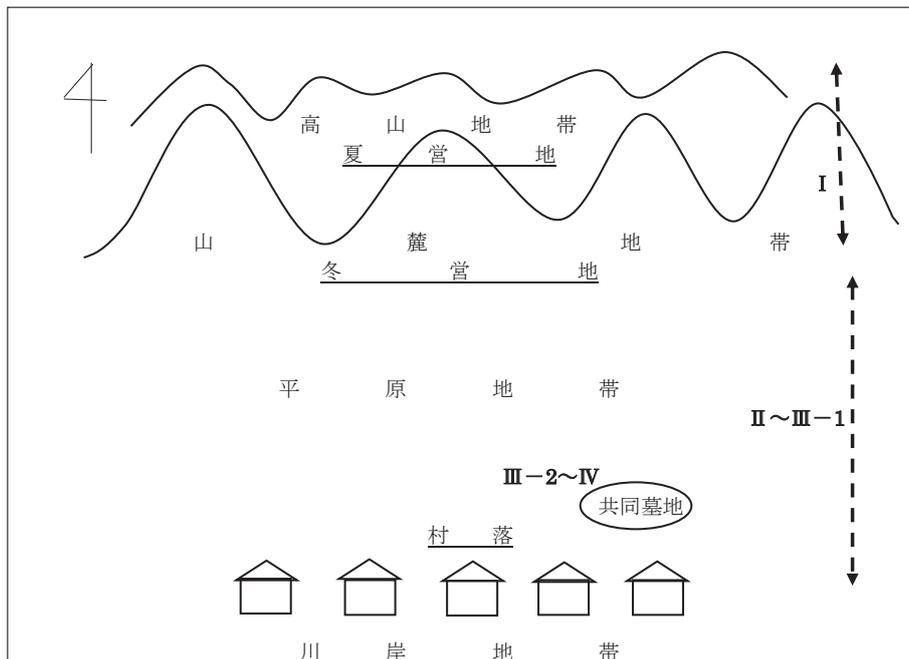


図2 対象地域 概略図

節①～③の関わり合いについて見てゆく。

3. 墓の形態とその変遷

クルグズ人の間では、1人1人が別個に土葬される個人墓が通常である。地面を掘り下げて埋葬されるが副葬品はなく、地上に1m前後の高さで楕円形に土を盛り上げる（以下、「盛り土」）。盛り土の周りを日干しレンガの壁や鉄柵で囲うことが多いが、ドーム型の囲いを建てる人も少数ではあるが見られる。近い父系親族同士や親子が数日～数カ月のうちに連続して死亡した際は、別個に埋葬したのち1つの囲いで囲うこともある。それではまずIから取り上げる。図表・写真を適宜参照されたい。

1) 冬営地の墓地と墓 —— I

およそ1920年代以前、対象地域のクルグズ人は主に父系クランごとに遊牧に従事していた。冬は防風に適した水場に近い山麓地帯で、夏はクランのなかの近親者とグループを組み高山地帯の放牧地で、宿営していた（写真3・図2）。当時、人々は冬営地に埋葬されていた（写真4）。夏営地では「人が来てくれない」ので、「埋葬することはなかった」と言う。夏営地で死亡した場合は冬営地まで遺体を運んでいた。

写真4は20世紀初頭と推測される時代の、ある父系クランの墓地である。囲いのない盛り土がいくつも並んでいるが、筆者はその上部に石がいくつか並べられているのを観察した。だが現地では「石は重いので昔はそれに耐えられないと言って、盛り土のてっぺんには木[片]を置いていた」と言う人もいる。写真4の墓地では既に木片は見当たらず、石は盛り土の側面を補強していたのかもしれない。

2) 平原地帯の墓地と墓 —— II

1920年代末にソ連体制による全面的集団化が始まると、対象地域のクルグズ遊牧民はみな定住し、1940年代までにほぼ定住化は完了した。人々は複数のコルホーズで働くとともにそれぞれの集落へ分散して定住した。集団化・定住化により創設されたコルホーズは、地区中心地からやって来たクルグズ人が組織したという。当時の集落は図2の平原地帯や川岸地帯に分散していた（写真5）（吉田2004：93）。集落は一つの父系クランが単独で定住することもあれば、複数の父系クランが合同して定住することもあった。死者は各集落の比較的近くに埋葬されるようになり、そうした墓地のいくつかが写真6～8に当たる。

写真6はある父系クランの墓地で、ソ連以前からクラ

ン・メンバーを埋葬してきた。写真4の墓地とは異なり、手前に多数並ぶ盛り土の上部に石は置かれていない。また写真左奥に見えるのは泥土を固めて建てた墓標で、当該クランの80代男性は「1930年代のものではないか」と推測している（写真9）。第二次世界大戦をはさむ1940年代は現地の人にとって何も物のない大変な苦難の時代であり、そのため当時の墓は、囲いのない「簡素な[盛り土のみの]墓だ」と言う。写真7では1つの父系クランに限定されない、同じコルホーズのメンバーが埋葬されていた。写真8は同一クランのメンバーが、IIの時代から埋葬されるようになったという。平地から少し盛り上がった小山ようになっており、草が生い茂っているため囲いのない盛り土だけの墓は、地面と見分けがつかなくなっている。

まとめると死者は集落近くで囲いのない簡素な盛り土の墓に埋葬され、時に写真9のような墓標も建てられた。墓地によっては複数の父系クランにまたがって、同一コルホーズ員が埋葬されるようになっていった。

3) 村落集住と墓地 —— III

1950年代に入ると対象地域の人々は1つの定住村落に集住し、1つのコルホーズ（のちソフホーズ）で働くようになっていた。だが、人々はIIの墓地に1970年代前半まで埋葬されていた。各墓地が手狭になりスペースがなくなったため、1974年、村落北東部に埋葬のための土地が区画された。これが現在の共同墓地である（図2）。従って墓地の位置から整理するとIIIは、

III-1 1950年代～1974年

III-2 1974年～1991年

の2つに分けられる。つまりII～III-1（1930年代～1974年）ではかつての集落近くの墓地で同一父系クラン・メンバー、あるいは複数の父系クランにまたがる同一コルホーズ員が埋葬されていた。それがIII-2～IV（1974年以降）は、同じ村落の住民が共同墓地で埋葬されるようになったのである。それではIII-1の墓を見てみよう。

4) 平原地帯の墓地と墓 —— III-1

前々項で述べた写真6～8の墓地は、いずれもIII-1の墓を含んでいる。写真10は夫と妻2人の合計3人が1つの囲いのなかに埋葬された例である。最初の死者は夫で1958年、最後の死者は1969年頃に死亡した。従って日干しレンガを組んだ囲いは、1969年のものである。この墓囲いにはソ連を表す赤い星と、イスラームを表す三日月の両方が取り付けられている。写真11は同じく写真8



写真3 高山地帯の夏营地 (1996年撮影)



写真4 山麓地帯の旧冬营地の墓地 (I) (1995年撮影)



写真5 平原地帯 (2017年撮影)



写真6 平原地帯の墓地 (II~III-1) (2017年撮影)



写真7 村落近くの墓地 (II~III-1) (2017年撮影)



写真8 村落近くの墓地 (II~III-1) (2017年撮影)



写真9 写真6の墓 (II / 推定1930年代) (2017年撮影)



写真10 写真8の墓 (III-1 / 1958~69年頃) (2017年撮影)

の墓地にある墓で、写真10同様にソ連を表す星・楕円形の色付き肖像写真のプレート・氏名と生没年の入った長方形の墓碑（写真12）と盛り土の周囲を、四角形に鉄柵が囲んでいる。

写真13は盛り土をやはり鉄柵で四角形に囲んだ墓で、男性のものである。現地の人によると1970年代、男性の墓は四角形の鉄柵で囲うようになったという。これに対してやはり1970年代、女性には細い鉄棒で遊牧民の移動式住居である天幕を象った墓が作られるようになった。写真14は1974年に死亡した女性のもので、楕円形をした肖像写真のプレートが取り付けられている。だがこの鉄棒製天幕型墓は、続く1980年代には多少見られる程度で、1990年代以降は皆無である。一方で鉄柵は、時代を下るとともに女性の墓にも広く使用されている。

Ⅲ-1はかつてのⅠ・Ⅱと比較して、墓の形態が多様化した時代である。簡素な盛り土のみが主流であったのが、それを囲うようになり、その囲いも鉄柵・日干しレンガと材料の種類が増えている。更に星や三日月、御影石に肖像写真や碑銘を入れた墓碑を建てるなど、形状も多様化している。そうした墓の形状・材料の種類は、Ⅲ-2では益々多様になっている。

5) 共同墓地と墓 —— Ⅲ-2

写真15は共同墓地を近くから撮影したもので、面積は10ヘクタールである。対象地域は約1,000世帯近くが暮らす大規模な村落であるため、墓地内に建てられている墓は非常に数多い。かつては墓地全体を囲うことはなかったが、2017年時点では家畜の侵入を防ぐため、ぐるりと周囲に鉄柵を巡らせている（写真16）。

写真17～21（1970年代後半～1991年の墓）では、大きく分けて4つの特徴が指摘できる。1つ目は材料に関するもので、盛り土の囲いが大型化し、焼成レンガが使用されるようになっている（写真17・18・19）。2つ目はイスラームを象徴する三日月の使用が頻繁に見られるようになっていた（写真18・19・20）。3つ目に肖像写真のプレート・碑銘を入れた墓碑（写真20）が多数見られるようになったこと、それと同時に簡素な文字のみの墓碑（写真21）も作られていることである。Ⅲ-1で見られた多様化の流れがⅢ-2でも続いていることは明らかである。だがこうした多様化の流れは、1991年以降は主に2つの形態に収斂していると考えられる。

6) 共同墓地と墓 —— Ⅳ

写真22～31は、ソ連が崩壊しクルグズスタンが独立した時代のものである。これらの写真からは、大きく分けて2つの流れが見取れる。1つ目は、イスラームを

表す三日月と故人の写真絵を付けた御影石や大理石の墓碑に、鉄柵あるいは日干しレンガで囲った墓である。これには写真22～24・26・29・31が当てはまる。2つ目は簡素な文字のみの墓碑に日干しレンガや鉄柵で囲っただけの墓で、写真25・27・28がこれに当たる。これらの写真からは、墓の材料はⅢ-1以来の多様化の流れのなかにあるものの、形態は2つの代表的なスタイルに収斂しつつあることが窺える。

4. 墓の形態と集団間接触

ここでは特に集団間接触を検討するため、居住地の変更と墓地の移動、ⅡとⅢを大きく分ける墓の材料とスタイルの、3点に焦点を絞ることにする。というのもこれらは、墓の形態変化を示す代表的な要素といえるからである。それでは最初に居住地変更と墓地の移動について取り上げる（以下、表1参照）。

1) 居住地の変更と墓地の移動

まずⅠ-Ⅱ間の居住地変更は、ロシアにおけるソ連成立とその政策によって引き起こされた。1920～1930年代、中央アジアがソ連化されてゆくなかで、対象地域でもその体制（社会主義計画経済）が確立されていった。冬営地から集落へ、集落から村落へという居住地の変更は、クルグズ人に対して政治的・軍事的に優越するロシア／ソ連という外部が、強制実現した。この変更により、死者を埋葬する墓地も移動した。冬営地から集落の近くへ、共同墓地が創設されてからはそこへ、埋葬されるようになったのである。

このように居住地変更＝墓地移動は、いずれも政治的・軍事的優位にあるロシア／ソ連という外的要因が引き起こした。だが前節第2項でも触れたように、対象地域におけるソ連化＝居住地変更を直接担ったのはクルグズ人である。その後の村落集住を直接主導したのもクルグズ人であった。中央政府レベルではロシア／ソ連が行なったことであっても、対象地域では、直接ロシア人と接触することは見られなかった。従って対象地域における居住地＝墓地の移動は、間接的な集団間接触が引き起こしたといえよう。それでは墓の材料についてはどうだろうか。

2) 墓の材料 —— 鉄柵

表1からも分かるように墓自体に大きな変化が見られるようになったのはⅢ以降である。対象地域の人々は、1960～1970年代を境に生活状況が好転したと認識する人が多い（吉田2004:154,177）。このことは1960年代



写真 11 写真 8 の墓 (Ⅲ-1 / 1966 年) (2017 年撮影)



写真 12 写真 11 肖像部分の拡大 (2017 年撮影)



写真 13 写真 8 の墓 (Ⅲ-1 / 1971 年) (2017 年撮影)



写真 14 写真 6 の墓 (Ⅲ-1 / 1974 年) (2017 年撮影)



写真 15 共同墓地 (Ⅲ-2 ~Ⅳ) (2013 年撮影)



写真 16 写真 15 の鉄柵囲い (2017 年撮影)



写真 17 写真 15 の墓 (Ⅲ-2 / 1970 年代後半) (2017 年撮影)



写真 18 写真 15 の墓 (Ⅲ-2 / 1977 年) (2017 年撮影)



写真 19 写真 15 の墓 (Ⅲ-2 / 1981 年) (2017 年撮影)



写真 20 写真 15 の墓 (Ⅲ-2 / 1984 年) (2017 年撮影)



写真 21 写真 15 の墓 (Ⅲ-2 / 1987 年) (2017 年撮影)



写真 22 写真 15 の墓 (Ⅳ / 1991 年) (2017 年撮影)



写真 23 写真 15 の墓 (Ⅳ / 1995 年) (2017 年撮影)



写真 24 写真 15 の墓 (Ⅳ / 2003 年) (2017 年撮影)



写真 25 写真 15 の墓 (Ⅳ / 2005 年) (2007 年撮影)



写真 26 写真 15 の墓 (Ⅳ / 2006 年) (2007 年撮影)



写真 27 写真 15 の墓 (IV / 2009 年) (2017 年撮影)



写真 28 写真 15 の墓 (IV / 2010 年) (2013 年撮影)



写真 29 写真 15 の墓 (IV / 2013 年) (2013 年撮影)



写真 30 写真 15 の墓 (IV / 2015 年) (2017 年撮影)



写真 31 写真 15 の墓 (IV / 2016 年) (2017 年撮影)



写真 32 スラヴ系女性の墓 (1937 年)
(ビシケク市内・2017 年撮影)

以降の墓が、かつての簡素な盛り土のみの墓とは、大きく外観を変えていることから明らかである。その要素の1つが鉄柵の使用である。

対象地域に住む80代後半の男性は、「ここ [対象地域] に鉄 [柵] があるわけがない」、1970年代に墓に使用した「鉄 [柵] は地区中心地から持ってきた」。だが柵自体

が地区中心地で製作されていたのかどうかは「知らない」と言う。2000年代以降に筆者が聞き取りをした限りでは、鉄柵は対象地域外から持ち込まれ、大部分はビシケク市で製作されていた。それでは盛り土を囲う鉄柵は、いつどこで使用されるようになったのだろうか。

2017年夏の本プロジェクトによる調査で、筆者はビシ

ケク市内の墓地を観察した。そこで写真 32 の 1937 年死亡のスラヴ系女性（ロシア人と推測）の墓と、1937 年・1938 年死亡のクルグズ人男性 2 人の墓（2 つの盛り土に囲いが 1 つ）が、鉄柵で囲われていることを確認した。少なくとも首都では 1930 年代に、墓の囲いとして鉄柵が使用されていたことが分かる。対象地域での鉄柵使用は首都の影響ではないかと考えられるが、上述の男性や 70 代後半女性は、「誰が初めて建てたのかはわからない」と言う。ここでも影響は間接的と考えられる。

3) 墓碑のスタイル —— 肖像写真プレート

それでは鉄柵よりも早い 1960 年代後半に使用が確認される、肖像写真のプレートはどうであろうか。対象地域の人々はムスリムであり、イスラームでは偶像崇拜につながる肖像画は禁止されている。そうすると写真 12 の星と肖像写真の組み合わせは、ロシア／ソ連の影響と考えるのが妥当であろう。写真 32 のスラヴ系女性の墓では、楕円形の肖像写真のプレートが墓碑に取り付けられていた。対象地域で多数見られる肖像写真プレート付の墓碑は、鉄柵と同様に首都の影響が考えられる。だがここでも前項の 80 代男性・70 代女性は、最初に肖像写真を使った人が誰かはわからない、更には「鉄〔柵〕を使ったり写真を取り付けるようになったのが、ロシア人の影響かどうかはわからない」と言うのである。

写真 30 は対象地域で観察された、楕円形の肖像写真プレートと氏名・生没年の記されたプレートが取り付けられた、2015 年の墓碑である。日干しレンガに砂土を塗り込めた壁囲いに取り付けられていた。この墓碑は、写真 32 の楕円形の肖像写真プレート・氏名と生没年の記されたプレートの取り付けられた、1937 年の墓碑と全く同じスタイルである。少なくとも対象地域の肖像写真と氏名・生没年のプレート付墓碑スタイルは、首都ビシケク市のその影響とみなすのが妥当であろう。

だがその影響は、スラヴ系住民が対象地域で直接伝えたとは考えられない。確かに肖像写真と氏名・生没年プレート付墓碑自体は、対象地域では明らかに外部の影響によるものである。だが対象地域では、その由来は明確には認識されておらず、従ってその影響は間接的な接触を通じたものと考えられるのである。

5. おわりに

ここまで局地的な例ではあるが集団間接触について、第 1 節で挙げた①～③のうち①墓地の場所・③墓とその形態と、第 2 節で区分したⅠ～Ⅳの時代背景とを照らし合わせて検討してきた。また③に関しては、墓囲いの材

料である鉄柵と、墓碑に取り付けられた肖像写真プレートを取り上げた。その結果、①では対象地域におけるロシア／ソ連との接触が、時代を通じて間接的であったことを指摘した。③の鉄柵・肖像写真プレートも共に、ロシア／スラヴ系住民との間接的な接触・交流を示唆していた。つまり本稿は、集団間の間接的な接触の様相を示してきたといえる。しかし同じ間接的接触といっても、対象地域の人々の認識という点では①と③の間に違いが見られる。

前節で述べたように①の居住地変更に関しては、現地の人々は明らかに政治的軍事的に優位な外部勢力が、外発的に引き起こしたことを認識していた。従って墓地の移動もロシア／ソ連という外的要因によるという認識が、間接接触であっても対象地域の人々の間では共有されている。

一方で③の鉄柵・肖像写真プレートというモノの使用は、①同様、外発的要因によるものであることは認識されていよう。どちらもⅠの時代には無かった技術であり製品で、対象地域にとっては明らかに外来のモノだからである。しかしそれが「どこ／誰から来たのか」については、①とは異なり現地の人々は特に意識しておらず、また明確にしようとする姿勢も見受けられない。Ⅲ以降多様化した墓に使用されるモノのなかで、鉄柵と肖像写真プレートは外来物ではあっても、既に「彼らのもの」として内在化されているといえる。

これらのことから集団間接触は、渦中にある人々にとって、接触相手が「誰か」は必ずしも明確ではない事態があることが分かる。①では、ソ連全域というユーラシア大陸の広大な空間で集団間接触が進行していた。それは対象地域という非常に狭いローカルな空間においては間接的であったが、外部の「誰か」＝ロシア／ソ連との接触であることは明瞭であった。しかし③では、相手が明確に認識されずとも、間接的にモノを通じた接触・交流が進行していた。以上のことから集団間接触には、多様な諸相があることが明らかである。

本プロジェクトでは旧人と新人の集団間接触が探求されている。人類学的研究である本稿に提供できるものがあるとすれば、それは集団間接触が直接相まみえることのない人々の間でも、間接的に起こり得るという視点であろう。更に渦中にある人々にとっては、必ずしも接触相手が明瞭とは限らないのである。このように多様な集団間接触の諸相について、今後も人類学的な見地から考察してみたい。

参照文献

McBrearty, S. and A. S. Brooks

- 2000 The Revolution That Wasn't: A new interpretation of the origin of modern human behavior. *Journal of Human Evolution*, 39: 453-563.

藤川繁彦

- 1999 「草原世界のはじまり」藤川繁彦編『世界の考古学⑥ 中央ユーラシアの考古学』同成社、pp.4-51。

木下栄二

- 2013 「質的調査の基本」大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋編著『新・社会調査へのアプローチ—論理と方法』ミネルヴァ書房、pp.248-267。
- 2013 「質的調査の実際」大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋編著『新・社会調査へのアプローチ—論理と方法』ミネルヴァ書房、pp.268-312。

波平恵美子

- 2002 「人間の死」波平恵美子編著『文化人類学 [カレッジ版]』（第2版）医学書院、pp.220-252。

吉田世津子

- 2004 『中央アジア農村の親族ネットワーク—クルグズスタン・経済移行の人類学的研究』風響社。
- 2007 「首都の祭典、農村の祝日—クルグズスタン（キルギス）・ノールズ復興に見る『国家』と『民族]」新免康編『中央アジアにおけるウイグル人地域社会の変容と民族アイデンティティに関する調査研究』（平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究A(1)）研究成果報告書）pp.219-237。
- 2012 「現代中央アジア農村の商売と親族—北クルグズスタンの事例から」塩川伸明・小松久男・沼野充義・松井康浩編『ユーラシア世界4 公共圏と親密圏』東京大学出版会、pp.217-240。

中央アジアの「青い陶器」の誕生と発展 —パレオアジア文化史学の視点から—

菊田 悠

(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)



図1 ウズベキスタン地図（白い星がリシトンの位置）

(https://commons.wikimedia.org/wiki/Atlas_of_Uzbekistan の地図に筆者加筆)

1. はじめに

本稿は、ウズベキスタンの小さな町リシトンで産出される「青い陶器」が、19世紀に質と量において中央アジア陶業におけるひとつの頂点を迎えた経緯を、集団の接触とものの変化という視点から考察する。

B01班代表の野林（2017）によれば、B01班の課題は、生物学的な違いにより旧人とは異なる固有の文化をもつと考えられている新人が、ユーラシア地域では必ずしも「新人的行動」をしておらず、旧人と同じようなモノを産出し利用したという事実を、文化人類学的アプローチで集めた事例から説明し、その作業のための材料を提供することである。もちろん文化人類学は基本的に20世紀以降の新人を対象としてきたため、旧人との出会いや旧人文化の継承について直接論じることはできない。しかし、新人の直近の歴史の中でもさまざまな文化・行動変化は起きており、その原理を考察することが本稿の課題であ

る。野林はこの点を、「ものの属性が変化する動態とその要因、さらに変化が個人の行動や集団の価値観を変化させる原理、すなわち、ものと人間社会との変化の往還を探究すること」として提示している（野林 2017:3）。本稿では中央アジア陶業史を追い、リシトンで「青い陶器」が繁栄するに至った経緯を明らかにすることで、この課題に迫ってみよう。

2. 中央アジア陶器の始まり：金属器からの転換

中央アジア南部のオアシス地域では古代より人々が居住し、農耕や牧畜に従事しながら独特の文化を育んできた。そのひとつが土をこねて焼く土器作りである。青銅器時代以降、マルギアナ（現在のトルクメニスタンやウズベキスタンのホラズム地域）とバクトリア（ウズベキスタンとタジキスタンの南部及びアフガニスタン北部）の各発掘場所からは、ろくろで形成し赤や黒色の化粧土

をかけて焼成した食器や水壺などが多数出土しており、古の人々の暮らしが美しく実用的な土器に彩られていたことを伝えている。

土器の表面に釉をかけ、水漏れのしない丈夫でつやのある陶器を作る技術は、紀元三千年紀に始まるエジプトの青釉陶、中国の殷・周時代の灰釉陶、古代オリエントの彩釉陶などが初期のものであるといわれる。その後も中国、ペルシアは陶器の先進地域であり、特に中国は6世紀から、千度を越える炎で焼き締めることで丈夫で美しい磁器を作り出してきた。これらの陶磁器は周辺各地に影響を与え、日本でも7世紀後半から緑釉陶器が製作された。しかし、中国とペルシアの両者の間に位置し、人と文物の往来によって栄えてきた中央アジア各地で釉つきの陶器が作られるようになったのは、ようやく8世紀を過ぎてからである (Zhadova 1974: 15)。

なぜ中央アジアにおける陶器製作は8世紀を待たなければならなかったのか。(Gyul 2017) によれば、当時の支配者層の間では、陶磁器の存在は当然知られていたはずだが、彼らは丈夫できらびやかな金属器を愛用しており、それゆえに陶磁器への需要が低かったようである。一方、庶民層は高品質の土器にある程度満足しており、あえてかまどや顔料、釉薬などを必要とする陶器を作ろうとしなかったのかもしれない。それが陶器製作へと大きく展開するようになった要因は、8世紀の中央アジアへのイスラーム伝播である。

8世紀以降、アラブ人勢力が当地に侵入しイスラームの教義に基づく新たな政治経済システムと生活スタイルが広がっていく中で、金や銀製の食器は「神が禁じた華美にあたる」として使用が禁じられたために、代わりにして衛生的かつ美しい陶器の需要が高まった (Gyul 2017: 780)。そして10-12世紀にはカラハン朝下のアフラシアブ (現在のサマルカンド郊外) を中心に製陶が発達し、優れた陶器が多数作られるようになった。アフラシアブでは化粧土をかけた上に顔料で絵付けをしてから、さらに透明釉で仕上げる手法がとられた。同時代のシャシ (タシケントの古名)、フェルガナ、チャガニヤン (スルハンダリヤの中上流域) などからも高品質の陶器が確認されている。つまり、陶器という土器からのイノベーションに対して、中央アジア社会は当初文化的理由 (支配者層の好み・慣習) により受け入れを拒んでいたが、イスラーム勢力が彼らに異なる社会文化的規範をもたらしたことにより、陶器の開発へと転じたのである。

3. 文様に見る多様な文化源流

9-13世紀の中央アジア産陶器の表面には、アラビア文

字のクーフィー書体で書かれた幸福を祈る銘文や様式化した植物文様、チューリップやバラといった花、ザクロの実、民間伝承や民話で知られている鳥や動物の絵などが描かれている。これらは当時の世界の陶器の主流となり、イスラーム世界に多く輸出された (ハキモフ 2005: 25)。これらの文様からは、当地の主流文化の栄枯盛衰を読み取ることもできる。

イスラーム化の初期時代には、アラブ侵入以前の主な支配者層であるソグト人のゾロアスター教的世界観に基づく文様モチーフが依然多用されている。それは馬、ライオン、羊、トキ、イノシシ、孔雀、がちょうなどであり、イスラームの偶像崇拜禁止にはそぐわない、具象的な人の図柄も良く見られた。しかし、イスラーム化の進展に伴い、それらは具象性をそぎおとし、動物の一部 (例えば鳥の頭) を様式化したものに変化していった (Gyul 2017: 783)。

一方でアラビア文字を用いた装飾は、中央アジア社会に普及するにつれて現地の文盲の職人の間ではただの模様として描かれるようになり、アラビア文字として原型をほとんどとどめない文様の陶器が多数出土している。そして遊牧テュルク系民族によって興されたカラハン朝下では、向かい合う2つの渦巻きの上に扇形をえがくパルメット文様が、遊牧民の絨毯模様を源流として広がった (Gyul 2017: 784)。このように、陶器の文様は中央アジア社会におけるイスラーム化とテュルク化 (テュルク系遊牧民による王朝の支配が広がり、言語や文化に彼らの要素が増加する) が進んだ経緯を示しているのである。

以上の中央アジア産土器および陶器の出土品は、タシケントの国立歴史博物館やサマルカンド郷土史博物館で現物を見ることが出来る。

4. 中央アジアの「青い陶器」の誕生

13世紀初頭には、チンギス・カンの軍隊が来襲したことによって中央アジアのオアシス都市は荒廃し、多くの町が壊滅した。しかし、その後徐々に復興が進み、特にアミール・ティムールの治世では中央アジアがユーラシア大陸に広がる巨大なティムール帝国の中心となって繁栄した。陶業も盛んとなり、14-16世紀のティムール朝時代には、支配者層が中国の青花磁器を珍重したために、中央アジアでもそれを模して白地にラピスラズリやコバルトを用いて青で彩色した釉下彩陶器の生産が盛んになった。その中心はサマルカンドだったが、中国とは異なってカオリン入りの陶土や高温での窯焼きの技法を持たなかったために、真正の磁器を生産することはできなかった。しかし、陶土を工夫することで白地に藍彩を施

した軟質の半磁器が製作され、「チーニー」(chinni)つまり「中国の」様式と称された。器に描かれる内容も中国の影響を反映し、こうのとりが葦の上を飛んでいる場面、庭園の池に蓮が浮かび魚やサギがいる様子、枝の間の雀など風景画が盛んになった (Gyul 2017: 785)。

色釉をほどこしたタイルによる建築装飾も盛んになり、サマルカンドでは青を好んだティムールらモンゴル・テュルク系支配者層の嗜好を繁栄して、さまざまな青いモスクや神学校などが建設され、青の都と呼ばれた。この「青好み」は、彼ら遊牧民の間では明るい青こそがテングリとよばれる聖なる空あるいは神の表象であったためと推測されている (Gyul 2017: 785)。モンゴル・テュルク系支配者層の「青好み」は中央アジア陶器に白とコバルトブルーの流行と中国製青磁の模倣をもたらし、独特の「青い陶器」を誕生させるに至ったのである。

5. 「青い陶器」のリシトン到来と発展

ユーラシア大陸の中央部、天山山脈の西端には緑多いフェルガナ盆地が広がっている。古代からさまざまな民族が行き交い生活を営んできたこの土地では多種多様な工芸品が発達しており、陶器もそのひとつである。中でも盆地南端に位置するリシトン (Rishton) は「青い陶器」の伝統を受け継ぐ窯元として有名である。一説では、ティムールがマーワラーアンナフル (中央アジア南部) 統一後に、スーフィー (いわゆるイスラーム神秘主義者) であり陶工でもあったサイド・メフリ・クロールの弟子をリシトンに派遣し、この人物がリシトンで最初の陶芸工房を作って人々に陶業を教えたこととされる (Rakhimov 1961: 23)。一方、1980年代末に行われた市内の廟の再建工事の際には、9世紀の地元製と見られる陶片が発掘されており、陶業の開始はその頃にさかのぼるとも言われている。

リシトンで陶芸が発達した理由は、まず原料となる陶土が良質かつ豊富である点に求められる。赤い陶土が1-1.5メートルの深さに0.5-1メートルの厚さの層を成して市内一帯に分布しており (Rakhimov 1961: 23)、家の庭を掘ることで陶土が採集できたのである。陶土に加えて、釉や顔料などのための原料を入手することも比較的容易であった。釉にとって必須である石英は近郊の町であるソフヤグルムサライから採取され、石英の粉は近くの川で採ることが出来た。焼成すると白色になる化粧土はイスファラ、アングレンなどのものが用いられた。マンガンや鉄分が豊富な化粧土はリシトン近郊の山から、銅はコーカンドから入手していた。唯一、青色の顔料となるラピスラズリは近郊になく、遠くバダフシヤンの山々

あるいはイランから取り寄せていた。そして陶器に柔らかな輝きと透明なつやを与える釉として重宝されたイシコール (ishqor, 本来の意味はアルカリ) と呼ばれる灰釉の原料となる草は、近郊の荒地で採取された (Kodzaeva 1998: 3; Rakhimov 1961: 34-36)。

ティムール朝崩壊後、17-18世紀は政治経済的に中央アジアが不安定であったため、陶業にも目ぼしい発展がない「失われた時代」とされている。しかし、各地にはローカルな需要を満たす陶器工房が受け継がれており、政治情勢が落ち着くと再び発展していった。19世紀には現在につながる3流派が確立したが、それはホラズム派、ブハラ=サマルカンド派、フェルガナ派であった。フェルガナ派の中心だったのがリシトンで、19世紀末には市内に130の陶芸工房があり (Peshchereva 1959: 349)、弟子や卸売業者、土練業者などを加えた当時の陶業従事者の総数は数百人に及んだと考えられる。陶工は、自分の工房を持つ親方、そこで働く雇われ人、見習い弟子の3層から成っていた。親方たちは壺などを作る集団と、平皿を主製品とする集団に分かれて同業者組合的な組織を作り、陶業を独占していた (Peshchereva 1959: 207, 353-355, 376)。当時の陶器製品は、壺や水差し、たらいといった台所製品から、大きな平皿、湯のみ茶碗などの食器まで様々なものが作られ、周辺地域の住民の日常生活に欠かせないものだった。製品はスタンプ装飾で簡単に彩られただけのシンプルで安価なものから、優れた職人が筆でレースのように細かい模様を描いた高価なものまで多種多様であった。色合いも黄色、赤、白、青、黒、茶など様々だったが、特にティムール朝時代の「青い陶器」を髣髴とさせる製品、すなわち白地にラピスラズリやコバルトを用いて青で彩色した釉下彩陶器が高価な贈答品・装飾品として有名だった (菊田 2013: 93-96)。

中央アジアで客をもてなす定番料理のピラフをのせる大皿には、草木文様や水差しやナイフといった日用品が主に描かれた。模様の中にはカシュガルから取り入れた雲の文様や、ウイグルの影響を受けた下地色のない滑らかな線画によるコラカラムと呼ばれる手法、ローカルな伝統的文様といえる菊状の花、十字の各先端に花をつけた模様、螺旋文様、縁取りとして「蛇の跡」「ラクダの目」「葉」と呼ばれる文様などが描かれた (Gyul 2017: 788)。これらの文様にも周辺各地の影響と、中央アジア陶業のローカルな伝統の継承と発展を見て取ることが出来る。

当時、数多くの製品の中でも高く売れたのはチーニーと呼ばれる軟質陶器であった。これは、ティムール朝時代の技法とほぼ共通であるが、リシトンではマシュハド (イラン東部) あるいはカシュガルで学んだ陶工がこの技

法を持ち帰ったとされる (Peshchereva 1959: 230)。ティムール朝時代の流行スタイルである白地にコバルトブルーの文様の製品、コバルトブルーの文様の上に薄い水色の釉薬が掛かって青磁風になった物、赤や黄色の製品といったように、19世紀のチーニーのなかにもいくつかのタイプがあった。リシトン以外でもフェルガナ盆地のコーカンド、アンディジャン、ナマンガン、フジャンドなどでチーニー生産がなされたが、リシトンのものは質の良さや豊富な文様でフェルガナ地方の富裕層を中心に大きな需要があった (Peshchereva 1959: 230)。こうしてチーニーが盛んに作られた19世紀にリシトン陶業は中央アジアの「青い陶器」の伝統を引き継ぐフェルガナ学派の中心的窯元として名を馳せ、黄金期を迎えたのである。当時の作品はフェルガナ郷土史博物館やリシトンの陶芸工房における私設展示室で見ることが出来る他、モスクワの東洋美術館やサンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館にもコレクションがあり、筆者は今年度の調査によってそれらを堪能することが出来た。

6. 結び

本稿は、中央アジアの陶器がさまざまな窯元の影響や職人の移動、支配者層の好みなどによってスタイルを変えつつ、19世紀リシトンの「青い陶器」でひとつの頂点を迎えた経緯を追ってきた。本稿からいえる陶器スタイルの変遷における留意点は、まず社会情勢が平穏な時に技術が発展し、周囲の影響を受けながら新しいスタイルが誕生するという点である。陶業のような複雑な技法は、職人の生活が安定した状態でなければ十分に継承し発展させることができなかったためであろう。これをそのままパレオアジア文化史学における旧人と新人の出会いに当てはめるわけには行かないかもしれないが、一つの可能性として、両集団が平和的な共存関係のなかで技術交流をしたケースを想定してもよいかもしれない。戦闘や奪い合いではなく、多種多様な旧人と新人が平和に交流しながら石器等の技術を発展させるモデルである。

次に注意すべきは、(少なくとも新人に)イノベーションが普及するにあたっては、実用度ばかりでなく、観念の役割が大きいことである。このことは中央アジアにおける陶器の製造が、中国とイランという陶磁器の産地に挟まれていながらも、自らの金属器好みによって8世紀まで待たなければならなかった点から明らかである。そ

の金属器使用に大きな制限を加え、陶業の発展を促したのは8世紀以降のイスラーム勢力の侵出であった。イスラームの教えに華美を戒める箇所があり、金属器使用がそれに当たるとして非難されたため、中央アジアで陶器作りが促されたと考えられるのである。そして中央アジア独特の「青い陶器」の製造と発展を用意したのは、ティムール朝時代の繁栄と支配者層たちの「青好み」という文化的選択であった。その背景には、モンゴル・テュルク系遊牧民を祖先とする彼らのテングリ(天)崇拜による空色の重視があったと推測されている。

このように中央アジア陶業の変遷からは、集団の接触がものの変化を促すとしても、その速度や広がりには観念や社会情勢などが深く作用することが言える。パレオアジアで新人が旧人と同じようなモノを産出し利用した背景には、モノの利便性ばかりではなくこのような観念の役割の大きさがあったのではないだろうか。

参考文献

菊田悠

2013 『ウズベキスタンの聖者崇敬—陶器の町とポスト・ソヴィエト時代のイスラーム』 風響社.

野林厚志

2017 「計画研究 B01 班のねらい」 野林厚志編『パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』、pp.1-4.

ハキモフ, A.

2005 「中央アジア芸術の至宝」 キュレイターズ編『偉大なシルクロードの遺産』、pp.20-32.

Gyul, E. F.

2017 'Polivnaya keramika Uzbekistana: Etapy razvitiya' S. Bocharov, V. François and A. Sitdikov (eds.), *Glazed pottery of the Mediterranean and the Black Sea region, 10th-18th centuries vol.2*, Kazan- Kishinev: Stratum, pp.779-793.

Kodzaeva, L. X-M.

1998 *Keramika Rishtana, traditsii i mastera*. Tashkent: Institut Otkrytoe Obshchestvo.

Peshchereva, E. M.

1959 *Goncharnoe proizvodstvo Srednei Azii*. Moskva, Leningrad: Izdatel'stvo Akademii nauk SSSR.

Rakhimov, M. K.

1961 *Khudozhestvennaya keramika Uzbekistana*. Tashkent: Izdatel'stvo Akademii nauk UzSSR.

Zhadova, L.

1974 'Vvedenie' L.S. Bubnova (ed.), *Sovremennaya keramika narodnykh masterov Srednei Azii*, Moskva: Sovetskii Khudozhnik, pp.3-14.

先史時代の想像的行為と生態系の相関関係 ——ペリゴール地方の先史時代洞窟画の調査報告——

山中 由里子

(国立民族学博物館)

報告者は、「驚異」と「怪異」をキーワードに、様々な文化圏の異境・異界をめぐる人間の心理と想像力の働き、言説と視覚表象物の関係、心象地理の変遷などを比較検討する研究を行ってきた。昨年度は、文化相対主義的な研究を、より普遍主義的な認知科学の成果に照らし合わせ、「心の進化」という長いタイムスパンの文脈で捉えなおす理論的試みを行った。

今年度は、認知科学の成果も応用しながら、具体的な文化的事象の比較分析を行い、共通性やパターンを見出す理論的な枠組みの構築を検討した。その中で、想像的行為と生態系・環境の相関関係を明らかにするために行ったフランスのペリゴール地方の現地調査について報告する。

1. 「先史的景観」

2017年夏にフランスのペリゴール地方（ドルドーニュ県）に滞在し、ドルドーニュ川、ヴェゼール川沿いに点在する先史時代から中世の遺構（ラスコー、サン・クリストフの絶壁、バラ・パウ洞窟、カドワン、サン・タヴィ・セニユールなど）を調査した。「ヴェゼール渓谷の

先史時代史跡群と洞窟壁画群」が1979年にユネスコ世界遺産に登録されているように、この地域には先史時代の遺構が集中しており、現生人類が生態系の観察と自然環境の利用に基づいて描いた絵画の最初期の事例を実地に調査するには非常に適している。

先史考古学が専門でない筆者は、ウィキペディアなどでも一般的に使われている「ヴェゼール渓谷の先史的景観…」という表現について騙されてしまう。浅く、穏やかな流れの川が、森や野の間をゆるやかに蛇行する緑豊かな現在の牧歌的な「景観」の中に、先史時代の人類も暮らしていたかのような幻想を抱くのであるが、洞窟壁画が描かれた頃、約20000年前のヨーロッパはまだ最終氷河期のさなかにあり、地形も、植生物も相当違っていたはずである。さらに、劣化を防ぐために洞窟の内部が一般公開されていないところや、逆に、時代時代に手が加えられ近世までそこに人が住み続けてきた岩窟 (troglodytique) もある。現地に身に置きながらも門外漢にとっては現代の風景から先史時代の状況を想像するのは難しいのであるが、理解の助けとなったのが、2016年12月にオープンしたばかりのラスコー国際洞窟壁画センター（通称「ラスコー IV」）であった。



写真1 リムイユ庭園から見下ろすドルドーニュ川とヴェゼール川の合流点。
(2017年7月29日筆者撮影)

2. ラスコー IV

1940年に地元の青年によって偶然に発見され、世界的に有名になったラスコー洞窟自体は、保存のために1963年に閉鎖された。その後、オリジナルの洞窟から数百メートルの場所に、洞窟の一部のレプリカが制作され、「ラスコー II」として1983年に公開された。さらに2012年以来、「ラスコー III」と呼ばれる実物大レプリカの展覧会が世界各地を巡回し、東京の国立科学博物館（2016年11月1日～2017年2月19日）と福岡の九州国立博物館（2017年7月11日～9月3日）でも開催された。最後に登場した「ラスコー IV」は、ラスコー I と II の近くに新たに建設された、長さ150メートル、奥行70メートル、高さ8メートル、計8500平米の広大な建造物に展開する体験型教育施設である。ラスコー II が、手作業による測定と複製であったのに対し、ラスコー III 同様にラスコー IV では、実物を3Dスキャンして得たデータをもとにミリ単位で正確に再現された、実物大のレプリカを見ることができる。（写真2）

入場は時間制で、事前にネットなどで予約をしておかないと、ハイシーズンに当日チケットの購入には相当時間がかかりそうであった。入場の際には30人ほどのグループごとに6分刻みに集合し、首から下げるタブレット型のオーディオ・ビジュアルガイドを一人ずつ渡され、そのイヤホンを通してグループを先導するコンパニオンについてまわる。まずは施設の屋上のテラスに上がり、ヴェゼール渓谷の現在の眺めを見るところからツアーは始まる。その後、屋内の大きなスクリーンの前に座られ、20000年前のツンドラのような光景がそこに映し出される。短い夏の間以外は、凍土に覆われた極寒の地であったことがCGで大映しにされると、人類が洞窟の奥に引きこもりたくなった気分も分かった気がする。

こうした予習を経てから、いよいよ「洞窟」の中に入

る。この洞窟部分は壁面だけでなく360度、完全に空間全体として再現されており、事故防止のための通路が敷かれ、暗めの照明が設けられている以外は、かなり本物に近いようだ。温湿度まで現物に忠実に保たれているらしい。先史考古学の法王と呼ばれたブルーユ神父が「先史時代のシステーナ礼拝堂」と呼んだように、主洞の「牡牛の間」は意外と広く、まさに天井画のようにオウシ、ウマ、シカ、バイソンの絵を見上げる構造になっている。教科書に載っていた馴染み深い馬やバイソンの絵の下に、異なる色で描き分けられた幾何学記号があるのを復元空間で見て初めて知った。

ほとんどの壁画が四つ足の動物である中で唯一、頭が鳥で体が人間の形をした不思議な「鳥人間」が一か所だけ、他の動物に比べると図式的に描かれている。その絵自体は本の図版などで見たことがあったが、それがアクセスの難しい、洞窟の最も奥まったところにある「井戸状の空間」にあることは、ラスコー IV で実感することができた。再現洞窟では通路からは見えない位置にあるのである。

再現洞窟は写真も禁止で、お目当ての鳥人間も目にすることができずに、やや欲求不満のまま、次々と後に続くグループに場所をあけるために追い出され、「アトリエ」と呼ばれる広いギャラリーで解散となる（写真3、4）。そこからは時間制限なしの自由観覧、自由撮影である。



写真2 ラスコー国際洞窟壁画センター外観。ランドスケープと融合した建築はノルウェーのスノヘッタ・アーキテクツによる。（2017年8月8日筆者撮影）



写真3, 4 ラスコー国際洞窟壁画センター、「アトリエ」。合成樹脂で表面凹凸の細部まで再現された洞窟の壁面。（2017年8月8日筆者撮影）

「アトリエ」には、洞窟の抜け殻とでもいえるような壁面だけのレプリカが鉄筋で天井や壁から吊るされている。主な壁画がそこに忠実に再現されていて、心置きなく間近で見ることができる。鳥人間も様々な角度から見るのができたが、なぜヒトの絵だけが棒のように突っ立った状態で描かれているのか、謎は深まるばかりである（写真5）。



写真5 ラスコー国際洞窟壁画センター、「鳥人間」。合成樹脂で表面凹凸の細部まで再現された洞窟の壁面。（2017年8月8日筆者撮影）

さらに、アトリエでは、先のタブレットやプロジェクションによるインタラクティブな解説も得ることができる。例えば、同じ馬の胴体にいくつもの首や足が違う角度で描かれているのは何故か。油を燃やした灯りの火がゆらゆらと揺れると、岩の凹凸の影も動き、絵が部分的に見え隠れする。このことによって、動物がまるで動いているかのように見えるのである。人類最初のアニメーションともいえるこの仕組みが、プロジェクションと解説によって明らかにされる（写真6、7）。

ケース展示もいくつかあり、壁画制作で使われたであろう素材や道具が再現されている（写真8、9）。筆やステンシルなどは、実際に使われていたのだとしたら、現代のものとはほとんど変わらない形のものですでに先史時代にできあがっていたことになる。針と同様、先史時代にすでに完成形に達した道具だったのだろうか。石器や骨でできた道具と違い、筆は現物が出土したわけではなく、画風から想像して再現されたのであろう。

この他、洞窟全体の1/10立体模型もあり、いくつもの枝葉に分かれ、高低のある複雑な構造をしていることがよくわかる。壁画制作のテクニックや、描かれている題



写真6、7 ラスコー国際洞窟壁画センター。プロジェクションによって、動物が動いているかのように見える仕組みが解説される。（2017年8月8日筆者撮影）

材について、現物の立体的なレプリカを目の前にして学ぶことができるこのアトリエが、来館者の滞留時間が最も長い部屋であろうが、アトラクションはまだ続く。

次の「洞窟美術劇場」は、「ルネサンス時代」、「20世紀」、「21世紀」の三つの部屋に分かれており、洞窟絵画の発見と解釈と研究の歴史を寸劇風に語る映像が上演される。また、「3D シネマ」では、ラスコーの壁画を美術史の観点から世界中の先史時代芸術と比較した映像を3D眼鏡をかけて鑑賞し、続いて「イマジネーション・ギャラリー」の壁面と天井には、ラスコーの芸術と通じる様々な地域や時代のアートが大小のモニターに映し出される

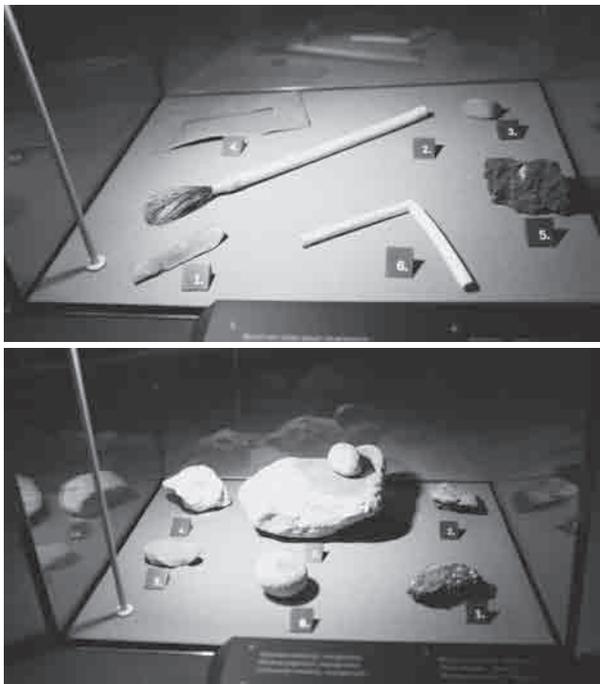


写真 8, 9 ラスコー国際洞窟壁画センター展示。洞窟画に使われた道具と素材の再現 (2017年8月8日筆者撮影)

(写真10)。さらに、企画展の部屋にはラスコーにインスピレーションを得た現代アートが展示されていた。ヴァーチャル・リアリティ・ゴーグルをつけて、仮想洞窟巡りをするコーナーもあったが、あまりに人が多く並んでいたため、体験はあきらめた。

国家が莫大な予算を費やし、最新の技術を駆使したミュージアムの最先端であるという点においても、相当の入館者数(年間40万人が予測される)を非常に効率よく流しているというロジスティクス・マネジメントの点でも大変参考になった。しかし、すべて、現代の最新技術を駆使した作り物であり、いわば体験型学習テーマパークである。

バラ・バオ洞窟

ラスコーほどの知名度でも、規模でもないが、ル・ビュグという町の近くのバラ・バオ洞窟Grotte de Bara Bahauでは、15000年ほど前のものとされる洞窟画のオリジナルを見ることができた。Bara Bahauとは、オック語で「どっかん」というような擬態語で、洞窟の天井の一部が落下した轟音に由来するらしい。

ここでは、ラスコー洞窟の発見によって起こった洞窟画ブームのさなかの1951年に、すでに知られていた洞窟のさらに奥に壁画が発見された。先述のブリュイ神父やグロリー神父といった考古学者も当時は注目した。

スタッフは洞窟の中を案内する人と、受付をする人の二人のみで、40分ごとのツアーの参加人数は10人にも満たないほどであった。内部は撮影禁止であったため、洞窟画の写真は撮れなかったが、以下のサイトに写真が載っている。

http://barabahau.free.fr/la_salle_des_gravures.html

洞窟の壁面は比較的やわらかい石灰石であり、馬やバ



写真 10 Galerie de l'imaginaire。ラスコー洞窟壁画と様々な時代や地域のアートをつなぐ映像インスタレーション (2017年8月8日筆者撮影)

イソンの絵が刻み込まれていた。ラスコーの壁画のような彩色は見られず、ガイドが懐中電灯でその輪郭を示さなければ、熊の爪跡との区別が分からない。解説を聞くと、岩の表面のふくらみを利用して動物の胴体をレリーフのように表現しているのがわかり、灯りの揺らぎが生み出すアニメーション効果も懐中電灯をゆらゆらしてもらうと、なるほど、と思えた。ヒトの手の形や男性性器も指し示されたが、偶然できた傷がそのように解釈されたのか、若干疑わしいところもあった。

ラスコーからは30数キロしか離れていない場所で、ど

ちらの洞窟もヴェゼール川沿いにありながら、これほどの技法の違いがあるのは何故なのか。考古学的にラスコーとバラ・バウの時代の差がどれほどの意味を持つのかは、筆者にはわからないので、考古班のメンバーに尋ねてみたい。

実際に当時いたであろう動物の写実的な描写が壁画の大多数を占める中で、「鳥人間」のような想像上の存在が非常に特殊なものとして位置づけられていたことは、今回の現地調査で実感することができ、今後の思考の参考になった。



写真11 手作り感がにじみ出ているバラ・バウ洞窟のサイン。
(2017年8月2日筆者撮影)



写真12 バラ・バウ洞窟の入り口 (2017年8月2日筆者撮影)

狩猟採集民に見られる道具利用の通文化的研究 — アジアとアフリカの森林地帯を中心に —

彭 宇 潔

(国立民族学博物館 / 京都大学)

1. はじめに

オズワルドが提唱した「食料獲得用具の複合性の測定」(Oswalt 1973: 30-34) は考古学分野において、とくにある特定の社会や集団の文化の多様性を評価する基本的な方法として応用されてきた。一方、ある社会や集団の文化の多様性を議論するとき、文化人類学の視点から見ると、道具の種類だけではなく、道具の使用法の多様性も同様に重要だと考えられている。国立民族学博物館の収蔵品を利用して、アジアとアフリカ地域の槍状道具に対して比較研究をおこなった。その結論の一つは、道具の形態がその使用法によって影響されていることである。例えば、投げ槍は突き刺し槍より一般的に小さくて軽い。また、マダガスカルの住民は手持ちの槍で土も掘るそうなので、彼らが使っている槍の下端に特別なパーツが加わっている。

上記の研究結果にもとづいて、本稿は現代狩猟採集民に見られる道具と道具利用の多様性について整理する。アジアとアフリカの森林地帯、すなわちビンフォードが言った緯度が低い地域 (Binford 2001)、その地域の狩猟採集民に関する民族誌的な事例を選んで、彼らが使っている刃物に焦点をあてる。そうして民族誌資料と実際の現地調査で集めた事例を整理・分析する。

2. 研究対象と研究方法

本研究では、アジアとアフリカの森林地帯 (低緯度地域) を対象にする。自然環境によってさらに、島嶼部と大陸部に分ける。そこに暮らす狩猟採集民集団から、東南アジア島嶼部のアンダマン島民、ネグリティ系狩猟採集民、プナント、アフリカのピグミー系狩猟採集民バカを選択した (図1)。それらの民族集団にみられる道具利用について民族誌資料の収集と現地調査にもとづき、比較研究をおこなった¹⁾。各民族集団に対して、具体的には下記の研究方法を用いた。

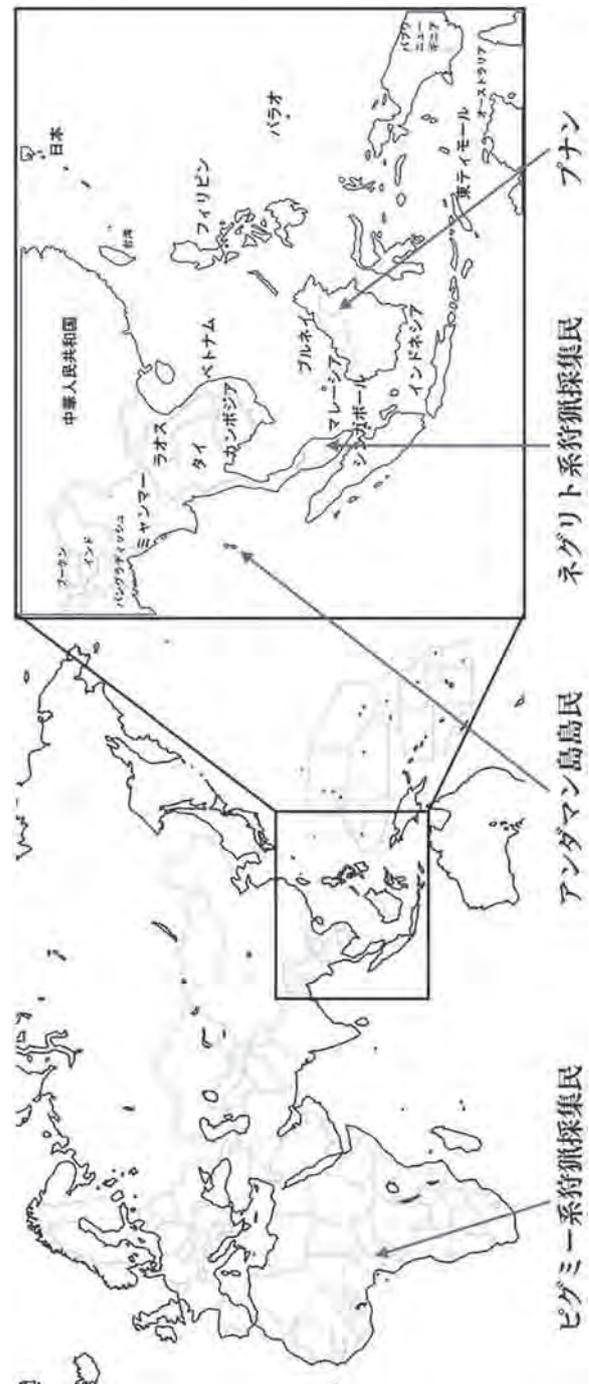


図1 調査対象地域 (筆者作成)

2-1. 東南アジア島嶼部の（元）狩猟採集民集団

東南アジア島嶼部にあるアンダマン島、マレー半島とボルネオ島を選択し、そこに暮らしている（元）狩猟採集民に対して民族誌資料の調査を実施する。なかでは、アンダマン島島民は民族集団として現在では狩猟採集民でなくなったため、彼らに関する民族誌資料は1950年代以前のものしかない。一方、マレー半島のネグリト系狩猟採集民とプナンは定住後に生業活動の中心が農耕に移ったが、現在でも研究者や外部の人から狩猟採集民または先住民として認識されている。他集団、とりわけ農耕民集団との接触が多いため、ネグリト系狩猟採集民とプナンに対しては、近隣集団とのやりとりも含めて、道具利用に関する民族誌的資料・記述を調べた。

2-2. アフリカのピグミー系狩猟採集民

アフリカの事例については、筆者がこれまで長期に渡って現地調査をおこなっていたピグミー系狩猟採集民バカを対象にする。バカに関する民族誌的データの収集は、主にこれまでの現地調査にもとづいて、民族誌的文献資料を補助的に使用した。調査対象となるバカは、カメルーン東部州ブンバーベック国立公園付近の村に暮らして、近隣のバントゥー言語系の焼き畑農耕民コナンベンベとは、生業上において相互依存関係を維持している。筆者はこれまでの現地調査において、長期の滞在を通して参与観察を実施し、バカたちの諸活動を記録した。また、2017年8月におこなったフィールドワークでは、アク

ションカメラの使用を導入して、彼らの生業活動時の行動や日常生活にみられる道具の使用を映像で記録した。

3. 現在までの研究進捗

以上の研究方法を用いて、研究対象に対する文献資料調査と現地調査を実施した。現段階では狩猟採集民にみられる道具利用の多様性について、集団内と集団間に分けて研究進捗をまとめる。具体的には下記のことになった。

3-1. 集団内にみられる道具利用の多様性

1) 内陸部と沿岸部

アンダマン島島民の事例（Radcliffe-Brown 1922, Man 1883, Oswalt 1973）においては、島内の自然環境は単一ではなく、概ねに沿岸部と内陸部と分けられる。アンダマン島島民の男性にみられるもっとも使われている狩猟具は弓矢であって、前述の居住地域によって狩猟対象の動物が異なる。沿岸部の島民たちは弓矢で主に大型の魚や甲殻類を狩る一方で、内陸部（山岳地帯）の島民はイノシシを主なターゲットにしている。また、地域と狩猟漁撈対象によって、弓矢の形態も異なる（図2、図3）ことがわかった。弓矢のほか、アンダマン島の北部には犬を使う猟に、槍も補助的に使われていることがみられた。女性が使われる道具にかんする記述が多くないが、ネットを使って小さい魚介類を捕っていることが記載されて

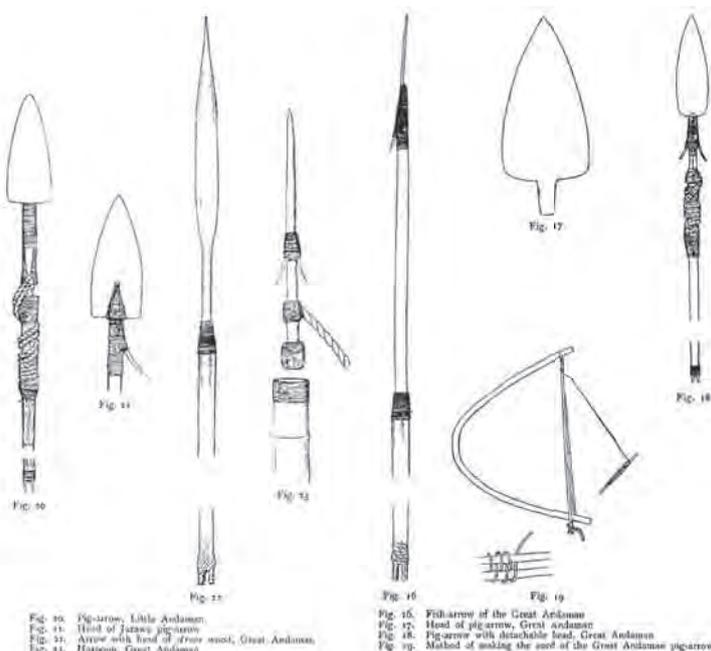


図2 アンダマン島島民が使う矢の形態の比較（Radcliffe-Brown (1948: 437-440), Fig.16～Fig.23)

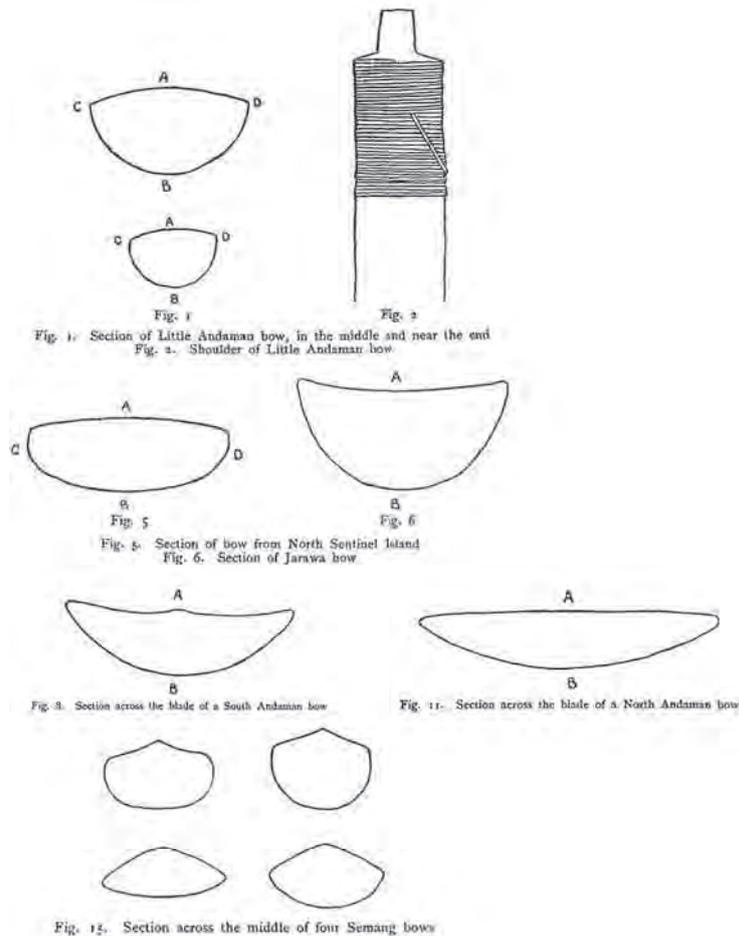


図3 アンダマン島島民が使う矢頭の横断面の比較 (Radcliffe-Brown (1948: 420-434), Fig.1, Fig.2, Fig.5, Fig.6, Fig.8, Fig.11, Fig.15)

いる。また、狩猟漁撈用の道具のほか、採集活動に木製の掘り棒が一般的にどの地域でも使われていることが記載されている。

道具製作に使われた材料について詳細な記載がないが、刃部には貝や骨、石が使われ、現在（文献が公表された時代）では金属になっていることがわかる。ところが、そうした材料がどういう経緯で誰から入手したかは、不明だと書かれている。

2) 性的分業

アフリカのピグミー系狩猟採集民バカに対する現地調査にもとづいて、彼らに見られる道具利用の多様性は性的分業によって、道具利用において最も差が顕著であることがわかった。まず、バカ社会には、山刀、短刀/ナイフ、槍、斧、カミソリが一般的に使われている。山刀はバカたちにとって、すべての生業活動に不可欠な道具であって、その利用法が最も多様性に富む。木や動物の肉を切るだけでなく、野生イモを掘り出すための道具でもある。また、かごやござを編むために材料を削つ

たり、金づちのかわりにたたいたりすることもしばしば見られる。小さいものの作業は山刀の代わりに短刀あるいはナイフを使う。一方、槍、斧とカミソリの用途は限られている。槍は大型動物の猟に、斧は伐採（とくにハチミツの採集）に、カミソリは治療や身体装飾などのような細かい加工に使われている。

バカ社会における性的分業は、男性は狩猟で、女性は採集と料理だと報告されている。筆者の現地調査によると、それ以外の諸活動も生活に不可欠であって、性的分業がみられた。たとえば山刀の利用にあたって、男性はキャンプ地の開拓や大きい家具の製作、土壁の家屋製作、動物の解体で、女性は植物採集（図4）や掻い出し漁（図5）、薪採集、編み物の製作、ドーム型小屋の製作などのような性的分業がみられる。そうした性的分業にもとづき、バカの男性と女性にみられる道具利用には特徴的な差が見られた。

3-2. 集団接触にみられる道具利用の多様化

マレー半島とボルネオ島の狩猟採集集団 (Evans 1968,



図4 山刀で掘り出した野生イモを山刀に刺したまま家に持ち帰る（カメルーン東部州、2017年9月3日、筆者撮影）



図5 掻い出し漁の時に山刀で水辺の土を切り、土の中に隠れた大きい魚やカメを捕る（カメルーン東部州、2017年9月5日、筆者撮影）

Carey 1976, Hoffman 1983, Wade & Henley 1990, Kaskija, 2012) には、吹き矢の使用が特徴的である。刃付の道具については、弓矢の使用はあったが、最近ではほとんど男性の成人といった象徴的な意味しかなくて、吹き矢の方は主たる狩猟具になった。一方、実際に効率的かつ効果的な猟法は各種の罾猟であって、吹き矢の狩猟対象は鳥やサルなどのような、狩りにくい獲物だけである。また、漁撈にもめったに槍などではなく、ネットの利用にかんする記載が圧倒的に多い。

そのような変化の中で、狩猟採集民に大きく影響した要素は外部から来た定住農耕民だと考えられる。たとえば、マレー半島のネグリト系狩猟採集民は吹き矢に使わ

れる金属をマレー人から入手したことや、ボルネオ島のプナンは周辺の定住民と接触があることという記載があった。そうした接触によって、とくに鍛冶屋をもつ定住民と生業上における特定の社会関係が築かれたら、道具に変化が見られるのであろう。しかし、当時の民族誌は記述が多様であるため、道具にかかわる歴史的な変化及びその要因を明らかにすることは難しい課題だと考えられる。

4. 今後の課題

本研究においては、アフリカの熱帯雨林地域と東南アジア島嶼部という森林地帯を対象に、そこに暮らす狩猟採集民集団の道具利用について予備的な調査をおこなった。そうした民族誌データの整理と分析を通じて、現代の狩猟採集社会における道具利用の多様性にかかわる主要因を明らかにした。それは、1) 自然環境（生態学的環境）、2) 性的分業などの集団内の社会システム、3) 隣接集団との関係から影響される傾向がみられた。その3つの要素と道具利用の多様性との関連に関する比較研究は、アジアの新人文化の多様性に関する生態人類学及び民族考古学の研究において、新たなヒントが得たと考えられる。

しかし、その3つの要素と道具利用の多様性との精確な相関関係については、民族誌資料の質と蓄積の量が異なるため、徹底的な分析に耐えられないことが明らかである。今後の調査においては、現地（海外）の博物館と大学の資料を利用したり、実際に現地（海外）で生態人類学や民族考古学をおこなっている研究者との共同研究を試みる必要があると考えられる。

注

- 1) 各民族集団に関する具体的な事例はパレオアジア文化史学第4回研究大会において、ポスター発表で紹介した（彭2017）。

参考文献

- Binford, L. R.
2001 *Constructing frames of reference: an analytical method for archaeological theory building using ethnographic and environmental data sets*. University of California Press.
- Carey, I.
1976 *Orang Asli: The Aboriginal Tiribes of Peninsular Malaysia I*. London: Oxford University Press.
- Evans, I. H. N.
1968 *The Negritos of Malaya*. London: Frank Cass & Co. LTD..

- Hoffman, C.
 1986 *The Punan: hunters and gatherers of Borneo* (No. 12). Michigan: UMI Research Press.
- Kaskija, L.
 2012 *Images of a forest people: Punan Malinau-identity, sociality, and encapsulation in Borneo*. Acta Universitatis Upsaliensis.
- Man, E. H.
 1883 On the Aboriginal Inhabitants of the Andaman Islands. (Part I . *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, 12, 69-116.
- Oswalt, W. H.
 1973 *Habitat and technology: the evolution of hunting*. Holt, Rinehart and Winston.
- Radcliffe-Brown, A. R.
 1922 *The Andaman islanders: a study in social anthropology* (*Anthony Wilkin studentship research, 1906*). The University Press.
- Wade, D. and T. Henley
 1990 *Penan: Voice for the Borneo Rainforest*. British Columbia: Hemlock Printers Ltd..
- 彭 宇潔
 2017 「狩猟採集民にみられる道具と道具利用の多様性に関する比較研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 4 回研究大会』、東京大学本郷キャンパス、2017 年 12 月 9-10 日 (予稿集 60 頁)。

ストーンボイリングをめぐる文化の〈革新〉と〈退行〉

山田 仁史

(東北大学)

はじめに：料理仮説とストーンボイリング

このところ、いわゆる料理仮説 (cooking hypothesis) がさかんに唱えられている。そのシナリオとは、こうである。類人猿とヒトとを分ける最大の違いは何か。この問題に対し、従来優勢だった仮説は、ヒトが肉食を始めたことだ、と答えてきた。高カロリーの肉を摂取することによって脳のサイズを拡大させたヒトは、その高度な知能をもちいて飛躍的な進化をとげたのだ、というわけだ。それに対して料理仮説は、いやそうではなく、火によって食物を調理する行動こそが、ヒトをヒトたらしめたことと主張する。加熱をとおして食料の消化・吸収が容易になったことで、脳が増大したのみならず、それまで頑丈だった口・歯や胃腸などが小型化し、摂食以外の活動に割ける時間が長くなり、さらには性別分業や社会的協力など、現代までひきつがれる多くのヒト的要素へつながった、というのである (ランガム 2010)。

このように、肉食仮説へのアンチテーゼとして出てきた料理仮説にはしかし、いまだ数多くの難問が残されている。主唱者のランガムが言うように、もしホモ・エレクトゥスの時点で料理がなされていたとするなら、不整合な点がいくつもあるのだ。とりわけ、ネアンデルタール人に至っても、まだ料理は散発的にしかなされていなかった、との指摘もあって、ランガムもそうした自説の弱点を認めている (Wrangham 2017; Henry 2017)。

つまり、料理そのものの起源という問題は未解決である。けれど疑いなく、ストーンボイリングは土器を必要としない、人類史における最古の料理法の一つである。民族学においては、タイラーが「ストーンボイリング」と命名して以来 (Tylor 1865: 262-268)、1910年代における地炉 (earth oven) の分布と型式にかんする議論をへて (Haberlandt 1913; Graebner 1913; Friederici 1914)、地理学者ディットマンが最も包括的なモノグラフ『石で煮る：食物調理発展史への一寄与』を著した (Dittmann 1990)。ここでは主として以上の研究とりわけディットマン著を手がかりに、民族誌データにみられるストーンボ

イリングの記述を拾い、先史時代の食文化、さらには文化の〈革新〉と〈退行〉に関して示唆するところは何か、考えてみたい。

そもそもストーンボイリングとは、熱した石により煮る料理法のことである。この方法では、前もって熱しておいた石を液体中または粥状の食物内に入れることで、沸点まで加熱することが可能だ (Dittmann 1990: 13)。ストーンボイリングのための前提となるのは、次の4点である。まず (1) 容器を作るための材料、(2) 好適な石のストック、(3) 石を熱するのに充分なだけの燃料、そして (4) 火から石を取り出し、熱しようとする液体中に入れ、さらに上手く放熱した後で他の石と交換するための、簡単な道具だ (Dittmann 1990: 15)。

物質文化の観点からすると、ストーンボイリングは三つのグループに分類される。(1) 防火性の料理容器を有しない文化において、ストーンボイリングが唯一の、または主要な加熱法として用いられる場合、(2) 防火性の料理容器を有する文化において、そうした容器が手もとにない (狩猟や家畜の番の最中など)、非常時にストーンボイリングが用いられる場合、(3) 他の加熱法では得られないような、特定の味わいなどを目的として、個別的食物における特殊な調理法として用いられる場合である (Dittmann 1990: 15)。

そしてまた、ストーンボイリングそのものではないが、関連する加熱法として、次のようなものがある。(1) 熱石の使用が中心的意義をもつ点は同じだが、この石を用いて煮沸するわけではない場合。これの例としては、石焼き芋が挙げられよう。次に (2) 食物に火を通すのに必要な容器を、土器・鉄器の欠如により、別の方法で置き換える場合。熱石も共用されることがあるが、どうしても必要な要素ではない。例としては地炉¹⁾がある。また (3) 土器・鉄器を使用せず、防水性・可燃性の容器を直火にかける場合。これはたとえば、後述する「竹筒飯」などである (Dittmann 1990: 17-18)。

なおストーンボイリングに用いられる石の石質としては、石英 (Quarz) および珪岩 (Quarzit) が最適であり、

その理由は、急激な温度変化に比較的よく耐えうるからだとされている (Dittmann 1990: 23)。

1 関連した料理法：胃袋や皮革の中で火を通す

関連した料理法として、胃袋を用いるものがあり、これはストーンボイリングの分布と地理的にかなり重なる (Dittmann 1990: 37)。皮革を用いる場合もあるが、実験結果によれば胃袋がもっとも壊れにくく、向いている (Dittmann 1990: 39, 84-85)。

この文献史料における初見はヘロドトス『歴史』巻4第61節であり、次のように記されている。

スキュティアは極度に木材の乏しい国であるので、彼らは肉を煮るのに次のような手段を案出している。犠牲獣の皮を剥ぎ終ると、肉を骨から離し骨だけにすると、鍋の用意のあるときには、この地特有の鍋に肉を入れる。この鍋はレスボスで用いる混酒器に大変良く似ているが、ただスキュティアの鍋の方が遙かに大きい。さて肉をこの鍋に入れてから、犠牲獣の骨を〔燃料として〕燃やした火にかけて煮るのである。鍋のないときには、犠牲獣の胃の中へ肉を全部入れて水を加え、骨を〔燃料として〕燃やした火にかける。骨は実によく燃えるし、胃袋には骨から離れた肉が優に入るのである。こうして牛はわたとわが身を煮るわけで、牛以外の獣の場合も同様である (松平訳 1971-72 中: 38。〔 〕および下線は山田補記、以下同)。

すなわち紀元前5世紀のスキタイでは、緊急時に肉を胃袋の中で煮ることが行われたわけだ (Dittmann 1990: 33)。

実際、動物の胃袋を煮炊き容器に用いることは、ヨーロッパでは広く行われてきた。たとえばユーゴスラビアでは20世紀まで確認されている。セルビアの民族学者シマ・トロヤノヴィチ (1862 生～1935 没) によれば、

ビトラ (マケドニア) のハイドゥク人は古くから今もなお、とりわけ深い森の中において土器や鉄器が手もとにない時には、動物の胃袋の中で食事を調理している。こんな場合、スキタイ人のような仕方では食事を調理するわけである。羊や山羊の胃袋に肉を層状に入れて水を注ぎ、スパイスを加えて、彼らの考えではとても美味しい料理を作るのである。ただし火は、スキタイ人のように骨を燃料とはしない。森の中に薪がたっぷりあるからだ。

トルコ人との戦闘中、戦場外にいたモンテネグロ

人は、まったくスキタイ人と同じ方法で食事を調理した。山羊はいたのでこれを屠り、先述の仕方では肉を美味しくする。次のような具合である。屠殺した動物の胃袋をまずきれいにする。この目的のためには腸を胃から切り離し、そうしてできた穴からあらゆる汚物を流し出すのである。こうして洗った胃袋に肉を詰め込み、その上に水を注いでから穴をきつく縛って、肉と水を満たしたままの胃袋を樹幹に垂直に出た枝に掛け、その下に火を起こす (図1)。1878年のセルビア＝トルコ戦争時には、まったくこのやり方でセルビアの兵士たちが食事を調理した。ただしこれは、調理具が身近にない場合だけである。今でもこの仕方を覚えている者は多い。ニシュとプロクプリェが包囲された際、このやり方で調理した人たちが、これについて私に語ってくれた (Trojanović 1901: 251)。

同様の事例は他にも報告されている。バイカル湖の西、アンガラ川中流域のバラガンスクに住むブリヤートにおいては、山羊肉をその皮の中に入れ、熱した石で煮る方法があった。1738年にドイツの博物学者・地理学者ヨハン・ゲオルク・グメリン (1709 生～55 没) が観察したのは、次のようなものである。

この辺のブラツキ [ブリヤート人] はいろいろな家畜に不自由していなかったので、我々はバイカル



図1 モンテネグロ人における山羊の胃袋による調理 [Trojanović 1901: 251]

湖の対岸で非常に盛行している一種の焼き方を見たいと思った。それは動物の肉を、当の動物の皮の中で焼くというものである。ここのブラツキはこれを知らなかったが、我々の通訳は湖の対岸に住むブラツキのもとでこれを充分に見ていたし、一緒に食べてもいたので、自分がこの料理をやってみましょう、とすぐに申し出た。彼は仔山羊をつかんでその頭を何度も回し、ついには息絶えさせた。それから傷をつけないように皮を剥いだ。まず後脚から始め、頭部へ向けて皮を剥く。そして頭部から脊椎骨を切り離した後、頭部は付けたままにしておく。皮には全体的に肉を残しておき、厚みが出るようにする。皮から切り離した肉と骨は、関節部で多くの小片に切った。腸間膜・肝臓・胸骨は別にする。そうしている間に、焚き火で小石を熱しているが、赤熱するほどにはしない。こうして準備が整うと、剥いだ皮を頭部が下になるようにして、大きな冷たい石の中へ入れる。そして皮をきつく縛るので、頭部はすっかり閉じられ、熱が逃げないようにする。それから何カップかの水を皮の中に注いだ後、熱い石を投げ入れ、その後に肉を、そしてまた石を、と続けて、皮を半分以上満たす。それから皮を尻の部分できつく括り、前後に動かす。しかし間もなく焼けて穴があいてしまい、これを器用に石でふさいだ。さらに皮を前後へ動かし続けると、毛が焦げて落ち始めた。料理人いわく、これは皮にまんべんなく肉を充分に残していなかったためだ。もしそうしていれば、皮がすぐ焼け切れてしまうのを防げたはずだと。ところがこの手違いが起きたことを、料理人は認めた。そして彼が付け加えたところによると、これが起きなければ、何度か皮を前後に動かすとパチンという大きな音がする。これが肉に火の通った合図だと、彼は請け負った。今回はパチンという音はなくとも火が通った。皮じゅうの毛はすでに抜けており、胴体を切り開くと、中の肉は煮えたり焼けたりしていたが、どちらも美味しそうな濃い肉汁の中に浮かんでいる。焼けたり煮えたりした肉は汁および、調理容器の役をした皮と、全て一緒に食べるのだが、頭部は捨ててしまう。この調理をしている間、皮の中に入れなかった肉と臓物は、鍋で煮ていた。胸骨と肝臓はどちらも小さな棒によって地面に刺し、火の近くで何度も裏返して焼く。胸骨部は珍味として供されるが、肝臓の方は小さく刻み、2、3片を腸間膜の小片にくるんで更に焼いてから、食べるのである。この焼き方を用いる当地のロシア人は、これをトゥルニト (Tulun) と呼ぶ。トゥルニト (Tulun) とは、私の思

い違いでなければタタール語でそうした動物の皮のことを言うので、そこからロシア語に入ったのである。ただしトゥルニトとは、そこから作られたロシア語動詞風の語尾である (Gmein 1752: 74-77, cf. Dittmann 1990: 282-284)。

これはまさしく、ヘロドトスによるスキタイについての記述を彷彿させるものだ (Dittmann 1990: 34, 284)。

新大陸へ目をうつすと、パタゴニアのテウエルチェ族におけるダチョウの料理法について、英国海軍中佐のジョージ・チャーワース・マスターズ (1841 生～79 没) の記録が残されている。

狩猟が終わり、鳥を解体する段になると火を起こす。そして石をいくつか熱している間にダチョウの羽毛をむしるが、両翼は注意深く臆でしばっておく。それから鳥の背を下にして横たえ、はらわたを抜く。脚の皮を丁寧に剥ぎ、骨を取り出して皮だけを残す。それから胴体を半分に分け、下半分から背骨を取り出してから、肉をスライスしてその隙間に熱石がおさまるようにする。脚の皮を用いて袋のように結び、小さい骨を通して全体がぴんと張るようにする。これを残り火の上に置き、ほぼ火が通ったら明るく火をつけて外側の肉を完全に焙る。この料理の間じゅう、何度もひっくり返して全体に火が行きわたるようにしなければならない。出来上がったら火から離し、てっぺんを切り開いて石を取り出すと、肉汁と肉は美味しそうに調理されている。狩猟団はふつう2人か4人から成るが、料理の周りに座って肉を汁につけて食べる。鳥の背部は (ダチョウの状態がよければ) ほとんど脂肪から成る。これを次に分けて各人に渡し、残りは女性や子供たちにとっておく (Musters 1871: 73-74, cf. 1873: 83, Dittmann 1990: 251-252)。

つまりここではダチョウの皮を容器に用い、中に熱した石を入ただけでなく、外側から火でも加熱したわけだ。他に容器として用いられたのはグアナコ (野生ラマ)、スカンク、アルマジロなどである。このように動物の体を中空にし、熱した石や肉や臓物を中に詰める方法は、ストーンボーリングの前段階と見ることができる (Dittmann 1990: 252-253)。

さてオーストラリアでは、ストーンボーリングそのものは確認されていない。ただし、特にディングやカンガルーといった大型動物については、熱した石を使う調理法が存在した。ドイツの民族学者エアハルト・アイルマ

ン（1860 生～1926 没）は、1896-99 年および 1900 年のオーストラリア南部各地での調査にもとづき詳しい記述を行なっている。それによると、

現地民が食物を自然の状態でも口にするのは稀である。ふつうは火を用いることで、味も消化も滋養もよくする。たとえば生肉を食べることは決してない。ただし料理技術は、彼らの低い文化段階にふさわしく、きわめて簡単である。大型動物は熱灰の中に入れるか、浅い坑の中で灼け石により火を通す。対して小型動物は熱い灰の中か木炭の上で調理する。植物性食料の多くも、食べる前に熱作用を与える。食料を湯の中で煮る知識を得たのは、白人がこの地にやって来て以降のことである。適切な調理具がないのに、獣皮や木槽の中に水を入れ、灼け石で湯を沸かす方法を学ばなかったことから、彼らに発明の才がいかに乏しいかがよく分かる。……

大型の有袋動物はどの地域でも、火を通すに先だって同じ仕方で下ごしらえする。まず赤々と燃えた火の上に動物の体を数分間、置くかかざすかした後、ブーメラン、石英片または砂で毛をこすり落とす。この仕方で動物の毛が何とか落とせたら、腹腔を縦に切り開き、臓物全部（北部地方）またはその一部（内陸地方）を取り出す。たいてい上腿部に近い側面から切り込みを入れ、腹腔の中へ手をやすやすと入れられるくらいの長さまで切り開く。メスの個体であれば、内陸部の住民は育児嚢の中の腹壁を切り裂く習わしである。宿営地から離れた場所で野生動物を仕留めた場合には、これとは別のやり方を取り、獲物を軽くするために内臓の一部をすぐに取り出すのである。

カンガルーやワラビーの料理法には 3 種類ある。北部の種族は、ポリネシア人の調理法とよく似た仕方を用いる。まず深さ約 40 センチの縦長の坑を掘る。その中に、むしり砕いた鞣皮と乾いた小枝を積み重ね、左右の長辺それぞれに丸太を置いてから、その上に横に太い棒を何本もわたして天井とする。さて一人の者が団扇状の物を用いて、小枝と鞣皮の堆積を燃やしつげると、他の者は拳大の石を大量に、橋状をなした棒の上へ投げる。木の棒が炎に呑みこまれるとすぐ、石を火中から取り出し、すでに臓物を抜いた動物の体腔へその一部を詰める。最後の石はしばしば、動物の肛門の中へ押し込む〔肉汁が漏れ出るのを防ぐため〕。肉が灰や砂で汚れるのを避けるため、切開部は尖った小枝で閉じる。今や、脚と尾を鞣皮で括った動物を坑の中の熱灰上へ入れ、熱した



図 2 オーストラリア、燃える炭の中でカンガルーを焼く [クーン 2008 : 205]

石の残りで覆う。熱や湯気が逃げるのをできる限り防ぐため、カユプテ樹（《paperbark tree》, *Melaleuca leucadendron*）の樹皮で注意深く石を覆い、最後に全体の上に土を盛る。

キャサリン川流域のチャウエン族（Tjauen）および恐らく他の諸種族も、石と鞣皮の層の間に湿った葉の層を加え、灼け灰の上に濡れ葉を幾掴みか投げた後、動物を坑の中に置く。こうする目的は、湯気がたっぷり出るようにである（Eylmann 1908: 293-295, cf. Dittmann 1990: 286-287）。

カンガルーの腹の中に灼け石を詰め、さらに燃えた灰の中で焼く光景は、米国の人類学者クーン（1904 生～81 没）『世界の狩猟民』にも見ることができる（図 2）。ここではカンガルーの体は半ば土坑中に埋まり、脚の一部が突き出している（クーン 2008: 205）。

つまりオーストラリア先住民の調理法は、ストーンボイリングではないが、それに近い。彼らは動物の体を容器として用いたが、中に水を入れて熱石で沸騰させ、煮るという方法は採らなかったのである（Dittmann 1990: 288）。

2 ヨーロッパでのストーンボイリングとその記憶

ところで、ヨーロッパにおいてはアイルランドのストーンボイリングに関して、比較的多くの記録が残っている。たとえば 17 世紀の歴史家ジェフリー・キーティング（アイルランド名 Seathrún Céitinn, 1569 頃生～1644 頃没）がまとめた『アイルランド史』（1633-34 完成）には、次のような描写がある（Keating 1908: 326-329, cf. O'Kelly 1954: 147-148, Dittmann 1990: 55-59）。

彼らは昼夜に一度だけ食事をしたが、それは午後

にであった。彼らの慣習では、午前中の狩で仕留めた物をすべて正午ころ、特定の丘へと従者に運ばせた。丘の近くには雑木と沼沢があり、そこに激しい火をつけ、中に多数のエメリー石を入れる。沼沢の黄色い粘土に二つの穴を掘り、串に刺した肉をいくら、火の前であぶる。他の肉には藁縄 (súagán) の乾いた束を巻きつけ、二つの穴のうち大きい方に入れて煮る。火中にあった石をどんどん入れ続け、水を沸かしてよく煮るのである。この火はとても大きいので、その跡は今日アイルランドで黒こげになっており、今では農民たちにフラハト・フィアン〔フィアン戦士たちの調理場〕と呼ばれている。

ここで下線を引いた部分の処置は、オケリーやディットマンの解釈では、肉が灰で汚れるのを避けるためのフィルターと思われ、実験によってもその効果が確かめられている (Dittmann 1990: 58, 66)。こうしたストーンボイリング法は、ブリテン諸島では15、16世紀まで用いられた (Dittmann 1990: 59)。

アイルランドの旅行者の間では皮革を直火にかけ、肉を煮ることも行われた。ジョン・ダーリック『アイルランドのイメージ』(1581年) (Derricke 1581) にはその様子が描かれている (図3)。これを説明してくれる同時代史料として、イングランド人旅行者アンドリュウ・ボードによるアイルランドの調理法についての記述 (1550年頃) がある。それによれば、

彼らは肉を獣皮の中で煮沸する。獣皮は多くの木杭上に据えつけ、中に水と肉を入れる。それから杭に挟まれた獣皮の下で強火を起こすが、獣皮はさほど焼けない (Boorde 1870: 132-133。以上、cf. Dittmann 1990: 81-83)。



図3 アイルランドの旅行者が牛肉を皮に入れ直火にかけて煮るところ [Derricke 1581]

こうしたストーンボイリングの記憶は、「石のスープ」の昔話の中にもとどめられている (Dittmann 1990: 51-52)。ドイツの作家・神学者・教育者ヨハン・ペーター・ヘーベル (1766生~1826没) による『ライン地方の家庭の友の宝箱』に出ている「ずるがしこい巡礼」(Hebel 1811: 126-128) や、絵本として邦訳も出ているマーシャ・ブラウン『せかいいち おいしいスープ』(2010) などがそうした例である。このうち「ずるがしこい巡礼」は次のような話だ。

何年か前のこと、のらくら男が旅をしていました。男が言うには、「おいらは信心ぶかい巡礼で、パーダーボルンから来た。エルサレムの聖なるお墓にまっすぐ向かっているところ」。ミュルハイムまで来て郵便局でたずねた、「エルサレムまではどれほど遠いのかね」。すると答えは「700時間はかかるね、だけどマウヘン経由で歩いて行くなら15分は近くなる」。そこで男は、15分だけ近道するためマウヘンを通ってゆくことにしました。これは悪いことじゃありません。小さな利益も馬鹿にしちゃいけない。でなければ大きな利益にはたどり着けませんから。バツツェン銀貨を節約したり手に入れたりする機会は、たしかにグルデン金貨よりも多い。でも15バツツェンで1グルデンに相当するのですから、700時間の旅をして5時間ごとに15分ちぢめることができれば、旅をそっくり手に入れたも同然なのです。計算ができるほどの人であればね。ただ、我らがにせ巡礼はこんなことを考えたわけではありません。男にとっては、のらくら暮らしとご馳走があればよかったです。どこへ行こうがかまわなかったのです。

古い言い慣わしによれば、乞食というものは、裸足で歩いて足のうらが破れ、それ以外に何も得られないような、そんなひどい村であっても、迷うことなく入ってゆくものです。ところが我らが巡礼は、ゆたかな家々が建ちならび、ご馳走がふるまわれているような、街道筋へ一刻も早く出たいものだと、そんなことだけをいつも考えていました。なぜならこの流れ者は、ほんものの巡礼とはちがいで、信心深い人々が哀れんでふるまってくれるような、質素な食事には満足できず、栄養たっぷりの石スープしか、食べようとはしなかったからです。それはこういうわけなのでした。

男がどこかの街道に、りっぱな宿屋が建っているのを見かけたとしましょう。たとえばクロツインゲンの郵便宿とか、シュリーエンゲンのバーゼル紋付き宿屋のような所です。すると男は入って行き、う

やうやく頼むのでした、「腹ぺこなんだ、お金はないけれど、どうか石のスープをめぐんでください」。情けぶかい宿のおかみが、「信心深い巡礼さん、石なんか胃袋にぶつかるだけよ」と言えば男は、「それがいいですよ。石はパンより長くもつし、エルサレムへの道は遠いんです。だけどほんの少しワインをくださるなら、消化にはとてもいいんだがね」。それでおかみが「でもねえ、信心深い巡礼さん、そんなスープじゃ力が出ないわ」と言えば男は答えて、「スープの水のかわりに肉汁を入れてくれりゃ、栄養は満点だ」。おかみが指図どおりのスープを出し、「中のパン屑が柔らかく煮えていないわ」と言うと男は、「ほんとだ。それに肉汁もうすいようだな。どうだい、野菜をいく掴みか、あるいは肉を一かけ、入れてもらえんかな。両方でもいいぜ」。それで情けぶかいおかみが野菜や肉も深皿に入れてくれると、男は「ありがたや！今度はスープを食べるから、パンもくれないか」。

こうして男は巡礼服の袖をまくり上げ、いすに座ってたのしい食事に取りかかり、パンとワインと肉と野菜と肉汁を、最後のひとかけ、ひときれ、ひとしづくまで平らげてしまうと、テーブル掛けか袖口で

口をぬぐうか、あるいはそれもしないまま言うのでした。「おかみさん、あんたのスープで腹いっぱいになったので、もう石のほうはけっこうだ。残念だが次に取っておいてほしい。また戻って来たときに、アシュケロン海岸の聖なる貝か、エリコのバラをおみやげにあげるさ」(Hebel 1811: 126-128)。

この物語では、石のスープというのは単なる口実以上の意義を有していないわけだが、本来はストーンボイリングを知っていた人々が考案した笑い話だったのであろう。

3 北米・北アジアにおけるストーンボイリング

さて、北米におけるストーンボイリングの様相は、ドライバーとマッセーによりかなり明らかにされている(図4・5・6・7・8・9)(Driver & Massey 1957: 229-237)。

大要を記せば、次のような具合だ。ストーンボイリングは、北西海岸では防水性の籠や木箱で魚の大部分を煮るのに用いられた。カリフォルニアおよびプラトーと大盆地では、やはり水を通さない籠を使い、ストーンボイリングで主として植物性食料を調理した。平原部にもス

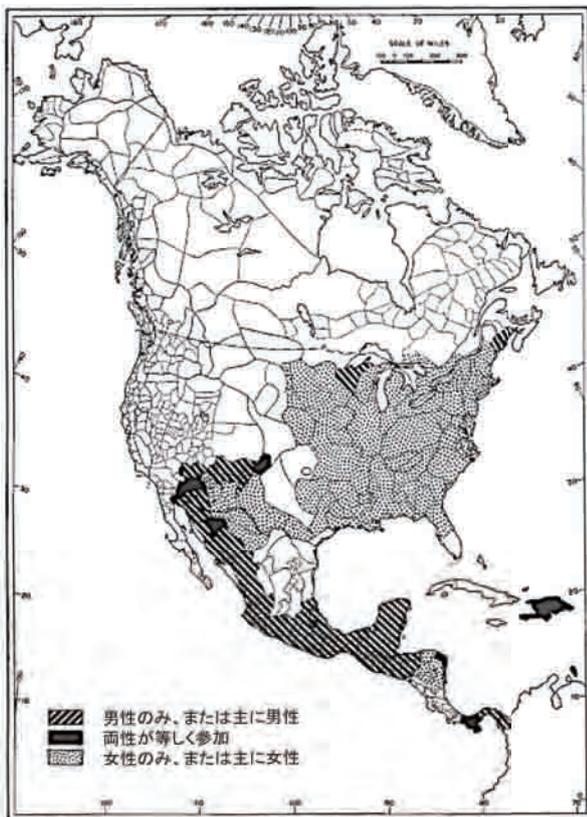


図4 北・中米の農耕における性別分業 [Driver & Massey 1957: 227]



図5 北・中米の煮炊き法の分布 [Driver & Massey 1957: 227]

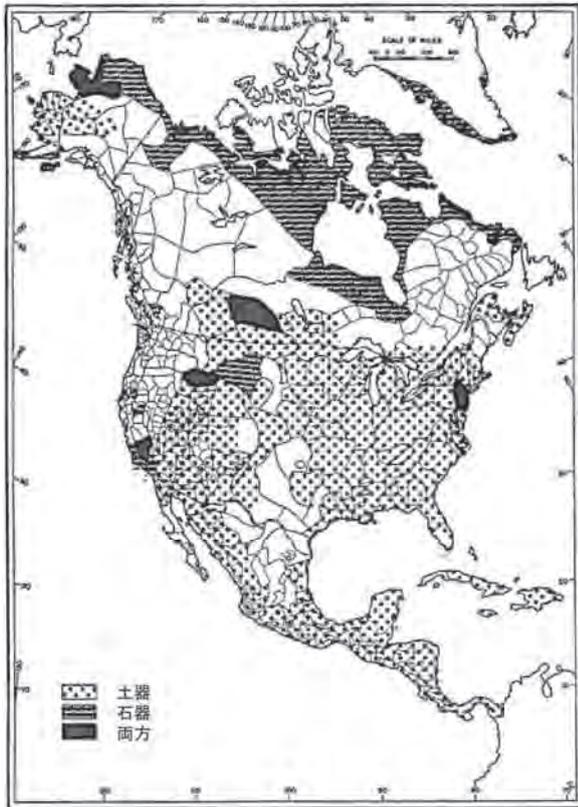


図6 北・中米において直接火にかける際の主要な容器
[Driver & Massey 1957: 230]



図7 北・中米において直接火にかける際の副的な容器
[Driver & Massey 1957: 230]



図8 北・中米のストーンボイリングにおける主要な容器
[Driver & Massey 1957: 232]



図9 北・中米のストーンボイリングにおける副的な容器
[Driver & Massey 1957: 232]

トーンボイリングは広く分布した。白人と接触して馬を導入して以後、プレーリー北部のネイティブ・アメリカンの一部は、それまでの定住的生活から、移動しての狩猟生活へと経済形態を転換した。この過程で壊れやすい土器はしばしば、運びやすい動物の胃袋や皮革に取って代われ、ストーンボイリングへ移行することもあった。亜北極の狩猟民でもストーンボイリングが行われ、とくに西部のアタパスカン系諸民族において大きな意義を有した。アラスカのエスキモーのもとでもストーンボイリングがなされた。北極・亜北極では、主に動物の胃袋、防水性の籠ないし樹皮容器に熱した石を入れた。全体的に、北米では狩猟採集民とストーンボイリングの相関性が高い。南西部・南東部の農耕民においては、防火性の土器が優勢だった。とはいえ、これらの地域でもストーンボイリングの形跡がみとめられる (Dittmann 1990: 207, cf. 229)。

興味深いことに、南北アメリカ大陸を通じて、ストーンボイリングは狩猟採集民に特徴的な文化要素である。一方で、土器による煮炊きは農耕との相関性が高いのである (Dittmann 1990: 264)。

とくに記録の多い北米北西海岸ではストーンボイリングが中心的な役割を果たし、唯一の煮炊き法でもあった。魚や肉および植物性の食料をこの方法で調理したが、とりわけ干し魚を作るためと、魚油・魚脂を冬季の貯蔵用に獲得するために、この方法が用いられた。とくに魚油・魚脂は大量に必要とされたため、丸木舟でこれを行なった (Dittmann 1990: 210-211)。なお木箱によるストーンボイリングはヒラリー・スチュアート『海と川のインディアン』の図に見ることができる (図10) (スチュアート 1987: 104)。

この図にかんして、ディットマンは次のように補足説明を加えている。滑らかな丸石を火ばさみで取り上げ、



図10 北米北西海岸における木箱によるストーンボイリング [スチュアート 1987: 104]

これを洗い桶の中に素速く入れて、灰や木炭の汚れをとる。これは、アイルランドでかつて肉を藁で包んでいたのと同じく、汚れ対策である。こうした汚れ対策は他の地域にもあっただろうが、北西海岸のストーンボイリングは特によく記録されているため例外的に知られているのだろう。また、たいていは木箱の中の液体(水、魚油または両方を混ぜたもの)が沸騰してから、食物を中に入れた。肉・魚・植物を入れることで液体の温度は下がるが、熱した石を再び入れることで、また比較的すぐに沸騰した。さらに食物を直接に木箱に入れるのではなく、肉片や干し魚を、通水性のザルに入れた状態で、木箱に入れることもあった。こうすることで、さらに汚れにフィルターをかけることが可能となるとともに、肉や魚の切り身が、熱湯の底にある石によって焦げつくのを避けることもできた。そしてストーンボイリングの他、捕ったばかりの魚を直火で焼く仕方や、蒸し料理もあった (Dittman n 1990: 213-216)。

北米北西海岸でとくに重要だったのは魚油・魚脂の獲得である。これは日常的な調理とならび、ストーンボイリングを用いる重要な場面だった。魚油・魚脂はさまざまな料理に用いられ、冬季には大量に貯蔵された。その方法は後述するカムチャツカ半島のイテリメンとほぼ同様である。

詳細な記述は、ドイツの自然科学者・民族学者アウレル・クラウゼ (1848 生～1908 没) 『トリンギット・インディアン』 (1885) に見ることができる (図11)。それによれば、アラスカ南東部のトリンギットでは、サケ類から次のように魚油・魚脂をとった。

捕った魚は、頭・尾・鰭を切り取ってから、腹側を切り開き、屋根の形をした木製作業台の上に、背を下にして縦に置く。こうすると両方の半身が作業台の両側に垂れ下がるので、内臓と背骨を楽に取り除けることができるのである。魚捕りは男がするの



図11 丸木舟によるストーンボイリングで魚油を得る仕方、トリンギット [Krause 1885: Taf.3]

に対し、この仕事は女性が行うが、それにはたいいて半月形で円い柄のついたナイフを用いる。

はらわたを抜いた鮭は、同じく半身を外に向けて竿に掛ける。雨と直射日光からは、できるだけ緑の枝で守ろうとする。雨天時には屋内に掛けることもあるし、必要があれば火の上に干すこともある。干した鮭は平らに開いて重ね、紐を通し束にして保存しておき、時々利用する。

こうして冬の貯えができると、残った漁獲物は油を採るのに使われる。これに適しているのは、脂肪分は多いが味わいの劣る、白鮭 (weiBer Lachs) である。採油はカヌーの中で煮つめることにより行われ、これは本来の油魚たるユーラコン (Ssag) におけるのと同様である。これについては後述する。

鮭漁よりずっと意義の小さいのが鱒漁で、これは特に冬季、当座の需要を満たすためだけに行われる。川面の氷で、下に約1メートルの深さの水がある所に小さな穴をいくつかあけ、餌を川底に落としてやる。さて穴の横にインディアンはうずくまり、毛織の毛布にすっぽりくるまる。これにより直射日光を遮り、同時にまた薄暗い中を深くまで見通すことができるし、魚には迫り来る危険を隠すことにもなる。彼は身じろぎもせず、^{やす} 稽を水中に沈めたまま鱒が近づくの待ち、素速く確実に一突きして串刺しにする。この漁に用いる稽は中央の鉄製の突端が短く、左右二本の突端は木製で長めになっており、どちらも内側向きに鉄釘が取り付けられている。これら左右の突起は、突いた時に弾力をもって反対を向き、斜めに取り付けられた釘が魚の両わきを押さえ付けるのである。

2月の終わりにになると、チルカット地域の河川には、キュウリウオに属する小さな魚、ユーラコン (*Thaleichthys pacificus* Gir., 現地語《Ssag》、英米人は《smallfish》と呼ぶ) が現れる。この時季には冬の貯えがすでに尽きようとしているので、Ssagの到来は大いに歓迎され、この美味しい魚をその短い遡上期間内に捕らえようと、老いも若きもはやり立つ。この漁獲量はさほど多くないが、当座の用にあてられる。ところが2ヶ月後の4月末から5月半ばには、同じ魚がずっと大群で現れ、しかも個体は太って脂がのっている。この時こそ大規模な漁が行われる。鮭漁に用いられるものと似て、ただ魚体に応じて細長い構造の^{うけ} 筥や鉤を用いる場合もあれば、冬の間に女性たちが動物の腱から作った手網を用いることもある。捕らえた魚は油を採るためカヌーに投げ込まれる。カヌーは半ば砂に埋めたくえ、カヌーの

両側面に打ち込んだ支柱で固定し、舟上を横にわたした縄でこれをきっちり留めてある。その横では薪で強火を焚いた中で、拳から頭部の大きさの石を熱し、これを木製のトングで攪んで、水と魚で満たしたカヌーの中へ入れる。水はすぐに沸き、これに熱した石を加え続けると、数時間は煮立ったままになる。冷めた石は、^{ふるい} 篩のように穴のあいた木製スコップで取り出し、カヌー上に設けた一種の木製格子の上でお湯をかけ洗い流してから、再び加熱する。そして述べたようなプロセスをさらに何度か続ける。湯の表面に浮かんだ魚油は、半円状に曲げた杉の樹皮片でカヌーの前方部へ移し、ここで木匙ですくって大きな四角の木箱に入れる。長いこと放置してからすくい取って小箱に移すと、魚油はきれいになる。

冷めた魚油は、鷲鳥の脂のような外見と粘性をもつ。新鮮な魚から作った魚油はほぼ真白でとても美味しいという。しかし普通は10日から14日も穴の中に置いていた魚から得られるので、多少とも文明化された口には合わない。

煮くずれてどろどろになった状態でカヌーに残った魚は、まだ大量の魚油を含んでいるので、さらに搾り取るため、根繊維を編んで作った目の細かい籠の中に満たし、その孔から水と魚油を圧搾する。また、別に前もって洗ったわけでもない裸足で、カヌー自体の中で踏みつけたり、熱した石でもう一度煮立てたりすることによって、できるだけ完全に魚油を分離させる。

約3人乗りの中型カヌーに魚をいっぱいに入れば、ほぼ5ないし6ガロン〔英ガロンは4.546リットル、米ガロンは3.785リットル〕の魚油が採れる。1882年、チルカット地域では1人につきカヌー8艘から12艘分が採れ、これは上々の出来であった。魚油はほとんど専ら食用にし、干した鮭と一緒に食べる。秋には、これに更に鮭脂やさまざまなベリー類を混ぜて、冬季用に漬物にする (Krause 1885: 176-178)。

北西海岸では、防火性の金属容器が入った後も、魚油・魚脂の獲得にはストーンボイリングが用いられ、所によっては20世紀前半まで行われていた。これは、カヌーにより大量に採油することが、他の方法では代替できなかったためである (Dittmann 1990: 219)。

北アジアでは、カムチャツカ半島のイテリメンについて、ストーンボイリングの詳細が知られる。ユカギルやコリヤークはロシア商人からの影響により、早くにこの慣習を放棄し鉄器を使うようになったが、イテリメン

は長く続けた。早期の記録はドイツ人博物学者・探検家
ゲオルク・シュテラー（1709 生～46 没）によるもので、

かつて、まだ鍋その他の調理具を持っていなかった頃、彼らは豚の餌入れ槽おけとまったくよく似た木製槽の中に魚を入れた。その上に水を注ぎ、これらを灼け石で煮て、犬と同じく調理具から食べた。しかし今では彼らはずっと清潔になっており、犬だけがこの古いやり方を続けている（Steller 1774: 322-323）。

シュテラーの著書に載った銅版画の一枚（図 12）には、イテリメンの夏の家が描かれ、前方右側では今まさに銅鍋が直火にかけられているが、左手の二人の人物は、灼け石を火中から拾い上げて大きな舟形の木槽に投げ込んでいる。それに用いられる長い木の棒は先端が皿のように加工されており、熱い石を扱いやすくなっている。湯気がもうもうと立っているところからすると、木槽の中の液体はすでに沸いている。つまり、伝統的なストーンボイリングと移入した金属器による煮沸は、同時代に併用されていた。しかしストーンボイリングはその後も続いたのである（Dittmann 1990: 270）。

シュテラーより約 160 年後の 1829 年にこの地を旅行した物理学者・地理学者のアドルフ・エルマン（1806 生～77 没）は、次のように伝える。

その後すぐまたトヨン〔コリヤーク人の首長〕が、備え持った自嘲を込めて語るには、ヨーロッパ系ロシア人がカムチャツカでは「火の人」と呼ばれており、それは彼らが鋼鉄を打って出す火花が、その指から出ていると考えられたためだ、と言う。一方カムチャツカの発火具（つまり摩擦で火を起こす木片）は、もはやほとんど使われなくなった。ただし自分



図 12 イテリメンの夏の家とストーンボイリング [Steller 1774]

の同胞たちの多くは、鉄製の調理具の使用にはずっと後まで抵抗してきた。なぜなら木製の容器に投げ入れた石に触れてできた料理だけが、美味しくなると信じてきたからだ、とも言う（Erman 1848: 423）。

さらに、1851-55 年にカムチャツカに滞在した探検家・自然科学者のカール・フォン・デイトマー（1822 生～92 没）によれば、イテリメン〔カムチャダル〕におけるストーンボイリングは北米北西海岸と同じく、魚脂を得るために行われていた。

捕らえた魚〔鮭など〕は驚くべき量で川岸へもたらされ、そこに集まった女たちに続きの仕事がまかされる。ここでは、魚がどんな利用に適しているかによって、非常にさまざまな調理法が行われる。よい魚は生で消費するために選り分けられたり、ユコラ〔干し魚〕の分にされたりする。悪い魚は坑に投げ入れて腐るにまかせると、いわゆるキスラヤ・リュバ（Kisslaja-ryba）という、途方もない代物だがカムチャダル族が非常に愛好する食物ができる。最も良質の魚は皮と骨を取った後、生の魚肉を木製容器の中へ入れて踏みつけどろどろにした後、パンの形にして竈で十分に焼く（いわゆるテルノ Telno）。このテルノは、中にサラナ（Ssarana）つまりベリーを加えることで、一種のケーキにも用いられる。残った大量の魚は清潔なバット（Batt）〔割り舟、たいていイハコヤナギ製〕の中へぶちまけ、水を注いでから、灼け石を投入して十分に煮つめる。すると魚脂が浮かんでくるので湯の表面からすくい取り、食用または照明のために保存する。この脂は、できたてであれば悪くない味がした。百匹の魚から約 1 プード〔16.3 キログラム〕の脂がとれる。脂をとり終えた魚は犬の餌にした（Ditmar 1890: 376-377）。

これは 19 世紀から 20 世紀の世紀転換期にもまだ続いていた。ボゴラス（1865 生～1936 没）によると、

ユカギールとカムチャダル〔イテリメン〕は樹皮か木製の容器に肉や魚を入れ、熱した石で煮るならわしだった。こうして肉を煮る仕方は今でも時折、猟師たちが用いている。鍋を持ち運ばず、この古いやり方で肉を煮ることがあるのである。カムチャツカ中央部のカムチャダルはギンザケ（*Salmo sanguinolentus*）を割り舟に入れ、熱した石で魚油を抽出している（Bogoras 1904: 194）。

つまり北米北西海岸とカムチャツカ半島では、同様のストーンボイリング法により魚油・魚脂の獲得が行われてきたのである。

4 南北アメリカ大陸における、その他のストーンボイリング

カリフォルニア先住民においてはドングリの調理にストーンボイリングが用いられ、とくに人類学者・考古学者ウィリアム・ヘンリー・ホームズ（1846 生～1933 没）による挿画は貴重である（図 13・14・15）（Holmes 1902: Pl.15, 33）。

この地域で、なぜストーンボイリングを続けたかについて、カリフォルニア北部ヤヒ族出身のイシは次のように語った。

「白人はよい材料をぐらぐら煮えたぎる湯で満たした鍋に入れる。長く入れておく。そうすると、煮えるのがはやすぎるから、煮過ぎになる。肉も野菜も台無しになる。正しいやり方はどんぐりのかゆを作るようにやる。鍋に水を入れる。水中に熱した石を入れて、気泡が出るのを待つ。どんぐりを入れる。プカプカと煮える。それで仕上り。同じように鹿シチューも作る。うさぎシチューも同じ。プカプカと料理する。あまり時間をかけない。肉は硬く、スープは澄まし、野菜は軟らかくなって割れたりしないように」[クローバー 1991: 241]。

平原・プレーリー文化領域では、アシニボインに関して画家ジョージ・カトリン（1796 生～1872 没）による古典的記述があり、これはタイラー以降、多くの論者が引用しているものだ。

アシニボイン族には、彼らがその民族名を得たところの、非常に興味をそそる慣習がある。隣人たち[オジブワ族]からつけられたその名称は、彼らが肉を煮る独特な方法によるもので、次のようになされる。肉とする獣を殺したら、通常の壺ほどの大きさに地面に穴を掘り、動物の背中から剥いだ生皮をその穴にかぶせ、両手で押し込んで周囲の隙間をなくし、水を満たす。それから煮ようとする肉をこの穴、いわば水壺に入れる。そして近くで起こした火中で、いくつか大きな石を真赤に焼き、続けざまに水中に浸し入れて、肉を煮る。この独特で珍奇な慣習から、オジブウェー族は彼らに「アシニボイン」つまり「石で煮る人」という呼称を与えたのである。

この慣習はとても手際が悪く時間もかかるもので、鍋や壺を作ることを知らない粗野な部族によって、肉を煮るのにだけ用いられる巧妙な方法だ。

商人たちは近年この人々に壺を供給している。それよりずっと以前から、マンダン族〔アシニボインの南の隣族で農耕を行っていた〕は彼らに、とても見事で実用的な土製の壺の作り方を教えていた。こうして彼らは、公的な祝祭の時を除いては、この慣習をすっかりやめてしまった。ただ祭の時だけは、他の人類全員とおなじく、古い慣習を大事に続ける



図 13 ボイリングストーンを棒で掴み上げる（ドングりを煮るカリフォルニア先住民）[Holmes 1902: Pl.15]



図 14 ボイリングストーンを籠の湯の中から取り出す（ドングりを煮るカリフォルニア先住民）[Holmes 1902: Pl.15]

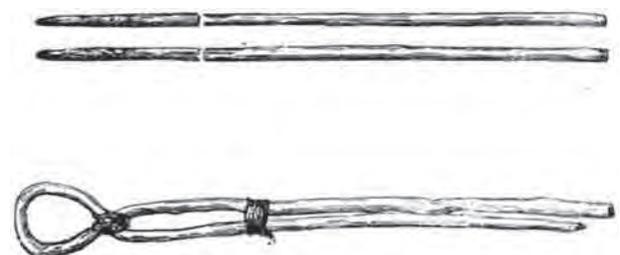


図 15 ボイリングストーンを移すための木製道具（カリフォルニア先住民）[Holmes 1902: Pl.33]

ことに喜びを抱いているらしい (Catlin 1841: 54, cf. Tylor 1865: 262, Dittmann 1990: 231-232)。

しかし、このように土器を入手してストーンボイリングをやめたのとは逆のケースもある。マンダンの南の隣族で、スー語系のヒダツァ族は、19世紀初めには農耕を行い、土器で煮炊きを行っていた。しかし白人からの圧力が増していった。天然痘の流行によりほとんど全滅しかけたマンダン族の生き残りとともに、ヒダツァたちは1837年、平原・プレーリーの西部へ移住した。ここで彼らは馬に乗ってのバイソン狩猟を開始し、煮炊きの慣習もこの新たな生活様式に適応したものとなっていった。すなわち壊れやすい土器をやめて、移動生活に便利なストーンボイリングを採用したのである。同様の変化は、プレーリー東部で農耕を行っていた多くの人々にも起こった (Driver & Massey 1957: 233; Dittmann 1990: 232-233)。

なおプレーンズ北部では、土坑に獣皮を敷いて煮炊きすることは、長い伝統をもつ。CernatnAlterra の Saskatchewan River 近くにある Cormie Ranch では、紀元前 2500-2000 年の土坑から、多くの獣骨、石器、礫群が見つかった。これはストーンボイリングが行われた跡と見られる。獣骨はほとんどがバイソンのもので、煮られた形跡があり、骨髓を得るためだと考えられているのだ (Losey 1971: 18 — Dittmann 1990: 233 による)。

このプレーンズ・プレーリーでの、バイソンの胃袋・皮革を使つての煮沸法については、ディットマンによるイラストがある (図 16) (Dittmann 1990: 234)。この種の煮炊きは原則として女性が宿営地で行なった。バイソンの肉、脂肪、髓の入った骨および採集したオランダビユ (breadroot)²⁾ や野生の豆類・タマネギもこれで煮て、スープを作ったのである (Dittmann 1990: 234)。

さて南アメリカへ行くと、南端部ティエラ・デル・フエゴの人々は伝統的に、漁撈、カニや貝の採取、海獣狩

猟を行い、脂身、脂肪、骨髓が重要な栄養源であった (Dittmann 1990: 248-249)。中でもヤーガンについてはジョン・M・クーパー (1881 生～1949 没) が次のように記す。

大きな貝殻を用いて脂肪を溶かし、油脂をためる。つまり熱い石をいくつもその中に入れて湯を沸かし、油脂を溶かすのである。ただし本来のストーンボイリングについては記録がない。

大きな貝殻は時に皿として用いられ、貝殻や樹皮籠がカップとして、また中空の鳥の骨や葦がストローとして用いられる (Cooper 1946: 84)。

ここでの脂肪というのは、アザラシやクジラのものである (Cooper 1946: 84)。

5 料理法の発展史上におけるストーンボイリングの位置づけ

以上のような多くの民族誌記述にもとづき、ディットマンは料理法の発展史を次のように構想した (図 17)。すなわちストーンボイリングは、熱した石を用いる他の方法と、直火の上で煮炊きする方法とをつなぐ、中間の位置にある。

まず最も古い調理法は、(1) 熱い灰や木炭の中で火を通すものである。これの短所は、植物性食料は完全に焼けてしまう可能性があることと、肉や魚にまんべんなく火を通すことができないことだ。つまり外側はしばしば炭化するのに対し、内部は生のままになることがある。そこで植物性・動物性の食料のどちらにも、まんべんなく火を通したいという欲求から、さまざまな展開が起きた。

ストーンボイリングの方向に近づいたのは、(2) 熱した滑らかな石の上で肉や植物を焼くというものである。熱を貯えつつ連続的に放熱する石のおかげで、まんべんなく火を通すことが可能となり、火を消した後もしばらくは暖房効果も期待できた。

(1) 熱い灰・木炭の中で火を通す仕方からの、別の発展形として、(3) 穴の中で火を起こすというのがあり、これは断熱効果を高めた。この穴の中での火起こしに、多くの熱した石を組み合わせることで、(4) 最初の形式の地炉が生まれた。穴の中で石を熱する場合、あきらかに燃料が少なく済むことも、この発展を助けた。この穴の上を土で覆い、さらにその上でも火を起こすとさらに時間短縮できた。

地炉を十分に熱くすれば、特に熱石を入れなくとも、

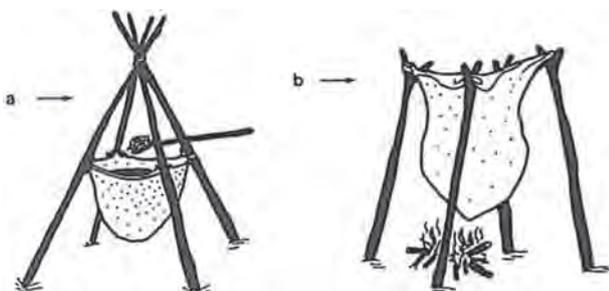


図 16 北米プレーンズ・プレーリー、バイソン胃袋・皮革での煮沸法：a) ストーンボイリング、b) 直火 [Dittmann 1990: 234]

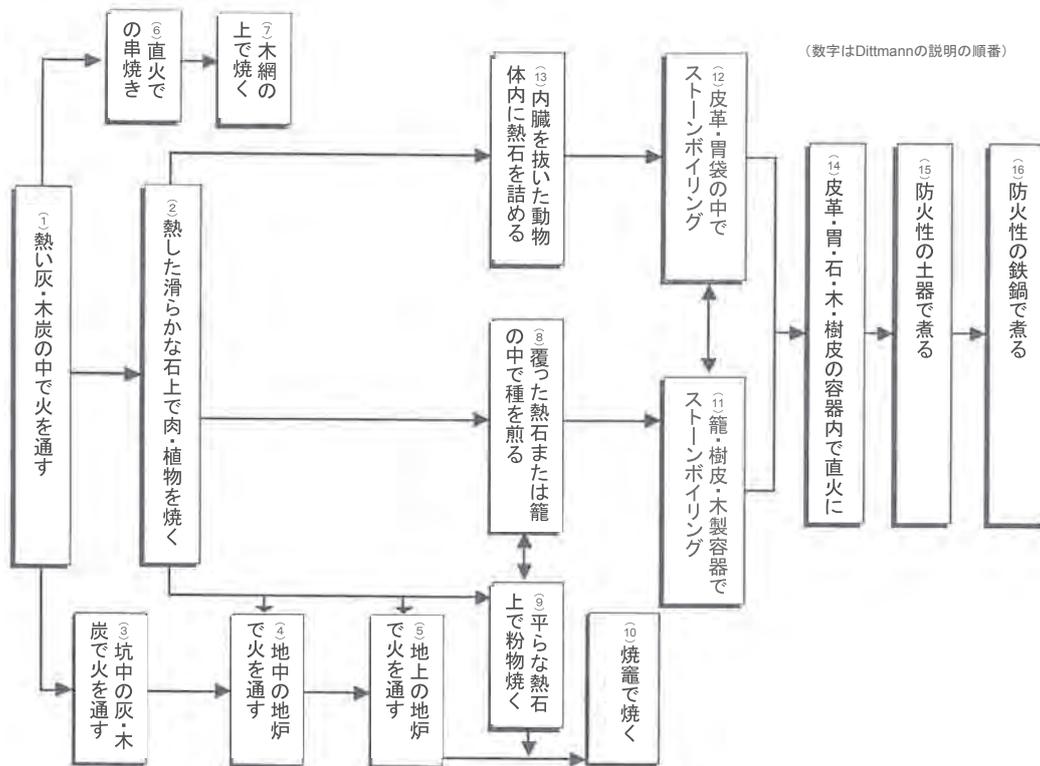


図 17 料理法の発展史上におけるストーンボイリングの位置づけ [Dittmann 1990: 299]

熱い砂・灰・木炭で代用できた。この地中の地炉に比べて新しいと思われるのが、(5)地上の地炉である。ただしこの両者間の移行は流動的だ。オセアニアでは、地中の地炉と地上の地炉の間に大きな違いはない。地上の地炉の場合も、熱した石は必須要素ではない。その代わりに粘土製の屋根をかぶせたり、陶製の塊や土球を用いることもあった。

今の系列とは別途の発展として、(6)直火での串焼き、さらにそこから発展したものとして、(7)木製の網の上で焼く方法もある。貯蔵法としての燻製が、これのきっかけともなっただろう。

(2)熱した滑らかな石の上で肉・植物を焼くことから、理論的に二つの発展系列が考えられる。しかしどちらもストーンボイリングにたどりつく。ただしこれら両者は、それぞれ動物と植物に特化しているという特徴をもつ。

(2)のように熱した石の上で植物性材料にまんべんなく火を通すのは、種や穀粒ではうまく行かない。燃え切ってしまうことや、はじけ跳んでしまうこともあるからだ。(8)そこでははじけ跳びを防ぎ煎った種をとどめておくため、簡単な傘状の葉や編器が用いられる。後になると、壁を高くした中で種や穀粒を熱石とともに煎るようになる。これはケチュア族などに見られる。小麦の粒を土器

に入れて煎る方法である。カリフォルニアでは籠も用いた。

この仕方は、(9)熱した石の上で粉物を焼く方法とも密接にかかわる。これが地炉と結びつくと、(10)焼き竈で焼く方法へつながった。

ストーンボイリングの前提は、防水性で十分に大きな液体容器である。これは(11)森林地帯では木材や樹皮で、(12)他の地域では皮革や胃袋でできた。この後者については、前段階として、(13)動物体の内臓を抜き、時にその中に熱石を詰める仕方が存在した。これには、たとえばオーストラリアの例が挙げられる。(12)皮革・胃袋の中でのストーンボイリングは、たとえばブレンズ・プレーリーで発達し、バイソンの皮革を利用した。パタゴニアのテウエルチェでも動物の体全体を利用したが、これはブリアートの方法に似ている。

ここから(14)防火性のない容器に入れて直火にかけられる方式も生じた。しかしストーンボイリング法の方が、容器は長持ちする。さらに、容器を長くもたせたいという欲求から、(15)防火性の土器へと発展し、さらに(16)壊れにくい鉄鍋へと展開した。しかしカムチャツカや北米の魚油・魚脂や中央ヨーロッパの石ビールなど、特殊な場合にはストーンボイリングが継続した。以上が、ディットマンのまとめである (Dittmann 1990: 297-303)。

6 ストーンボイリングの世界における分布

ディットマンはまた、ストーンボイリングの分布状態をも示した(図18)。しかし彼が全くまたはほとんど触れていない地域もある。

たとえば千島・樺太アイヌのストーンボイリングについては、鳥居龍蔵が詳述している。いま『鳥居龍蔵全集』から「石煮」(stone-boiling)に関する記述を抽出してみることにしよう。まず、

千島土人は、島から島へと、漁猟にとて出であるく際、其所にて時として、鍋などの用意なきことあり。その時には大なる流木を海岸にて見出し来り、これに孔をあけ、孔の中に水を入れるのです。今若し彼らにして魚を煮んとせば、魚をその水の中へ入れる。そして更に石を火中にて熱し、この熱したる石を以上の水中に投ぜば、水は忽ちにして湯となり、魚は自然に煮らるるのである。この仕方は物を煮るに最も簡単なるものでありましよう(鳥居 [1902]: 440)。

食物の煮方は古い時分には自分でこしらえた土鍋でありましたが、後には北海道のアイヌの手を経て這入り又日本鍋若しくはロシア鍋を用いることと

なった。併しながら漁猟の際ある島に渡った時分には、石を焼き、器に水を入れ、この焼け石を投じて物を煮る法をやって居ります。食物は植物性のものもありましたが、獣類海獣魚類などが主で、トドの油は始終飲み、これを飲まぬと気色にさわるというくらいに好みました。千島アイヌは今に好んでこれを用います(鳥居 [1904]: 427)。

私が1912年に樺太を旅したとき、タコイの老婆の物語〔自ら土鍋を作ったタコイという名の老婆に関する伝説〕についてナイブツ川河岸のアイ村 Ai 村長に質ねた。彼はバフンケ Bahounké という名の老人で、次のように答えてくれた。

「イナオ=カル=ウシでは、1898年以來もうイナオ(幣)は立てられていない。我々は昔は土器をもっていなかった。したがって魚を食べるには、おき火で焼くだけであった。ところがある日、一人の老婆(オンネル=イクノ onnerou ikounno)が生活の改善をのぞみ、熟慮の末に粘土で鍋を作り、火で焼いた。同じように汁気の多い菜を盛る容器をも作った。彼女が新しい鍋で食事を準備していたある晩、ひとりの男がやってきた。その老婆は男に、からかったり冷笑しないようにたのんだが、彼は老婆の言に反して、その鍋をみると、笑いはじめて嘲笑した。す

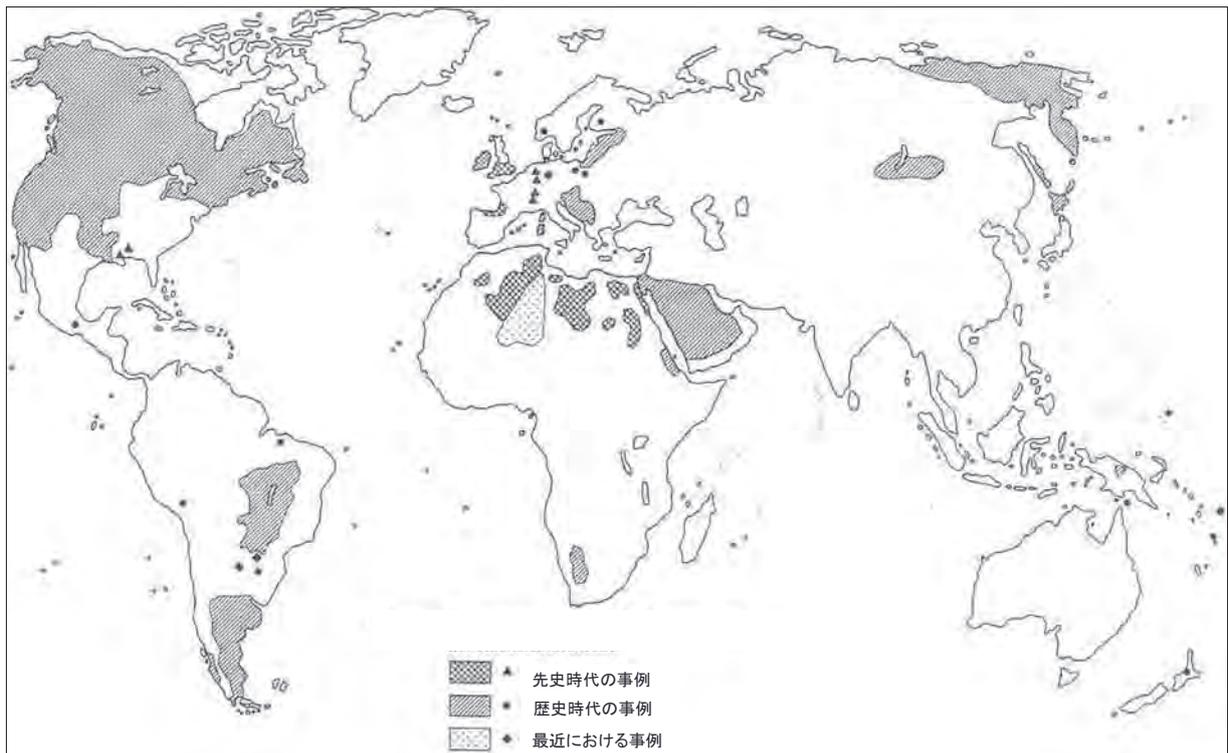


図18 ストーンボイリングの分布 [Dittmann 1990: 327]

ると鍋は、ひとりでに粉々に砕けてしまった。憐れな老婆は悲嘆にくれたが、落胆はしなかった。柳の大木を見つけ、これを倒し、幹を鋸で切り、上面をえぐり、そこへ水を入れ、まっかに焼いた小石をこの即席鍋に投げ入れた。するとこの水は沸騰した。さきの男が再びやってきたが、今度は賢明にも嘲笑せず、鍋も壊れなかった。このでき事以来、樺太アイヌは食物を煮るのに木製の鍋しか使わないのである」

千島のクシ=アイヌは、食事を用意するとき、バフンケの人々と同じ方法を用いた。次に彼ら自身が述べたことを記しておく。「漁撈や狩猟の必要から絶えず島から島へと渡り歩いていたので、調理用の土製品を持ち歩くことができなかつた。そこで、岸辺に打ち上げられた樹木の幹を適当に切り、これに凹みを抉り、そこに水を入れて焼き石を投げ入れる。すると水が熱湯となるので、食用の肉や魚をそこで煮た」。これと同じ方法はカムチャゲール〔イテリメン〕にもみられた（鳥居 [1919]: 437-438）。

さらにはディットマンが挙げている例として、台湾アミ族のストーンボイリングがある。まず鳥居龍蔵による1897年の短報にはごく簡単に、次のように告げる。

次に諸所に行はるゝ焼き石煮（Stone boiling）なるものあり。そは地面に穴を掘り、此所に水を入れ、石を火にて熱し、これを火中に投じ、湯を得る法なり（鳥居 [1897]: 562）。

そして1914年に出た『蕃族調査報告書』には、アミ族奇密社の事例が少し詳しく紹介された。

当社に面白き法あり。彼等河原に出でて食事せんとするや、鍋釜を用意せず、河原に火を焚き、其中に数多の小石を入れて共に焼く。其既に焼けたるを見て、檳榔皮に水と塩と魚とを入れたるものの中に、彼の焼石を入れて魚を煮るなり。又飯を炊くには、竹筒の中に米と水とを入れて堅く栓を詰め、そを火上に掛け米煮いて美味なる飯を得るなり（佐山 1914: 50）。

さらに1959年3月末、台湾大学考古人類学系の調査において、陳奇祿はアミ族猫公社（花蓮県豊浜郷豊浜村）で石煮・竹煮を記録し、次のように詳しく教えてくれる。

石煮と竹煮の分布はとても広く、とくに土器をも

たない原始民族の間では、この種の煮炊き法はことに重要である。台湾では、石煮と竹煮はアミ族にしか見られないようであり、『蕃族調査報告書』には奇密社でこの方法を用い食物を煮炊きしたことを載せる。ここに我々が猫公社で見たところを報告すれば以下のようなものである。

我々のために石煮と竹煮の方法を演じてくれたのは村の長老キラン（kilaran）である。彼によるとこの方法は今なお、とりわけ狩猟や漁撈に出て炊事用具を携帯していないような時に、広く用いられる。石煮法（stone boiling）を猫公社の人はボクロ（bokuro）と呼ぶ³⁾。準備に際し、まず干し草、薪、丸石、檳榔の葉を集める。檳榔の葉または椰子の葉（パパツ papa⁴⁾）の幹部に付いた部分から長方形の一片を切り出し、舟形に折って、水と青菜または魚肉を入れる（図19・20）。それから拾って来た丸石を一つ一つ洗う。準備が整ったら薪を積んで火をつけ、丸石を火



図19 台湾アミ族のストーンボイリング [陳 1959]



図20 台湾アミ族のストーンボイリング [陳 1959]

中に投じて約20分間燃やす。丸石が焼けたら竹箸で丸石を一つ一つ挟み、水と青菜または魚肉の入った容器の中に入れる。こうするとゆっくりと食物が煮えるのである。そのあと塩を少し加えて調味すれば、食べられる状態となる。キランが我々のために演じてくれた際、容器に入れた水が少なかったため、多くの石ころが直接に食物を焼いてしまった。しかし去年、先輩の喬健氏が猫公社で見たものは、水を充分に入れていたので、石ころは水を熱して沸かし、食物が煮えた(図21・22)。

竹煮法を猫公社の人はアッオル('a'ol)⁵⁾と称する。竹の節に米を入れ水を加えてから、木の葉で口を封じ、直接に火の中に放置する。新しく採って来た竹の節は水分を含み、節の中にも水があるので、容易には焼け焦げない。竹の節が焼け焦げようという時には、節の中に入れた米も煮えている。一般に竹煮と石煮は同時進行することが多く、石を焼く時に竹の節も火中に置いて煮炊きするのである(図23)。こうして飯とおかずが同時に炊けて食用となる(図24)(陳 1959: 127)。



図21 台湾アミ族のストーンボイリング [陳 1959]



図23 台湾アミ族の「竹煮法」 [陳 1959]



図22 台湾アミ族のストーンボイリング [陳 1959]



図24 台湾アミ族の「竹煮法」 [陳 1959]

なおまた1998年に出版された『阿美族飲食之美』によれば「石煮」は《Nitnesan》と言ひ、檳榔樹の樹皮またはクワズイモの葉を容器にする（黄 1998: 75-76）。

現在の台湾アミ族では「石頭火鍋」が一つの名物料理となり、レストランで振る舞われている。また「竹筒飯」は原住民料理の一つとして、アミ以外でも広く行われるようになった（図25）。他に筆者は、ラオス北部タイラー族のもとでも竹筒飯（厳密に言えば中身は米ではなく鶏肉やスパイス）を食べた（図26・27）。

ほかに、現代のストーンボイリングと呼べるものとして、日本では秋田県・男鹿の石焼き料理が人気であるし、ドイツでは石ビール（Steinbier）の伝統が続いてきている。

むすび：若干の議論

以上みてきたように、土器・鉄器といった文化の〈革新〉（innovation）によりストーンボイリングは駆逐され

る傾向が強い。しかし保持された例もある。それはたとえば、魚油・魚脂の獲得のためであったり（北米北西海岸、カムチャツカ）、非常時用であったり（モンテネグロ、千島アイヌ、台湾アミ族ほか）、あるいは「味がよい」という理由によるものもあった（イシの証言、ヨーロッパでのミルク、石ビール、特産料理）。

このことは、ある文化要素が採用されるか否かという選択においては、多様なファクターが働くことを示している。アラスカという本来土器の煮炊きに適さない地において、調理された味覚を人々が求めたために、低温焼成ないし未焼成の土器が採用されたという事例も、こうした文化選択の複雑さを示す類例であろう（Harry & Frink 2009）。

文化の〈退行〉（regression）についてもさまざまな議論がある。たとえばタスマニア島民における、文化学習者の人口サイズ減少により文化要素数が減少したというものや（Henrich 2004）、東南アジアにおける戦闘・奴隷化からの待避や、森林特産物への生業特化といった例が挙げられる（Kleihauer 1991）。ストーンボイリングについて言うなら、上述したように、バイソン猟により移動が増えたため、持ち運びに不便な土器を放棄し、ストーンボイリングへと〈退行〉的な再適応をとげた事例があった。



図25 台湾サイシャット族の「竹筒飯」（筆者撮影）



図26 ラオス北部タイラー族の竹筒料理（筆者撮影）



図27 ラオス北部タイラー族の竹筒料理（筆者撮影）

このように文化の〈革新〉、〈退行〉、また保持され続ける要素などについては、ただちに定量的モデルが構築できるとは考えにくい。具体的な民族誌データを参照しつつ、考古学的推論を行なってゆくことの可能性と必要性を、あらためて強調しておきたい⁶⁾。

付記

本稿は、2017年12月10日に東京大学本郷キャンパスで開催された「パレオアジア文化史学」第4回研究大会において、中沢祐一氏との連名で発表した「ストーンボイリングおよび関連した文化革新／退行についての民族誌データ」にもとづき、加筆したものである。共著者の同氏からは、本稿を単著としてまとめることの許諾だけでなく、多々ご教示をいただいた。会場においては中沢隆氏から膠の起源について刺激的な提案を受け、その後も関連文献を送っていただいた。西秋良宏・出穂雅実・藤本透子の各氏からも有益なコメントを頂戴した。以上のみなさまに心より感謝申し上げたい。

注

- 1) 地炉(じろ、Erdofen, earth oven)とは、穴をほった中に熱した石や熱い灰・木炭を入れ、空気を遮断して食料を蒸す仕方。地炉にはふつう葉や樹皮、石などを敷き、砂か土で覆う。地上でこれを行う場合もある。防火性の容器を有するに至った文化では、ストーンボイリングは廃れやすいのに対して、地炉は使い続けられることがしばしばある(Dittmann 1990: 17; cf. 栗田 1987)。
- 2) 北米中部原産のママ科の多年草 *Psoralea esculenta* の食用になる澱粉質の根。Indian breadroot, pomme blanche, prairie turnip ともいう。ドイツ語では Prarie-Rube。
- 3) アミ語辞典によれば、《fokeloh》(= fakeloh) は石を意味する(呉 2013: 142)。
- 4) アミ語辞典では《papah》は葉の意味(呉 2013: 525)。
- 5) アミ語辞典によると《aol》(= aok) は竹の総称(呉 2013: 590)。
- 6) ストーンボイリングとかかわって今後、考慮すべき課題として、膠(cf. 我孫子編 1997, 中沢／山崎 2010)の起源問題がある。すなわち動物の皮革の中で熱石により調理したことから、いわば副産物として「煮皮」が生まれたのではないか、という推論だ。また日本古代の盟神探湯においては、土器中から石を取り出す規定になっていた[山田 1995-96]。この石がストーンボイリングに由来する可能性も、あらためて指摘しておきたい。

参考文献

我孫子義弘(編)
1997 『にかわとゼラチン：産業史と科学技術』改訂版、東京：日本にかわ・ゼラチン工業組合。

Bogoras, Waldemar G.
1904-09 *The Chukchee*. (Memoir of the American Museum of Natural History; Vol.11 = The Jesup North Pacific Expedition; Vol.7). Leiden: E. J. Brill.

Boorde, Andrew.
1870 *The Fyrst Boke of the Introduction of Knowledge*.

Edited by F. J. Furnivall. (Early English Text Society, Extra Series; No.10). London: The Early English Text Society.

ブラウン、マーシャ
2010 『せかいいち おいしいスープ』こみや ゆう(小宮由) 訳、東京：岩波書店。(Stone Soup. New York: Charles Scribner & Sons, 1947)

Catlin, George.
1841 *Letters and Notes on the Manners, Customs, and Condition of the North American Indians*, Vol.1. London: Published by the Author.

陳奇祿
1959 「猫公阿美族的製陶、石煮和竹煮」『國立臺灣大學考古人類學刊』13-14: 125-127。(『臺灣土著文化研究』: 91-102、台北：聯經、1992に再録)

クーン、カールトン・スティーヴンズ
2008 『世界の狩猟民：その豊饒な生活文化』(りぶりりあ選書) 平野温美／鳴島史之(訳) 東京：法政大学出版局。(The Hunting Peoples. Boston: Atlantic Monthly Press, 1971)

Cooper, John M.
1946 *The Yahgan*. In: Steward, Julian H. (ed.), *Handbook of South American Indians*, Vol.1: The Marginal Tribes. (Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology, Bulletin; 143): 81-106. Washington: Government Printing Office.

Derricke, John.
1581 *The Image of Irelande, with a Discoverie of Woodkarne*. London: Jhon Daie.

von Ditmar, Karl.
1890 *Reisen und Aufenthalt in Kamtschatka in den Jahren 1851-1855*, 1. Theil. St. Petersburg: Buchdruckerei der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften.

Dittmann, Andreas.
1990 *Das Kochen mit Steinen. Ein Beitrag zur Entwicklungsgechichte der Nahrungszubereitung*. (Marburger Studien zur Volkerkunde; Bd.7). Berlin: Dietrich Reimer Verlag.

Driver, Harold E. & William C. Massey.
1957 *Comparative Studies of North American Indians*. (Transactions of the American Philosophical Society; Vol.47, Part 2, pp.165-456). Philadelphia: The American Philosophical Society.

Erman, Adolph.
1848 *Reise um die Erde durch Nord-Asien und die beiden Oceane*, 3. Bd. Berlin: G. Reimer.

Eylmann, Erhard.
1908 *Die Eingeborenen der Kolonie Sudaustralien*. Berlin: Dietrich Reimer (Ernst Vohsen).

Friederici, Georg.
1914 *Der Erdofen*. *Petermanns Mitteilungen*, 60: 5-8.

Gmelin, Johann Georg.
1752 *Reise durch Sibirien von dem Jahr 1738 bis zu Ende 1740*, 3. Theil. Gottingen: Abram Vandenhoecks seel. Wittwe.

Graebner, Fritz.
1913 *Der Erdofen in der Sudsee*. *Anthropos*, 8: 801-809.

- Haberlandt, M.
1913 Die Verbreitung des Erdofens. *Petermanns Mitteilungen*, 59: 4-7, 135.
- Harry, Karen and Liam Frink.
2009 The Arctic Cooking Pot: Why Was It Adopted? *American Anthropologist*, 111 (3): 330-343.
- Hebel, Johann Peter.
1811 *Schatzkästlein des rheinischen Hausfreundes*. Tübingen: J. G. Cotta.
- Henrich, Joseph.
2004 Demography and Cultural Evolution: How Adaptive Cultural Processes can Produce Maladaptive Losses: The Tasmanian Case. *American Antiquity*, 69(2): 197-214.
- Henry, Amanda G.
2017 Neanderthal Cooking and the Costs of Fire. *Current Anthropology*, 58 (Supplement 16): S329-S336.
- Holmes, William Henry.
1902 Anthropological Studies in California. *Annual Report of the Board of Regents of the Smithsonian Institution*, for the Year 1900: 155-187.
- 保坂康夫
2012 『日本旧石器時代の礫群をめぐる総合的研究』 甲府：礫群研究出版会。
- 黄貴潮
1998 『阿美族飲食之美』（東部海岸國家風景區遊憩解說叢書；11）臺東縣成功鎮：交通部觀光局東部海岸國家風景區管理處。
- Keating, Geoffrey.
1908 *Foras feasa ar Éirinn. The History of Ireland*, Vol.2. With translation and notes by Rev. Patrick S. Dinneen. (Irish Texts Society; Vol.8). London: The Irish Texts Society.
- Kleihauser, Maik.
1991 *Kulturelle Regression bei Jäger- und Sammlerkulturen*. (Ethnologische Studien; Bd.14). Münster: Lit Verlag.
- Krause, Aurel.
1885 *Die Tlinkit-Indianer. Ergebnisse einer Reise nach der Nordwestküste von Amerika und der Beringstraße*. Jena: Hermann Gostenoble.
- クローバー、シオドーラ
1991 『イシ：北米最後の野生インディアン』（同時代ライブラリー；80）行方昭夫（訳）東京：岩波書店。 (*Ishi in Two Worlds: A Biography of the Last Wild Indian in North America*. University of California Press, 1961)
- 栗田博之
1987 「地炉」石川栄吉／梅棹忠夫／大林太良／蒲生正男／佐々木高明／祖父江孝男（編）『文化人類学事典』：373-374。東京：弘文堂。
- Losey, Timothy C.
1971 *Archaeology of the Cormie Site: An Interim Report*. (Archaeological Society of Alberta Newsletter; No.28). Edmonton.
- 松平千秋（訳）
1971-72 『ヘロドトス 歴史』上中下（岩波文庫）東京：岩波書店。
- Musters, George Chaworth.
1871 *At Home with the Patagonians: A Years Wanderings over Untrodden Ground from the Straits of Magellan to the Rio Negro*. London: John Murray.
- 1873 *Unter den Patagoniern. Wanderungen auf unbetretene Boden von der Magalhães-Straße bis zum Rio Negro*. Aus dem Englischen von J. E. A. Martin. Jena: Hermann Gostenoble.
- 中沢隆・山崎雄三
2010 「文化財に含まれるタンパク質を対象とする古代史プロテオミクス：質量分析による墨の膠原料の特定とその古代学的意義」『古代学』2: 17-27. 奈良女子大学古代学学術研究センター。
- Nakazawa, Yuichi, Lawrence G. Straus, Manuel R. González-Morales, David Cuenca Solana & Jorge Caro Saiz.
2009 On stone-boiling technology in the Upper Paleolithic: behavioral implications from an Early Magdalenian hearth in El Mirón Cave, Cantabria, Spain. *Journal of Archaeological Science*, 36: 684-693.
- Nelson, Kit.
2010 Environment, cooking strategies and containers. *Journal of Anthropological Archaeology*, 29: 238-247.
- 野嶋洋子
2005 「焼石料理の民族誌：礫群研究の民族考古学的視点」『考古学ジャーナル』531: 17-21.
- O'Kelly, Michael J.
1954 Excavations and Experiments in Ancient Irish Cooking-Places. *The Journal of the Royal Society of Antiquaries of Ireland*, 84(2): 105-155.
- Rechnitz, Wilhelm.
1959 The Earth Oven: A Method of Cooking in the Torres Straits Islands. *Man*, 59: 21.
- 佐山融吉
1914 『阿眉族奇密社・同太巴塑社・同馬太鞍社・同海岸蕃』（臨時台湾旧慣調査会第一部 蕃族調査報告書）台北：臨時台湾旧慣調査会。
- スチュアート、ヒラリー
1987 『海と川のインディアン：自然とわざとくらし』木村英明／木村アヤ子（訳）東京：雄山閣。 (*Indian Fishing: Early Methods on the Northwest Coast*. 1977)
- Steller, Georg Wilhelm.
1774 *Beschreibung von dem Lande Kamtschatka*. Frankfurt Johann Georg Fleischer.
- 鳥居龍藏
[1897]1976 「東部台湾、阿眉種族の土器製造に就て」『鳥居龍藏全集』11: 561-572。東京：朝日新聞社。
[1902]1976 「千島土人の土俗」『鳥居龍藏全集』7: 439-441。東京：朝日新聞社。
[1904]1976 「千島アイヌに就て」『鳥居龍藏全集』7: 425-435。東京：朝日新聞社。
[1919]1976 「考古学民族学研究・千島アイヌ」小林知生（訳）、『鳥居龍藏全集』5: 311-553。東京：朝日新聞社。
- Trojanović, Sima.
1901 Alterthümliche Speisen- und Getränkebereitung bei den Serben. *Archiv für Anthropologie. Zeitschrift für Naturgeschichte und Urgeschichte des Menschen*, 27

(2): 239-264.

Tylor, Edward Burnett.

1865 *Researches into the Early History of Mankind and the Development of Civilization*. London: John Murray.

ランガム、リチャード

2010 『火の賜物：ヒトは料理で進化した』 依田卓巳（訳） 東京：NTT 出版. (*Catching Fire: How Cooking Made Us Human*, 2009)

Wrangham, Richard.

2017 Control of Fire in the Paleolithic: Evaluating the Cooking Hypothesis. *Current Anthropology*, 58 (Supplement 16): S303-S313.

呉明義

2013 『阿美族語辭典』 台北：南天書局.

山田仁史

1995-96 「盟神探湯・湯起請・鉄火：日本における神判の系譜」『東アジアの古代文化』 85: 115-135, 86: 75-92, 87: 131-145.

生業活動の男女差と集団接触の様相にかかわる 予備的メモ

卯田宗平

(国立民族学博物館)

1、問題意識

本稿の目的は、生業活動の男女差とそれにとまなう死亡件数の違いが集団接触にもたらす影響について予備的に検討することである。本稿の構成は、まず狩猟活動にかかわる問題意識を確認したあと、生業活動における性的な分業についてまとめ、研究の可能性と課題を述べる。

本章では、論を進めるにあたり、まず筆者が所属するB1班の研究課題を再確認しておきたい。B1班の課題は「人類集団の拡散や定着、他集団との接触にかかわる文化人類学的所見を多面的に分析し、文化変化の具体像およびその多様性を明らかにする。それにもとづき、新人定着期に生じた文化変化の解釈としてあり得たパターンを事例とともに提示する」である。つまり、B1班の第一の問いは、観察可能な現生人類の集団がどのように定着し、異なる集団といかに接触し、その過程で物質文化がどのように変化するのか/しないのかについて考えることである。本稿の問題意識もこうした集団接触のありようにかかわるものである。

B1班を含む本プロジェクトの研究対象のひとつであるネアンデルタール人について、その狩猟活動の特徴が『現代思想』のなかで示されている(赤澤・西秋 2016)。この説明によると、ネアンデルタール人は「獲物と格闘する勇猛果敢なハンター」であり、主食である動物性たんぱく質の獲得のために「年中獲物を追いかけていた」とされる。これは、狩猟を続けなければ身体を維持できなかったからである。彼らの狩猟活動にかんしては「たいした狩猟具はもって」おらず、「生傷が絶えなかった」ことが化石資料からうかがえるという。実際の狩猟活動においては現代の闘牛士やロデオ競技者が受けるような怪我を負っていたとされる。

ネアンデルタール人の負傷については、プロイヤーも同様に「(ネアンデルタール人は)力が強く、忍耐力のある狩人であったが、彼らの狩猟技術—主として長槍で野牛やマンモスといった、比較的大きな動物を至近距離から殺害した—は危険に満ちていた。たとえ投げ槍をもち

いたとしても、彼らの狩猟法では非常に頻繁に、頭や頸、尻や腕を傷つけることになった」(プロイヤー 2009: 57)という。そして、ベルガーとトゥリンカウスの観察によると、ネアンデルタール人が負った傷はやはり現在のロデオ乗りの負傷の仕方によく似ているという(Berger and Trinkaus 1995)。

こうした事例をみると、筆者はひとつの疑問を抱く。それは、狩猟活動で負傷したり、死亡したりしたのは、狩猟をおもに担う男性が多いのではないかという点である。実際、現在の民族誌データをみると、男性が狩猟活動を担い、女性はそれ以外の活動を分担しているという記録が多い。数多くの民族誌による記録を過去の事例に援用した場合、前述の「生傷が絶えなかった」や「頻繁に、頭や頸などを負傷する」、「ロデオ乗りの負傷の仕方に似ている」のは、おもに男性である場合が多いと考えられる。この解釈を本プロジェクトの問題意識に強引に引きつけて展開すると、狩猟活動における男女差とそれにとまなう負傷や死亡件数の違いが、集団の接触にどのような影響を与えたのであろうかという問いを立てることができる。

2、狩猟活動における男女差

なぜ男性が狩猟活動をおこなうのか。あるいは、なぜ女性は狩猟活動をおこなわないのか。こうした狩猟活動における男女差にかんしては、既往の研究においてさまざまな考え方が提示されている。本章では、なかでも特徴的な考え方を示しておきたい。

都出比呂志は、世界各地の民族誌を整理したG・P・マードックの成果(Murdock 1965)を踏まえ、男性と女性の分担割合(%)の違いに基づきながら「男性優位活動」の一般的な傾向を示している(都出 1982)。ここでいう「男性優位活動」とは、男性だけ、もしくはおもに男性が担う活動のことである。彼によると、男性優位活動には「金属工芸」や「武器の製作」、「海獣の狩猟」、「狩猟」、「楽器の製作」、「ボートの製作」、「採鉱・採石」、「木

材・樹皮の加工」、「石の加工」などがある。すなわち、おもに男性が従事するのは、狩猟や漁撈とそれに必要な石器や骨角器の製作、そして網やボートの製作といった活動のほか、耕地開墾や山林伐採、木材の切り出し、金属器の加工といった活動も該当する。こうした事例をまとめると、男性優位労働の一般的な傾向として、「体力が要求され、かつ遠隔地に出かける必要のある労働と、それに付随する加工業と道具類の製作という体系的性が認められる」（都出 1982：12）という。狩猟活動は、やはり体力が必要とされ、なおかつ獲物を追って長距離移動をとまなう場合もあるために「男性優位活動」になるのである。

このほか、狩猟活動を男性が担うのは、大きな獲物を射止めて持ちかえることで集団内での注目が集まり、それが異性との交配に有利になるという考え方もある（たとえば、Hawkes and Bliegebird 2002, Hawkes 2004 など）。また、狩猟活動に必要とされる地理空間を広範囲に認識する能力は男性の方が女性よりも高いことが関係しているという（たとえば、Hurtado et al. 1992, Silverman et al. 2007 など）。

一方、女性が狩猟活動をおこなわないのは、出産と子供の世話を集団内の女性が担う方が集団を維持していくうえで適応的であるという（たとえば、Brown 1970, Gurven and Walker 2006 など）。また、女性の身体能力や地理空間の認識能力が男性に比べて劣るという指摘もある（たとえば、Brown 1970 など）。先に示した都出による労働の性的分業では、女性優位活動として「穀物製粉」、「水運び」、「調理」、「野草・根菜・種子の採集」、「衣類の製作と修繕」、「肉と魚の保存管理」などをあげている。都出によると、女性優位活動の特徴として「体力の強さの要求される度合いが小さいし、遠隔地への遠征の度合いが小さい労働」（都出比呂志 1982：14）が該当するという。このように女性が居住地周辺から離れがたくするのは育児を担うからであり、男女の体力差と哺乳期の育児という生理的条件の違いが性的分業の基礎にあると考えられる。

いずれにせよ、生活・生業活動には男女差があり、とりわけ狩猟活動はおもに男性によっておこなわれる。実際、1994年から1999年まで25家族の狩猟活動を調査したHillの結果によると、男性による動物の捕獲数は計4,437匹であるが、女性は3匹であったという（Hill 2002）。むしろ女性も狩猟活動に参加することはあるが、活動中は補助的な仕事（たとえば、動物を発見したときに男性に知らせるなど）を担う場合が多いという（Goodman et al. 1985 など）。

このように、狩猟活動における男女差については数多

くの研究がある。しかし、狩猟採集民の負傷や死亡件数を詳細に記録した研究は少ない。こうしたなか、南米パラグアイの狩猟採集民を対象としたHillによるデモグラフィの調査結果は参考になる。彼が調査した期間の成人の死亡件数は計121件であった。このなかで成人男性の死亡件数は87件、成人女性は34件であった。男性の死亡理由は、ほかの集団との闘争（38件）が最も多く、そのほか狩猟活動中に蛇に咬まれる事例（12件）やジャガーに食べられる事例（7件）がある。一方、女性は、暴力による死亡件数が計19件のほか、病気が9件、事故が6件であった（Hill 1995: 171-177）。

Hillは、みずからの調査結果やほかの民族誌の事例を踏まえ、成人男性の死亡率は成人女性のそれに比べて1.47倍高いと指摘している（Hill 1995: 186）。一方、14歳以下の死亡件数をみると、理由はともあれ、男女とも大きな違いはない。彼の調査期間中に子どもの死亡件数は229件あったが、このなかで男子は113件、女子は116件である。子どもの死亡件数に性差がみられないことにかんしては、!KungやYanomanoといった集団でも同様である。こうした一連の結果からは、集団内の人間がある程度の年齢に達した後、生業活動や社会的な役割を男女で分担するようになり、その活動内容の違いが死亡率の性差に影響を与えていると考えることができる。

では、このような死亡件数や死亡率の男女差が集団接触にどのような影響を与えるのだろうか。本稿では具体的な事例に基づく検討はしないが、たとえば男性の死亡率が高いA集団では男性の割合が低下するがゆえ、他集団の男性が婚入というかたちで入り込む余地ができるともいえる。こうした集団接触のありようにかんしては、現生の人間集団を対象とした調査および既往の民族誌調査によって検討することも重要である。

3、今後の課題

本稿では、生業活動における男女差と集団接触のありようについて検討した。男女の死亡件数の違いは、二つ以上の集団の接触形態に影響を与える可能性もある。いうまでもないが、集団接触にはさまざまな形態がみられる（池谷 2017）。くわえて、異なる集団間では人びとの肌の色や習慣、言語などが異なることもあり、それら要因によりお互いを区別し、それが差別に結びつくことで集団の接触が起こらないということもありうる。また、民族誌的な調査において村落の人口動態を検討するには、成人男性の死亡件数を取りあげるだけでは不十分であり、出生率や出生性比、男児・女児選好といった要因も考慮することが重要になる。今後は、以上のような要因を考

慮しながら人口動態の変容と集団接触のありようを検討していく必要がある。

参考文献

赤澤威・西秋良宏

2016 「討議ネアンデルタール人との交替劇の深層」『現代思想』44(10): 83-105、東京: 青土社。

Berger, T. D. and E. Trinkaus

1995 Patterns of Trauma among the Neandertals, *Journal of Archaeological Science*, 22(6): 841-852.

Brown, J. K.

1970 A note on the division of labor by sex. *American Anthropologist* 72: 1073-1078.

Goodman, M. J., P. B. Griffin, A. A. Estioko-Griffin, and J. S. Grove.

1985 The compatibility of hunting and mothering among the Agta hunter-gatherers of the Philippines. *Sex Roles* 12: 1199-1209.

ブロイヤール、ギュンター

2009 「ネアンデルタール人と現代人の起源」ノルベルト・ボルツほか編『人間とはなにか』pp.43-67、東京: 法政大学出版局。

Gurven, M. and R. Walker

2006 Energetic demand of multiple dependents and the evolution of slow human growth. *Proceedings of the Royal Society of London* 273: 835-841.

Hawkes, K.

2004 Mating, parenting and the evolution of human pair bonds. In: B. Chapais and C. Berman (eds.) *Kinship*

and behavior in primates, 443-473. Oxford: Oxford University Press.

Hawkes, K., and R. L. Bliegebird.

2002 Showing off, handicap signaling, and the evolution of men's work. *Evolutionary Anthropology* 11: 58-67.

Hill, Kim

2002 Cooperative food acquisition by Ache foragers. *Human Nature* 13: 105-128.

Hill, K. and A. M. Hurtado

1996 *Ache Life History: The Ecology and Demography of a Foraging People*, Oxford: Routledge.

Hurtado, A. M., K. Hill, H. Kaplan, and I. Hurtado.

1992 Tradeoffs between female food acquisition and childcare among Hiwi and Ache foragers. *Human Nature* 3: 185-216.

池谷和信

2017 「序論狩猟採集民からみた地球環境史」『狩猟採集民からみた地球環境史』pp.1-21、東京大学出版会。

Murdock, G. P.

1965 *Culture and society: twenty-four essays*, Pittsburgh: University of Pittsburgh.

Silverman, I., J. Choi, and M. Peters

2007 The hunter-gatherer theory of sex differences in spatial abilities: data from 40 countries. *Archives of Sexual Behavior* 36(2): 261-268.

都出比呂志

1982 「原始土器と女性—弥生時代の性別分業と婚後住居規定」女性史総合研究会編『日本女性史① 原始・古代』pp.1-42、東京: 東京大学出版会。

文化概念をめぐる 4 つの諸相

— 民族誌モデル構築のための予備的考察 1 —

大西 秀之

(同志社女子大学)

はじめに

パレオアジア文化史学では、考古学を中心に古環境復元や数理モデルなどを専門とする広範な研究分野のスペシャリストが参加し、アフリカから拡散した現生人類（ホモ・サピエンス）によるアジア地域への進出、定着のプロセスと要因を追究している。このプロジェクトのなかで、わたしが所属する B01 班は、文化／社会人類学及びその関連領域を専門とする研究者によって構成され、民族誌研究をベースとして一数理モデルを専門とする B02 班とともに一分析モデルを構築することが求められている。

以上の課題を踏まえ、本稿では、まず民族誌研究から構築しうる分析モデルのあり方を検討する。その上で、分析モデルの中核となる文化概念の検討を行い、パレオアジア文化史学のプロジェクトのなかで、どのように／どのような「文化」という用語、概念を使い民族誌モデルを構築すべきか考察を試みる。なお本稿は、2017 年 1 月 12 日に名古屋大学で開催されたパレオアジア文化史学第 2 回研究大会において報告とした「産業社会以前における手工芸技術の学習に関する民族誌モデル」と、2017 年 12 月 9 日に東京大学で開催されたパレオアジア文化史学第 4 回研究大会において A03 班の近藤康久氏（総合地球環境学研究所）・岩本葉子氏（総合地球環境学研究所）との共同で報告した「バズワードとしての「文化」」の一部に基づくものである。

民族誌モデルによる過去の読み解き

民族誌モデルという用語は、考古学では一特にニューアーケオロジー運動のなかでテクニカルタームとして位置づけられたこともあり（Binford 1968）——一般的に流通しているものの、民族誌研究に従事する文化／社会人類学などでは必ずしも頻出的に使用されているワードとはいえない。むしろ、文化／社会人類学では、民族誌モデルなる用語は軽々に用いることが忌避される、多分に

否定的な含意を伴う警戒心を招きかねない感さえある。なによりも、ポストモダニズム理論やポストコロニアリズム批評を受容するなかで、民族誌の認識論的・政治的批判を経験した現在の文化／社会人類学では、民族誌を特定の文化社会コンテクストから引き剥がし、あまつさえ時空を超えた通文化的比較などに使用しようとする志向そのものに、否定的な視座に立つことは自明の選択といえよう。

上記の批判は、認識論的にも政治的にも承認しうるものであり、その限りにおいて完全に否定することも棄却ことも困難な視座である。とはいえ、もしこの視座を選択すると、考古学のみならず過去の文化的・社会的営為を語ることはできなくなる、という問題に直面することとなる。なぜなら、過去の営みは、現在のどの文化や社会のコンテクストとも異なるものであるため¹⁾、原理原則に従うならば、ある特定の文化社会的状況で得られた成果を、その理解に使うことができなくなるからである。

この言明は、文化／社会人類学などに基づく狭義の民族誌研究の成果のみならず、近代社会における人文社会学などのアカデミズムが生産する研究成果、さらには過去の営みを読み解こうとする個人の視点にも当てはめるべきである。というのも、アカデミズムの研究成果であれ個人の視点であれ、どちらも特定の文化的・社会的コンテクストとは無関係に得られたものではなく、むしろそうしたコンテクストから完全に外れた理解など皆無といっても過言ではないからである²⁾。結局のところ、過去の文化や社会を描こうとするならば、コンテクストを異にする視点や成果の介在は避けることができない、という認識を受け入れるほか選択肢はないだろう³⁾。

とすれば、過去の読み解きを行うためには、たとえ認識論的にも政治的にも問題を孕んでいたとしても、それに目をつむり本来のコンテクストから乖離した民族誌モデルの使用を容認するほかないのだろうか。これに対して、本稿では、モデル使用の正否という二者択一的な議論を迂回し、可能な限り既存の批判を踏まえた上で過去の読み解きに使用しうる民族誌モデルのあり方を検討する。

民族誌モデルの役割と構築

民族誌モデルのあり方を問うに当たり、まずパレオアジア文化史学において B01 班が期待され担うべき役割を、プロジェクトのなかで同じく「理論的解析」を担当する B02 班との対比から検討する。B02 班は、パレオアジア文化史学のなかで「人類の拡散と定着、他集団との接触によって文化や行動に生じる変化を、数理モデルの構築・シミュレーションを用いて解析し、文化変化に与えた鍵要因およびその多様性を明らかにする」⁴⁾、という役割を担っている。また B02 班は、「実証的解析」を行う A01～03 班や B01 班と連携し「アジア新人文化形成プロセスの総合的理解」を行うことも自らの役割と明記している。

具体的な連携研究のあり方は、プロジェクトの進捗によって随時更新され成果が出されてゆくと思われるが、ひとつ想定しうる実践方法として、A01～03 班や B01 班から得られた研究成果を基に数値データを抽出し一場合によっては数値データ化し一数理モデルによって解析を行うことがあげられる。さらには、今後どのような研究展開があったとしても、B02 班の研究実践は、こうしたあり方を基本的に踏襲すると予想される。というのも、B02 班は、基礎データの収集そのものは自らで行わないからである。むしろ、B02 班の研究では、パレオアジア文化史学以外のデータも積極的に使用されると予想されるが、その基礎データは他の研究分野で生産されたものであろう。B02 班の役割は、基礎データの生産ではなく、パレオアジア文化史学の他班で生産されたデータを数理モデルで解析することにほかならない。

以上のような B02 班の役割や研究実践と対置した時、B01 班がいかに民族誌モデルを構築し、それがプロジェクトのなかでどのような役割を担うものなのか明確になる。まず B01 班は、B02 班と異なり、部分的にでも独自で民族誌モデルのためのデータを収集する。もっとも、基礎データの収集は、B01 班のメンバー自身が民族誌調査で得たデータだけではなく、他者によって行われた過去の民族誌データも使用する可能性があるため、その部分においては一部 B02 班と共通するケースがある。ただ決定的に違う点は、B01 班はモデルの構築に A01～03 班の研究成果を—おそらく基本的には—直接使用しないことがあげられる。さらに B01 班は、B02 班との連携研究の一例として、同班に数理モデルの構築や解析に使用されるデータを提供することも—少なくとも B02 班の側から—期待されている (図1-①)⁵⁾。したがって、B01 班は、実証的解析を担う A01～03 班に対して民族誌モデルを提供するとともに (図1-②)、同じ理論解析を担当するグループである B02 班に対して A01～03 班と同じようにローデータを提供する、という二つの役割を担っているのである。

しかし、B01 班と B02 班の最も重要な違いは、上記のようなプロジェクトにおける実務面での役割ではなく、それぞれのモデルの使われ方ないしは貢献の果たし方にある。B02 班の数理モデルは、考古学や古環境復元などのデータそのものを多変量解析し、通常の考古学などの研究方法では明らかにしえない成果を導き出すことが期待される。あえて誤解を恐れずに言明するならば、考古学や古環境学などに対して量的な解析で貢献するものといえる⁶⁾。

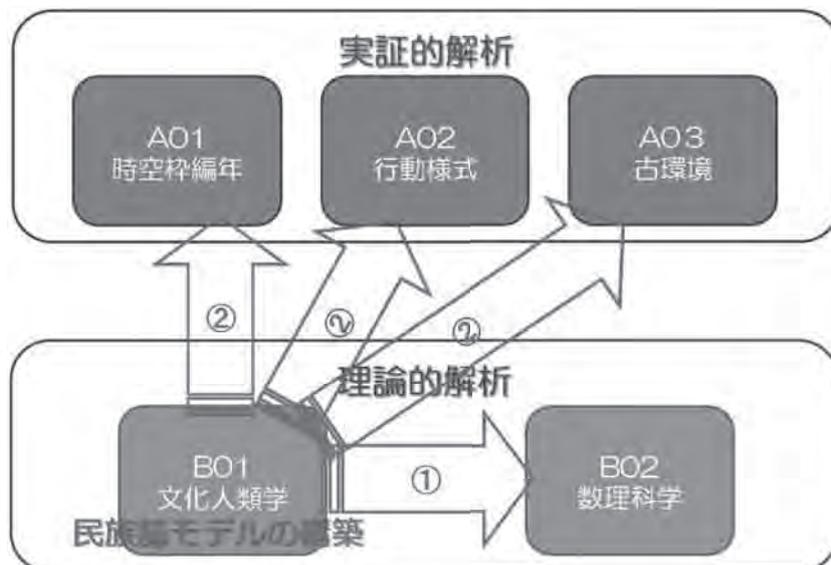


図1 B01 班の民族誌モデルの役割

これに対し、B01班が構築する民族誌モデルは、考古学などの資料やデータによって構築されるものではなく、また数理モデルのように直接的にそれらを解析することもないだろう。民族誌モデルは、むしろ既存の考古学の資料やデータの解釈を再検討する、という役割や貢献を果たすことになると予想される。つまり、B02班が基本的に考古学などから提供された資料やデータを所与として受け入れ、それらを数理モデルによって量的に解析するのに対し、B01班の民族誌モデルは、考古学などにおいて行われている資料やデータの読み解き—換言するならばローデータの構築—に貢献するものとなる。常套句的な表現を使うならば、B02班が量の貢献であるのに対して、質の貢献といえるだろう(図2)。

こうした役割や貢献は、前節で検討した民族誌モデルによる過去の読み解きにかかわる二律背反的な課題を、少なくとも一論理面は別として—実践面で解消あるいは迂回する選択となる。というのは、考古学の資料やデータの解釈の再検討ならば、まず問題となった異なる文化社会コンテクストを無視した適用には陥らず、同時に考古学者自身の解釈に介在する自文化中心主義的な研究成果や個人的視点などを批判する役割、貢献を果たすことになるからである。文化/社会人類学に引き付けて表現するならば、考古学という近代社会が構築したアカデミズムの研究実践を、異文化社会の理解を介して批判する選択肢といえるだろう(cf. マーカス&フィッシャー 1989)。

以上を是認するならば、B01班が構築する民族誌モデルの役割や貢献は、B02班の数理モデルのようなデータを多変量で解析するものではなく、考古学の読み解きに批判的考察を加え再検討を促す「解釈モデル」と認識し、その方向性を目指すべきであろう。この方向性に従い、本稿では、民族誌モデルの構築に向け考察を進める。

文化概念の再検討

民族誌モデルの構築を射程に入れ、現在、パレオアジア文化史学のなかで「文化」という概念が、各研究分野や個々の研究者によってどのように使用され、その間にどんな差異や齟齬を孕んでいるか検討を進めている。その理由は、次の通りである。まず文化は、日常語彙であるため、厳密な定義を経ず通常多義的かつ曖昧な使われ方をしている傾向が窺われる反面、同プロジェクトでは鍵概念として他分野の研究者によって対象とされていることが、第一の理由としてあげられる。次に文化の学術的な定義は、文化/社会人類学が民族誌研究を基盤として行ってきたこと、また民族誌モデルの構築と応用において文化概念の差異や齟齬を把握しておく必要性が高いことも、重要な理由となる。

このような理由を踏まえ、以下では、まず文化/社会人類学及び関連分野における「文化」の定義を確認する。文化の定義は、文化/社会人類学における主要テーマの一つといっても過言ではない。そのため、学説史を辿るとさまざまな定義が行われ提起され、また各時代の研究動向や理論的潮流のなかで、それらの消長が繰り返されてきたことが確認できる。

そのようななかで、現在でも承認され共有されているのは、まず文化とは特定個々の要素には区分できない、人間が獲得したさまざまな能力や習性の総体である、というE.タイラーの古典的定義があげられる(Tylor 1871)⁷⁾。タイラーの定義は、文化を特定の領域に限定せず人間の行為全体に当てはめたこと、文化を生物学的遺伝ではなく人間が社会的に成長する過程で学習するものとして捉えたこと、この二点が重要なポイントとなる。パレオアジア文化史学にとっては、生物学的遺伝に因らない学習によって獲得された能力や習性、という後者の指摘が取り分け重要となるだろう。

他方、古典的定義でありながら、現在まで継承されているものとして、F.ボアズにはじまる文化相対主義も外すことはできない。文化相対主義は、個々の文化に優劣などはなく平等に尊ばれるべき(Dall & Boaz 1887: 589, Steward 1948)、という倫理的・道徳的側面が一般に強調されるが、どの社会も固有の文化を持つとする—パレオアジア文化史学のみならず一般社会の常識ともいえる一極めて今日的な文化理解の形成を促した。

以上のタイラーやボアズ文化の定義は、部分的な批判はあったとしても、文化/社会人類学において大枠で承認され継承されている、ある意味でコモンセンスとさえいえる。これに対し、現在の文化/社会人類学における文化の定義の違いは、マクロとミクロどちらの位相に焦

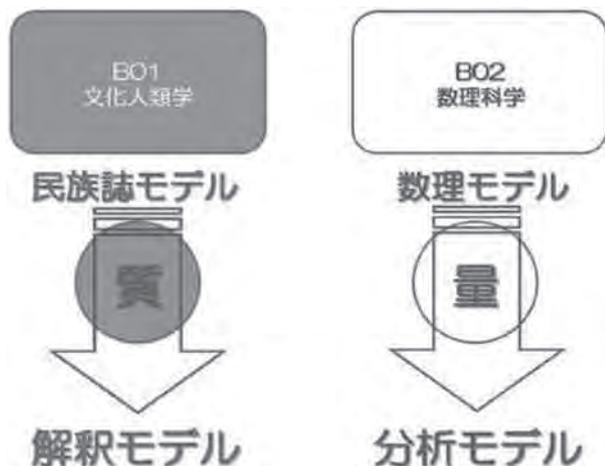


図2 B01班とB02班のモデルの違い

点を当てるかに起因している傾向が指摘できる。

マクロな文化の定義の代表は、新進化主義人類学などで用いられている「環境に対する適応手段」があげられる (Seymour-Smith 1986: 62)。この定義がマクロとされる理由は、文化が集団や個人の生存にとって、どのような役割や貢献を果たすか、という比較的巨視的な背景を見据えているためである。こうした視座は、新進化主義人類学の潮流のなかで要請、継承されたものであるため、文化/社会人類学では主流ではないものの、パレオアジア文化史学の目的をはじめ考古学的研究には理解や適用が容易といえる。というのは、考古学や遺伝学などの研究においては、広範な時空間のなかでの人類集団の展開あるいは適応の結果としての考古資料や遺伝子の形成、存続を考えるため、極めてその目的に適合した定義となることから、意識的・積極的に新進化主義人類学などから採用され非常にポピュラーな文化の定義とさえいえる。

いっぽう、ミクロな定義は、C. ギアツが唱えた「意味の網の目」が代表例としてあげられる (ギアツ 1987: 6)。この定義は、コミュニケーションや日常的実践などの日々の文化的行為を対象とした研究に用いられる傾向にあり、前述の「環境に対する適応手段」などに比べ相対的にミクロな人間活動を対象とした微視的な視座といえる。これに加え、ある文化的実践が、その場にいる現地の人びとにとって、どのような意味を持つものなのか、という問いに基づく定義は、ある時にある場所で行われる民族誌調査にとって極めて適用的なものとなる。実際、ある文化的実践が生存にどう貢献しているのか、というマクロな視座に基づく定義などよりは、民族誌調査の現場でリアリティを得やすいものといえよう。とはいえ、このミクロな定義は、個別具体的な対象として人間行動の現場を観察できない考古学や遺伝学などには非常に適用が難しいだろう⁸⁾。

以上のように、文化の定義のマクロ/ミクロの違いは、理論的背景に由来するケースのみならず、研究目的や調査対象などの具体的かつ実践的な要因によって選択されるものであり、またそれによって適合性が異なるものであった。したがって、この二つの違いは、決してどちらかが正しく、どちらかが間違っている、というような排他的なアプローチではなく、研究対象やテーマによって適応的か否か程度の選択可能なものと認識すべきである。ちなみに、パレオアジア文化史学 A01～03 の専門分野への応用を考慮するならば、現在の文化/社会人類学の主流ではないものの、マクロな定義による文化概念に基づく民族誌モデルの構築は必須となるだろう。

むしろ、理論的側面で注意すべきアプローチとしては、文化/社会人類学を超え社会科学全般にかかわる、方法

論的個人主義と方法論的全体 (社会) 主義をあげることができる。方法論的個人主義とは、極論的には社会全体などはどこにも存在はせず、あくまでも社会とは個人ないし個人行動の集積に過ぎない、との認識に立脚し個人の意思決定などから社会を説明しようとする考え方であり、M. ウェーバーによって社会学に導入されたと一般に認知されている (e.g. ウェーバー 1953)。他方、方法論的全体 (社会) 主義は、どれほど詳細に個人や個人行動を分析したとしても、それで社会という全体性が理解できるわけではない、との認識に立脚し社会全体そのものを把握しようとする考え方であり、E. デュルケームが積極的に推進した理論である (e.g. デュルケーム 1978)。

個人主義と全体主義の是非は、社会なるものをどのように理解するのか、という根源的命題にかかわるものであり、また現在まで解消されていない—そもそも解消されないであろう—課題でもある。とはいえ、一つの傾向として、個人の意思決定から説明しようとする方法論的個人主義は、自由意志を持つ近代の主体像/概念を前提としている感は否めない。実際、方法論的個人主義は、経済学との深い関係性の下に発展してきたものである (cf. 松嶋 1993, 寺尾 2016)。さらには、社会生物学や進化心理学などの自然科学分野の人間研究も、方法論的個人主義を前提としているとの指摘がある (Ziman 2000: 9)。

これに対して、方法論的全体主義は、必ずしも人文社会学を含む近代科学のなかで主流的なアプローチではなかった。取りも直さず、その理由は、前述したように近代の主体像/概念が、さまざまな研究のなかに意識的・無意識的に反映していることが大きい、と推察される。ただ文化/社会人類学は、草創期のイギリスの構造主義人類学がデュルケームの方法論的全体主義の理論的影響を受けて形成されたこと (cf. 竹沢 2006: 63-64, 80-81)、また西欧社会の主体像の批判に立脚する C. レヴィ=ストロースの構造主義人類学 (e.g. レヴィ=ストロース 1972) など、方法論的全体主義は理論・方法論から研究実践に至るさまざまな側面のなかに顕在的にも潜在的にも窺うことができる。

こうした背景を踏まえるならば、方法論的個人主義と方法論的全体主義は、二者択一的なものではない反面、民族誌モデルの構築や使用に取り組む際に、自らが立脚する研究がどちらを選択しているか明確に認識する必要があるだろう。というのは、個人か社会全体かを明確に認識した上で使用しなければ、根本的な部分で不具合を引き起こす危険性が孕まれているからである。実際、個人から説明しようとする議論に、明確な注意を払わずにその反対の社会全体から構築されたモデルを当てはめることは、少なからず齟齬が生じる可能性が十二分にある

だろうし、またその逆もしかりである。

文化概念の4区分

本稿では、民族誌モデル構築に当たり、文化／社会人類学及び関連分野における文化概念の検討を試みた。その結果、文化概念は、既存の議論を踏まえるならば図3のような4区分の枠組みのなかに整理できることが明らかになった。

もともと、本稿での整理は、従来の学史的背景を粗略したものであり、詳細においてはさまざまな異論や疑義が提示される可能性を孕んでいることは否めない。とはいえ、そうした異論や疑義は、ディテールの部分に関して提示されるものであり、大枠においてこの4区分を否定するものではないだろう。とりわけ、この4区分は、理論面から実践面までをカバーする概念でもあった。

とすれば、パレオアジアの文化史学の各班が使用している文化概念も、多かれ少なかれ①～④区分のなかに当てはめることができる、との措定が成り立つだろう。またこのことは、単に用語や概念使用の分類にとどまらず、

民族誌モデルの構築において重要な貢献を果たすものとなる。というのも、専門領域や理論・方法論を大きく異にするパレオアジア文化史学の各班に対して、この4区分の確認は、民族誌モデルを提供する際に必要不可欠な作業となるからにほかならない。

なによりも、本稿で論じた文化をはじめ、たとえ同じ用語を使っていたとしても、各班や個別の研究によって、全く相異なる意味内容を孕んでいる可能性が多分にある。こうした齟齬を放置したままでは、どのような民族誌モデルを構築したとしても、その有効性が十分に発揮されず、さらには反って無用な混乱を引き起こす危険性すらある。

以上の成果と課題を踏まえ、現在は、パレオアジア文化史学のなかで各班の研究者が使用している「文化」が4区分のなかの何処に位置づけられるか、A03班の近藤康久氏・岩本葉子氏と共同で検討を進めている。またその結果を踏まえ、わたし個人としては、同プロジェクトのなかで求められている民族誌モデルのある方を明らかにするとともに、各研究に適した有効的なモデル構築を模索したいと考えている。

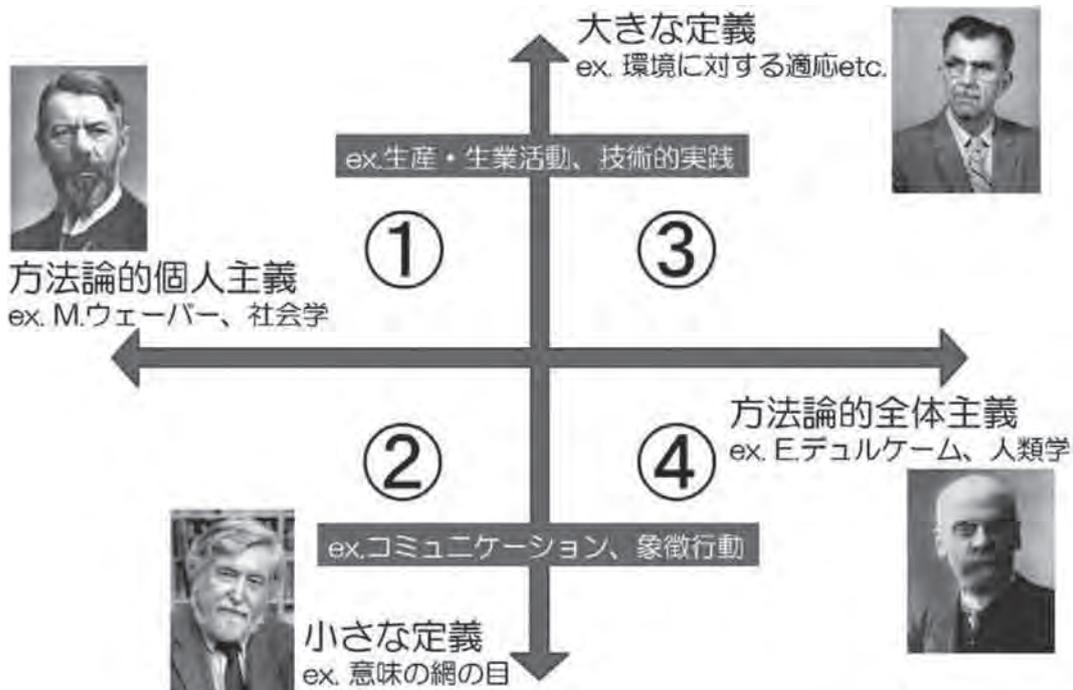


図3 文化概念の4区分

注

- 1) 端的に述べるならば、たとえ歴史的連続性があったとしても、「過去は異文化社会である」との認識に立つ必要がある。無前提の過去の同一視こそ、最も典型的な文化社会コンテキストの無視に基づく批判すべき姿勢にはかならない。
- 2) まず人文社会学を含む近代諸科学は、西欧近代社会のコンテキストのなかで生み出されたものである。このため、そのなかには、基盤となった西欧近代社会の世界観、コスモロジー、認識論から決して自由ではない。この事は、非西欧近代社会を対象とし、西欧近代の自文化中心主義を批判し警鐘を促してきた文化/社会人類学にとっても例外ではない。
- 3) もっとも、こうした認識は、エスノアーケオロジーの導入、応用の是非をめぐる議論のなかで、考古学では既に経験済みのものである (cf. Stiles 1977, Gould 1989)。むしろ、民族誌モデルの過去の読み解きに対する否定は、歴史研究の妥当性の懐疑にも通底していることを、そうした批判行っている側が必ずしも十分に認識していない、という傾向が強いだろう。
- 4) パレオアジア文化史学 HP「B02: 人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の現象数理学的モデル構築」研究目的 (http://paleoasia.jp/research_projects/b02/)
- 5) パレオアジア文化史学 HP「B02: 人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の現象数理学的モデル構築」研究方法 (http://paleoasia.jp/research_projects/b02/)
- 6) むろん、研究上の結果として、量が質の発見に転換する可能性は十分にありうる。しかし、数理モデルの解析では、考古学者の分類基準や研究結果などが前提となっており、それらそのものの再検討や見直しに直接的に貢献することはないだろう。
- 7) タイラーの原文では、「文化 (culture)」とともに「文明 (civilization)」を置換可能な同義のものとして併記されている (Tylor 1871: 1)。また後述する、F. ボアズの文化相対主義のように文化の個性、複数性を一少なくとも定義の上では一考慮していなかった。この点で、タイラーは、西欧中心主義的視点、観念から自由でなかったことが窺われる。
- 8) もっとも、考古学においても、個別具体的な過去の人間行動に伴う「意味」を問うような研究が行われていないわけではない。たとえば、象徴行為の痕跡と措定される遺物や遺構などを対象として、その実践に参加した人びとの意味などを読み解こうとする研究があげられる。ただし、この種の研究は、かなりの条件設定が揃っていなければならないため、非常に限定的なものである。またそうした考古学者による解釈は、当然ながら当事者に確認できないことから、その妥当性を検証する術は原理原則的には不可能である。

参考文献

- Binford, L. R.
1968 Archaeological Perspectives. In S. Binford & L. Binford (eds.), *New Perspectives in Archaeology*, pp.5-32, Aldine Publ, Chicago.
- Dall, Wm. H. & F. Boas
1887 Museums of Ethnology and their Classification. *Science* 9 (228): 587-589.
- デュルケーム, E.
1978 『社会学的方法の規準』宮島喬 (訳) 岩波文庫
- ギアツ, C.
1987 『文化の解釈学 I』吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美 (訳) 岩波書店
- Gould, R. A.
1989 Ethnoarchaeology and the Past: our search for the "real thing". *Fennoscandia Archaeologica*, 6: 3-22.
- レヴィ=ストロース, C.
1976 『構造人類学』荒川幾男・生松敬三・川田順造・佐々木明・田島節夫 (訳) みすず書房
- マーカス, J. E. & M. M. J. フィッシャー
1989 『文化批判としての人類学—人間科学における実験的試み』永淵康之 (訳) 紀伊國屋書店
- 松嶋敦茂
1993 「方法論的個人主義の諸類型」『彦根論叢』285-286, pp.231-247
- Seymour-Smith, C.
1986 *Macmillan Dictionary of Anthropology*. G. K. Hall and Company.
- Steward, J. H.
1948 Comments on the Statement on Human Rights. *American Anthropologist* 50(2): 351-352.
- Stiles, D.
1977 Ethnoarchaeology: a discussion of methods and applications. *Man*, 12(1): 87-103.
- 竹沢尚一
2006 「フランスの人類学と人類学教育」『国立民族学博物館研究報告』31(1), pp.57-86
- 寺尾建
2016 「経済理論と方法論的個人主義」『甲南経済学論集』56(1-2), pp.41-70
- Tylor, E. B.
1871 *Primitive Culture: researches into the development of mythology, philosophy, religion, language, art and custom, Vol. I*. John Murray.
- ウェーバー, M.
1953 『社会学の基礎概念』阿閉吉男・内藤莞爾 (訳) 角川文庫
- Ziman, J.
2000 Evolutionary Model for Technological Change. In J. Ziman (ed.), *Technological Innovation as an Evolutionary Process*, pp.3-12. Cambridge University Press.

研究計画 B01 班 2017 年度研究活動

1. B01 班主催研究会

(1) 槍熟覧会

日 時：2017 年 8 月 5 日

場 所：国立民族学博物館

話題提供者：野林厚志 (B01)、彭宇潔 (B01)、
中村光宏 (B02)

プログラム

13:30~15:00 槍の実見会 (民博収蔵庫)

15:30~17:30 東南アジア DB の再分析の
中間報告

参加者：池谷和信、卯田宗平、大西秀之、金谷美和、
高倉純 (A01)、戸田美佳子、野林厚志、
藤本透子、彭宇潔、若野友一郎 (B02)、
Scott Simon (Ottawa University/National
Museum of Ethnology)

(2) B01 南アジア班 2017 年度第 1 回研究会

「線具」からみる生態資源利用について-1

日 時：平成 29 年 8 月 21 日(月) 10:00~17:00

出席者：上羽陽子、金谷美和、中谷文美

場 所：国立民族学博物館 第 1 演習室

内 容：1960 年代の科学映像資料 (ENCYCLOPAEDIA
CINEMATOGRAPHICA) を視聴し、現生人類の素材・
道具利用について「線具」に焦点を当て、討論を
おこなった。自然素材の「線具」制作と利用の実
態を検討し、今後のパレオアジア文化史学の研究
調査方針について議論した。

ENCYCLOPAEDIA CINEMATOGRAPHICA フ
イルムの視聴一覧

R00107 Herstellen von Kokosfaserschnur
(ココヤシの繊維で紐をつくる)

R01029 Gewinnung von Agave-Fasern Drehen
von Schnur (竜舌蘭繊維の糸づくりと紐づくり)

R00145 Lockern und Spinnen von Yak-Wolle
(ヤクの毛を軟らかくして紡ぐ)

R01199 Flachsernte und Flachsverarbeitung;
(Riffeln-Brechen-Hecheln-Spinnen)

(亜麻の収穫と

R00187 Herstellen eines Kokosfaserseiles
(ココヤシの繊維で縄をつくる)

R02334 Herstellen einer Leine (麻紐づくり)

R01062 Bäuerliches Reepschlagen (Seilerei)
(農民のロープづくり)

R00189 Knüpfen eines Kokospalmblatt-
Schurzes

(ココヤシの葉を結び合わせて腰布をつくる)

R00138 Einholen und Scheren von Yaks
(ヤクの捕獲と毛の刈り込み)

R00164 Korbflechterei (籠編み)

(3) B01 南アジア班 2017 年度第 2 回研究会

「線具」からみる生態資源利用について-2

日 時：平成 29 年 12 月 22 日(金) 10:30~14:30

出席者：上羽陽子、金谷美和、中谷文美

場 所：国立民族学博物館 第 1 演習室

内 容：今年度調査を実施したインド北東部アッサ
ム地域でのタケ素材利用についての調査報告をし、
今後の研究方針について討論をおこなった。さら
に、タケ利用に関連する 1960 年代の科学映像資料
(ENCYCLOPAEDIA CINEMATOGRAPHICA) を視聴
し、現生人類の素材・道具利用について「線具」
に焦点を当て、討論をおこなった。

ENCYCLOPAEDIA CINEMATOGRAPHICA フ
イルムの視聴一覧

R00934 Herstellung eines Bogens (弓の製作)

R00935 Herstellung einer Pfeilspitze
(Bambus) (竹製の矢じりの製作)

R00936 Herstellung eines Pfeiles mit
Knochenspitze (骨製矢じりの製作)

R00171 Herstellen von Hüten (帽子の製作)

R00172 Bau eines Geflochtenen Bambusbootes
(竹編みボートの建造)

R00134 Ornamentieren eines Blashorns aus
Bambus (竹製の吹奏楽器の装飾)

2. B01 班班会議

第 1 回班会議 標本資料熟覧会第 1 回

日 時：2017 年 6 月 8 日、9 日

場 所：国立民族学博物館収蔵庫

活動内容：アフリカの槍を熟覧し計測した。

参加者：金谷美和、戸田美佳子、野林厚志、彭宇潔

第2回班会議 B01・B02交流会兼標本資料熟覧会第2回

日 時：2017年6月22日、23日

場 所：国立民族学博物館

活動内容：アフリカの槍を熟覧し、東南アジア DB
の活用について議論をおこなった

話題提供者：

中村光宏 (B02) 「相互情報量を用いた民族誌文化
項目間の相関の定量化」

参加者：池谷和信、卯田宗平、野林厚志、藤本透子、
彭宇潔、山中由里子

第3回班会議 標本資料熟覧会第3回

日 時：2017年7月13日、14日

場 所：国立民族学博物館収蔵庫

標本資料：東南アジア・南アジアの槍

参加者：野林厚志、彭宇潔

第4回班会議

日 時：2018年9月20日(水)

場 所：国立民族学博物館

参加者：B01班研究分担者、連携研究者

3. B01班共催の研究会

(1) 「民族自然誌研究会 第86回例会」

日 時：2017年4月15日 13:00～17:00

開 催：京都大学 楽友会館

主 催：民族自然誌研究会第86回例会

共 催：新学術領域研究 (パレオアジア文化史学)

「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化
の文化人類学的モデル構築 (課題番号 16H06411、
代表：野林厚志)

「ごぎ・釜・箕・笠・バスケット——編組品とその
植物素材」

発表者：

星 公望 (星工房、民具製作指導)

「西表島の手わざ」

川野和昭 (南方民俗文化研究所主宰)

「南九州と東南アジア照葉樹林帯の竹の民具」

関島寿子 (かご製作者、多摩美術大学客員教授)

「6種の組織構造に基づくかご類の分類」

コメンテーター：上羽陽子 (国立民族学博物館)

司 会：飯田卓 (国立民族学博物館)

(2) 「先史人類の移動と人類博物館」

主 催：国立民族学博物館研究会「先史人類の移動
と人類博物館」

共 催：パレオアジア文化史学 B01班共催

日 時：3月22日(木) 15:00～17:20

場 所：国立民族学博物館四階 4046 (特別研究室)

プログラム：

15:00～15:10

「趣旨説明」

池谷和信 (国立民族学博物館人類文明誌)

15:10～16:10

「先史狩猟採集漁撈民の移住——島から島へ——」

海部陽介 (国立科学博物館人類研究部)・

井原泰雄 (東京大学理学系研究科)

16:10～17:20

「パリの人類博物館 (Musée de l'Homme) の展
示について」

セルジ・パウシェ博士 (フランス国立自然史
博物館)

4. その他の活動

【日本学術振興会海外学術調査フォーラム】

日 時：2017年7月1日

場 所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研
究所 (府中市)

ポスター発表：

「パレオアジア文化史学——新人文化形成プロセス総
合的研究にむけた海外学術調査の統合の試み」(西秋
良宏・野林厚志・門脇誠二・北川浩之・若野友一郎・
赤司千恵)

B01班参加者：野林厚志、彭宇潔

「パレオアジア文化史学」第3回研究大会プログラム Conference Schedule

2017年5月13日(土) 10:30 ~ 16:50

10:30-16:50 May 13 (Sat), 2017

場所：国立民族学博物館・第5セミナー室

Venue: No.5 Seminar Room, National Museum of Ethnology, Japan

ワークショップ「新人文化の『モビウスライン』とビーズ」

Workshop: “‘Movius Line’ and Beads in Modern Humans’ Culture”

10:30-10:40 領域代表挨拶

Opening Remarks

10:40-11:05

野林厚志 (B01)

「適応」を再考する—ニッチと文化の境界—

Atsushi Nobayashi (B01)

Use and Abuse of Adaptation Theory: Ecological Niche and Boundaries of “Culture”

11:05-11:30

池谷和信 (B01)

ビーズから見たアジア世界

—貝殻とダチョウの卵殻に注目して—

Kazunobu Ikeya (B01)

Beads in Asia: Seashells and Eggshells of Ostrich as Materials

11:30-12:00 特別展「ビーズ—つなぐ、かざる、みせる」

解説 (池谷和信)

Introduction for Special Exhibition “Beads in the World” by Kazunobu Ikeya

12:00-13:10 昼食・特別展観覧

Luch Break/Exhibition Tour

13:10-13:35

山岡拓也 (A01)

モビウスラインの解釈に関する考古学的研究の歴史と現状

Takuya Yamaoka

The History and the State of Archaeological Studies

on Interpretations of the Movius Line

13:35-14:00

野口 淳 (A01)

南アジアにおける中期～後期旧石器時代文化の地理的変異—新人出現期にモヴィウスラインはあるか—

Atsushi Noguchi (A01)

Geographical variation in the Middle and Upper Palaeolithic cultures in South Asia: can ‘Movius Line’ be recognized in the period of modern human emergence?

14:00-14:25

西秋良宏・野口 淳 (A01)

旧世界中後期旧石器時代遺跡出土装身具からみたヒトと文化

Yoshihiro Nishiaki and Atsushi Noguchi (A01)

Variability in personal ornaments in the Middle and Upper Palaeolithic: a global survey

14:25-14:50

小野林太郎・Alfred Pawlik・Riczar Fuentes・Suryatman (A02)

モビウスラインより東側における新人文化の変異について—東南アジア～オセアニア海域の事例から—

Rintaro Ono, Alfred Pawlik, Riczar Fuentes, and Suryatman (A02)

Material Culture and subsistence of Modern Human in the East of Movius line: a view from Southeast Asia and Oceania

14:50-15:15

北川浩之 (A03)

モビウス・ライン—気候学的な解釈—

Hiroyuki Kitagawa (A03)

The Movius line: climatological interpretation

15:15-15:35 休憩／Coffee Break

15:30-16:00

彭宇潔 (B01)

民族誌的視点からの装身具と身体装飾
—狩猟採集民と他集団との関係に注目して—

Yujie Peng (B01)

Ethnographic perspective of ornaments and body
decoration: Emphasizing relationships between
hunter-gatherers and other groups

16:00-16:30

高畑尚之 (B02)

南拡散ルート、遺伝的多様性そして地域適応

Naoyuki Takahata (B02)

Southern dispersal route, genetic polymorphism and
local adaptation

16:25-16:50 公募研究フラッシュトーク

Flash Talks by Invited Researchers

17:15-19:15 懇親会 / Reception

2017年5月14日(日) 10:00~16:50

10:00-16:50 May 14 (Sun), 2017

場所: 国立民族学博物館・第5/第7セミナー室

Venue: No.5/No.7 Seminar Room, National Museum of Ethnology, Japan

ワークショップ / Workshop

10:00-10:30

門脇誠二 (A02)

モビウス・ライン西側における新人文化の発生と多様
性—小石刃を用いる行動と社会の考察—

Seiji Kadowaki (A02)

Formative processes and diversity of modern human
cultures to the west of the Movius Line: behavioral
and social implications of bladelets

研究報告 / Project Reports

10:30-10:50

近藤康久・門脇誠二・北川浩之・鈴木美保・仲田大人・野口 淳・
野林厚志・西秋良宏 (総括班)

パレオアジア遺跡データベースのプロジェクト内共有
について

Yasuhisa Kondo, Seiji Kadowaki, Hiroyuki Kitagawa, Miho
Suzuki, Hiroto Nakata, Atsushi Noguchi, Atsushi Nobayashi,

and Yoshihiro Nishiaki

Data sharing within the PaleoAsia project to
accelerate interdisciplinary research

10:50-11:50 ポスターセッション (第7セミナー室)

Poster Session (No.7 Seminar Room)

11:50-13:00 昼食・総括班会議

Lunch Break / Steering Committee's
Meeting

13:00-13:30

出穂雅実 (A02)

モンゴルにおける最初期現生人類の人類学的・考古学
的研究—2009-2016年度フィールドワークから—

Masami Izuho (A02)

Anthropological and Archaeological Investigations on
the Earliest Modern Human in Mongolia: 2009-2016
Field Campaigns

13:30-13:50

松藤和人 (A01)

東アジアにおける新人出現期の様相

Kazuto Matsufuji (A01)

Phases of Homo sapiens's appearance stage in East
Asia

13:50-14:15

中沢祐一 (A02)

資源利用の集約化とストーンボイリング

—パレオアジアの礫群分析に向けたヨーロッパ後期旧
石器からの展望—

Yuichi Nakazawa (A02)

Resource intensification and stone boiling: a prospect
from the European archaeological record toward a
synthetic analysis of cobble concentrations in the
PaleoAsia project

14:15-14:40

北川浩之 (A03)

エージェント・ベースモデルを使った文化の伝播と隔
離の考察

Hiroyuki Kitagawa (A03)

Agent-based model simulation for understanding
spread and segregation of culture

14:40-15:05

田村 亨 (A03)

OSL 年代測定を試料採集の留意点

Toru Tamura (A03)

Sediment sampling for OSL dating

15:05-15:25 休憩 / Coffee Break

15:25-15:50

卯田宗平 (B01)

北東アジア地域における生業活動の男女差と集団接触の諸相

Shuhei Uda (B01)

Gender differences of subsistence activities and phases of group contact in northeastern Asia

15:50-16:15

若野友一郎・青木健一 (B02)

生態文化的分布拡大モデルにおける遺伝的交雑と非一様環境のモデリング

Joe Yuichiro Wakano and Kenichi Aoki (B02)

Modeling genetic introgression and heterogeneous environment in ecocultural range-expansion models

16:15-16:40

小林 豊・Laurent Lehmann (B02)

累積的文化進化と垂直伝達

Yutaka Kobayashi and Laurent Lehmann (B02)

Cumulative cultural evolution and vertical transmission

16:40-16:50 閉会の辞 / Closing Remarks

ポスターセッション(第7セミナー室) 2017年5月14日 10:50~11:50

Poster Session (No.7 Seminar Room) 10:50-11:50 May 14, 2017

計画研究班 A01 / Research Team A01

Poster 1.

仲田大人

日本旧石器時代の装飾品

Hiroto Nakata

The ornamentation of the Japanese Palaeolithic

Poster 2.

澤藤りかい・石田 肇

歯石から見る古代の文化—パレオアジア研究への応用—

Rikai Sawafuji and Hajime Ishida

Culture studies using ancient dental calculus: application to PaleoAsia studies

Poster 3.

鈴木美保

後期旧石器時代前半の刃部磨製石斧の分布—モビウスライン東の石器製作技術—

Miho Suzuki

Edge-ground stone axes in the Early Upper Palaeolithic of East Asia: An unique lithic technology from east of the Movius Line

Poster 4.

高倉 純

ジビリヤチーハ伝統の評価—分布・年代・生業—

Jun Takakura

An overview of the Sibiryachiha tradition: distribution, dates, and subsistence

計画研究班 A03 / Research Team A03

Poster 5.

藤木利之・北川浩之

出来島海岸最終氷期埋没林における花粉分析の予備的結果

Toshiyuki Fujiki and Hiroyuki Kitagawa

Preliminary results on pollen analysis of last glacial period submerged forest in Dekishima coast

Poster 6.

長谷川精

レス—古土壌シーケンス記録からみる最終氷期におけるアジア内陸の古環境変動

Hitoshi Hasegawa

Reconstruction of paleoenvironment during the last glacial based on the Loess-Paleosol sequence record

Poster 7.

奈良郁子

大陸内部域における降水量変動復元とその変動要因

Fumiko Watanabe Nara

What is the trigger for the precipitation variability

in the continental region?

Aquatic Animals

計画研究班 B01 / Research Team B01

Poster 8.

藤本透子

集団間の接触にともなう住居の変化
—カザフの定住化に関する人類学調査から—

Toko Fujimoto

Change of Dwellings in the Contact Zone:
Anthropological Research on Sedentarization of
Kazakh Society

Poster 9.

金谷美和・上羽陽子・中谷文美

インド、アッサムにおける生態資源利用
—「線具」を中心に—

Miwa Kanetani, Yoko Ueba, and Ayami Nakatani

Lineware: Usage of Ecological Resources in Assam,
India

Poster 10.

菊田 悠

中央アジアにおける社会関係とモノの変化
—青い陶器の発展と消滅—

Haruka Kikuta

Changes of objects and social relations in Central
Asia: The case of blue pottery's development and
disappearance

Poster 11.

大西秀之

民族誌的視座からの人類進化と技術革新の関係をめぐ
る—考察

Hideyuki Ōnishi

Relations between Human Evolution and
Technological Innovations from Ethnographic
Perspectives

Poster 12.

山中由里子

想像界の生物相 (2)
—人魚イメージの世界的分布と水棲動物の棲息地—

Yuriko Yamanaka

The Biota of the Imaginary (2): Global Distribution
of Mermaid Imagery in Relation to the Habitat of

Poster 13.

吉田世津子

クルグズ人の定住化と墓の形態変化—中央アジア・社
会とモノの変化に関する予備的考察—

Setsuko Yoshida

Sedentarization of the Kyrgyzes and their Tomb
Form Changes: a preliminary study of the
interrelation between social and material changes in
Central Asia

計画研究班 B02 / Research Team B02

Poster 14.

中村光宏

系統学的手法を用いたパレオアジア文化史の推論

Mitsuhiro Nakamura

A phylogenetic approach to cultural evolution in
PaleoAsia

公募研究 フラッシュトーク 2017年5月13日 16:25～16:50

Invited Research Projects: Flash Talks 16:25-16:50 May 13, 2017

Poster 15.

上峯篤史 (A01)

東アジアにおける石英製旧石器の変遷と石器製作・使
用行動の解明

Atsushi Uemine (A01)

Elucidation of the chronology and human behavioral
pattern reflected in quartz artifacts in East Asia

Poster 16.

木村亮介 (A01)

バイカル古人骨のゲノム解析可能性調査

Ryosuke Kimura (A01)

A feasibility study on genome analysis of ancient
humans in the Lake Baikal area

Poster 17.

近藤 修 (A01)

西アジア旧石器人類化石の形態学的研究

Osamu Kondo (A01)

Late Pleistocene human fossil remains in West Asia

Poster 18.

国武貞克 (A01)

カザフスタンに於ける後期旧石器文化形成プロセスの研究

Sadakatsu Kunitake (A01)

Study of the formation process of Upper Paleolithic culture in Kazakhstan

Poster 19.

中沢 隆・荻野茉央 (A02)

2,000年から40,000年前の動物骨に含まれているコラーゲンのタンパク質考古学的研究

Takashi Nakazawa and Mao Karino (A02)

Protein archaeology applied to collagen in 2,000- to 40,000-year-old animal bones

Poster 20.

勝田長貴 (A03)

バイカルリフト堆積盆に記録される最終氷期のユーラシア内陸の環境変動

Nagayoshi Katsuta (A03)

The last glacial environmental changes in intracontinental Eurasia recorded in the sedimentary sequences from basins of the Baikal rift zone

Poster 21.

山田仁史 (B01)

民族誌データに基づく人類集団動態モデルの構築—本研究がめざすもの—

Hitoshi Yamada (B01)

Constructing dynamic models of human group interactions based on ethnographic data: aim of the present study

Poster 22.

太田博樹・石田貴文 (B02)

タイ少数民族と古人骨を対象とした生業形態とゲノム多様性に関する研究

Hiroki Oota and Takafumi Ishida (B02)

A study of lifestyle and genome diversity focused on minority groups in Thailand and human remains from archaeological sites

研究計画 B01 班 2017 年度研究業績

出版物 Publications

著編書 Books

野林厚志 (編) (2018) 『EEM 国立民族学博物館開館 40 周年記念特別展：太陽の塔からみんなくへ：70 年万博 収集資料』国立民族学博物館。

Ikeya, K. (ed.) (2017) *Senri Ethnological Studies No. 95: Sedentarization among Nomadic People in Asia and Africa*. Osaka: National Museum of Ethnology.

山田仁史 (2017) 『新・神話学入門』朝倉書店。

雑誌論文 Journal articles

池谷和信・岸上伸啓・佐々木史郎・戸田美佳子 (2018) 「最近の狩猟採集民研究の動向—第 11 回国際狩猟採集 社会会議 (CHAGS11) に出席して—」『国立民族学博 物館研究報告』42(3)：321-372。

大西秀之 (2018) 「ナーナイ系先住民の集落景観を形作っ た土地利用と生計戦略：景観に刻まれたソビエト体制 の展開と崩壊」『年報人類学研究』8：1-37。

松森智彦・大西秀之・アンドレイ P. サマル・佐々木史 郎 (2018) 「衛星写真及び土地利用を活用した民族調査 の事例：ロシア極東のコンドン・ウリカナツィオナー リノエ村を中心に」『文化情報学』13(1-2)：1-16。

大西秀之 (2017) 「調査法としての身体経験：フィールド ワーク教育の実践とその可能性」『コンタクトゾーン = Contact Zone』9：371-385。

彭 宇潔 (2017) 「『女性のファッション』—バカ・ピグ ミーの刺青実践を事例に」『コンタクト・ゾーン = Contact Zone』9：331-346。

Yamanaka, Y. (2018) Authenticating the Incredible: Comparative Study of Narrative Strategies in Arabic and Persian 'ajā'ib Literature. *Jerusalem Studies in Arabic and Islam*, in press.

山中由里子 (2017) 「『心の進化』から驚異・怪異を捉え る」『民博通信』156：20-21。

卯田宗平・澤木万理子・松坂善勝・江崎洋子 (2017) 「宇 治川の鶉飼におけるウミウの繁殖・飼育技術の特徴— 中国における鶉飼の事例比較」『日本民俗学』292：1- 26。

卯田宗平 (2017) 「なぜ宇治川の鶉飼においてウミウは産

卵したのか—ウミウの捕獲作業および飼育方法の事例 から」『国立民族学博物館研究報告』42(2)：1-87。

卯田宗平 (2017) 「人・動物関係におけるリバランスとい う視座—中国と日本の鶉飼でみられるウ類への働きか けの事例から」『環境社会学研究』23：20-33。

書籍掲載論文 Book chapters

池谷和信 (2018) 「現代の『狩猟採集民』にとっての肉食 とは何か」『肉食行為の研究』野林厚志編：212-238、 平凡社。

野林厚志 (2018) 「序」『肉食行為の研究』野林厚志編： 5-30、平凡社。

大西秀之 (2018) 「アイヌ・エコシステムの舞台裏：民族 誌に描かれたアイヌ社会像の再考」『寒冷アジアの文化 生態史』高倉浩樹編：25-47、古今書院。

Ikeya, K. (2017) Introduction: Studies of Sedentariza- tion. In K. Ikeya (ed.) *Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa, Senri Ethno- logical Studies 95*, pp.1-15, National Museum of Ethnology.

Ikeya, K. and S. Nakai. (2017) Sedentarization and Landscape Change among the Mlabri in Thailand. In K. Ikeya (ed.) *Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa, Senri Ethnological Studies 95*, pp.171-191, National Museum of Ethnology.

山田仁史 (2017) 「解説 「良識」を喰う食人論」『カニバ リズム論』中野美代子著：309-321、筑摩書房。

Yamanaka, Y. (2017) The Tear-bottle Quest: European Perception of the Biblical Orient and Iranian Shiite Ritual. In: *Terra Ridens*, edited by Regina F. Bendix, D. Noyes, Dortmund, Verlag für Orientkunde.

その他の出版物 Other publications

上羽陽子 (2017) 「手仕事だから安い世界—インド北東 部アッサムの野蚕糸から」『月刊みんなく (2017 年 12 月)』、pp.18-19、国立民族学博物館。

上羽陽子 (2017) 「幼児を守るラバーリー—社会のビーズ ワーク」池谷和信 (編) 『ビーズ つなぐ かざる み せる』pp.74-75、国立民族学博物館。

藤本透子 2017 「カザフの子育て—ゆりかごの向こうに広がる世界」(特集「展示に探る民族の世界観・死生観」)『季刊民族学』162: 67-74.

藤本透子 2017 「人生儀礼 1: すこやかな成長への願い」『国立民族学博物館展示案内』国立民族学博物館、pp.202-205.

口頭発表 Conference presentations

主宰 Organized conferences

飯田 卓・上羽陽子 (2017) 『民族自然誌研究会 第86回例会「ごぎ・釜・箕・笠・バスケット—編組品とその植物素材」』、京都大学楽友会館、2017年4月15日。

講演・学会発表等 Oral and poster presentations

山中由里子 (2018) ヒュードロドロの系譜—この世ならざるものの出現にともなう音、第477回みんなくゼミナール、国立民族学博物館、2018年2月17日。

Yamanaka, Y. (2018) Sounds of the Uncanny: Acoustic Images of the Supernatural, Minpaku Seminar, National Museum of Ethnology, February 17, 2018.

Toko Fujimoto “Economic Activity and Rituals for Maintaining Regional Society: A Case Study of Kazakh Villages in Central Asia.” International Conference “Community Maintenance in Periphery,” University of Ryukyus, Okinawa, December 16-17, 2017.

野林厚志・中村光宏 (2017) 「民族誌の定量的分析の方法論的課題と解釈上の課題」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020: パレオアジア文化史学第4回研究大会』、東京大学本郷キャンパス、2017年12月9-10日 (予稿集8頁)。

Nobayash, A. and M. Nakamura (2017) Ethnographic data from a methodological viewpoint of quantitative analysis and the issues regarding the interpretations, *The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Japan, Tokyo, December 9-10, 2017 (Proceedings, p.9).

近藤康久・大西秀之・岩本葉子 10 「バズワードとしての『文化』」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020: パレオアジア文化史学第4回研究大会』、東京大学本郷キャンパス、2017年12月9-10日 (予稿集10頁)。

Kondo, Y., H. Onishi and Y. Iwamoto (2017) Is “culture” a buzzword? *The 4th Conference on*

Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Japan, Tokyo, December 9-10, 2017 (Proceedings, p.11).

岸上伸啓 (2017) 「北アメリカ北方地域における先住民文化の多様性と定量化」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020: パレオアジア文化史学第4回研究大会』、東京大学本郷キャンパス、2017年12月9-10日 (予稿集16頁)。

Kishigami, N. (2017) Variation and Quantification of Indigenous Cultures in Northern North America, *The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Japan, Tokyo, December 9-10, 2017 (Proceedings, p.17).

藤本透子・吉田世津子・菊田 悠 (2017) 「集団間接触と墓制の変遷—中央アジアにおける定性・定量調査の可能性」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020: パレオアジア文化史学第4回研究大会』、東京大学本郷キャンパス、2017年12月9-10日 (予稿集18頁)。

Fujimoto, T., S. Yoshida and H. Kikuta (2017) Transformation of Burial Systems through Contact among Ethnic Groups: Possibilities for Qualitative and Quantitative Analyses in Central Asia, *The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Japan, Tokyo, December 9-10, 2017 (Proceedings, p.19).

山田仁史・中沢祐一 (2017) 「ストーンボイリングおよび関連した文化革新/退行についての民族誌データ」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020: パレオアジア文化史学第4回研究大会』、東京大学本郷キャンパス、2017年12月9-10日 (予稿集32頁)。

Yamada, H. and Y. Nakazawa (2017) Ethnographic data on stone boiling and related cultural innovations / regressions, *The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Japan, Tokyo, December 9-10, 2017 (Proceedings, p.33).

池谷和信 (2017) 「狩猟採集民と狩猟採集民の相互関係—降水量変動、キャンプの移動、文化伝播(楽器)—」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020: パレオアジア文化史学第4回研究大会』、東京大学本郷キャンパス、2017年12月9-10日 (予稿集56頁)。

Ikeya, K. (2017) Interactions between Hunter-gatherer Groups: Precipitation Changes, Camp Migration,

- Propagation of Culture as exemplified by a Musical Instrument, *The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Japan, Tokyo, December 9-10, 2017 (Proceedings, p.57).
- 上羽陽子・金谷美和・中谷文美 (2017) 「アイヌ民族の可塑性『線具』にみる素材・製作技術の多様性」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第4回研究大会』、東京大学本郷キャンパス、2017年12月9-10日 (予稿集58頁)。
- Ueba, Y., M. Kanetani and A., Nakatan (2017) Diverse materials and techniques to produce bendable “lineware” in Ainu culture, *The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Japan, Tokyo, December 9-10, 2017 (Proceedings, p.59).
- 彭 宇潔 (2017) 「狩猟採集民にみられる道具と道具利用の多様性に関する比較研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第4回研究大会』、東京大学本郷キャンパス、2017年12月9-10日 (予稿集60頁)。
- Peng, Y. (2017) Cross-cultural research on the diversity of tools and of tool use among modern hunter-gatherers, *The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Japan, Tokyo, December 9-10, 2017 (Proceedings, p.61).
- 山中由里子 (2017) 「想像界の生物相 (3)一天狗の進化系統樹」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第4回研究大会』、東京大学本郷キャンパス、2017年12月9-10日 (予稿集62頁)。
- Yamanaka, Y. (2017) The Biota of the Imaginary (3): The Evolutionary Tree of Tengu, *The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Japan, Tokyo, December 9-10, 2017 (Proceedings, p.63).
- 大西秀之 (2017) 「3年間の調査で見えてきたこと」『標津町文化財特別展このまちの宝が伝える地域の物語 : シンポジウム : 地域資源としての歴史・文化』、標津町生涯学習センターあすばる、2017年9月17日。
- 卯田宗平 (2017) 「鵜飼を文化としてとらえる」『国立民族学博物館友の会国内体験セミナー「三次の鵜飼漁見学と広島県の民俗芸能に出会う」』、広島県立みよし風土記の丘・広島県立歴史民俗資料館講義室、2017年7月22日。
- 卯田宗平 (2017) 「鵜飼文化とは何か」『サンケイトラベ
ル「長良川鵜飼漁見学」レクチャー』、岐阜市長良川鵜飼伝承館長良川うかいミュージアム会議室、2017年7月11日。
- Peng, Y. (2017) Plant utilization in decoration culture among the Pygmy hunter-gatherers in central Africa: In the Baka's case of traditional medicine ornaments. *The 2th National Conference of Ethnology of China*. China, Kaili. July 8-10, 2017.
- Toko Fujimoto “The Religious and Social Aspects of “Ancestral Lands” in Rural Kazakhstan: An Anthropological Perspective.” ESCAS-CESS Joint Conference, American University of Central Asia, Bishkek, Kyrgyzstan, Jun 29 - July 2, 2017.
- 大西秀之 (2017) 「地球環境問題をめぐるズレの課題と可能性」『第10回コアプログラム研究会「ズレとしまい」』、総合地球環境学研究所、2017年6月26日。
- 卯田宗平 (2017) 「なぜ鵜飼のウミウは産卵したのか」『第15回生き物文化誌学会』国立民族学博物館第5セミナー室、2017年6月24日。
- Yamada, H. (2017) Swan Maiden in Hunter-Gatherer and Horticulturalist Worldviews. *The 11th Annual International Conference on Comparative Mythology*, University of Edinburgh, Edinburgh, June 8-11, 2017.
- 上羽陽子 (2017) 「インド、アッサムの野蚕利用」京都市立芸術大学、2017年6月7日。
- 大西秀之 (2017) 「地域共有資源としてのアイヌ文化史跡の可能性 : ポー川史跡自然公園を中核とする文化的景観を事例として」『日本文化人類学会第51回研究大会』、神戸大学、2017年5月27-28日。
- 池谷和信 (2017) 「ビーズから見たアジア世界一貝殻とダチョウの卵殻に注目して一」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第3回研究大会』、国立民族学博物館、2017年5月13-14日 (予稿集68-69頁)。
- Ikeya, K. (2017) Beads in Asia: Seashells and Eggshells of Ostrich as Materials. *The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017 (Proceedings, pp.70-71).
- 卯田宗平 (2017) 「北東アジア地域における生業活動の男女差と集団接触の諸相」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第3回研究大会』国立民族学博物館、2017年5月13-14日 (予稿集74頁)。
- Uda, S. (2017) Gender differences of subsistence

- activities and phases of group contact in north-eastern Asia. *The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017 (Proceedings, p.75).
- 大西秀之 (2017) 「民族誌的視座からの人類進化と技術革新の関係をめぐり一考察」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』、国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日 (予稿集 85 頁)。
- Onishi, H. (2017) Relations between Human Evolution and Technological Innovations from Ethnographic Perspectives. *The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017 (Proceedings, p.86).
- 金谷美和・上羽陽子・中谷文美 (2017) 「インド、アッサムにおける生態資源利用—『線具』を中心に—」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』、国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日 (予稿集 79-80 頁)。
- Kanetani, M., Y. Ueba, and A. Nakatani (2017) Lineware: Usage of Ecological Resources in Assam, India. *The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017 (Proceedings, pp.81-82).
- 菊田 悠 (2017) 「中央アジアにおける社会関係とモノの変化 —青い陶器の発展と消滅—」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』、国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日 (予稿集 83 頁)。
- Kikuta, H. (2017) Changes of objects and social relations in Central Asia: The case of blue pottery's development and disappearance. *The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017 (Proceedings, p.84).
- 藤本透子 (2017) 「集団間の接触にともなう住居の変化—カザフの定住化に関する人類学調査から—」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』、国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日 (予稿集 76-77 頁)。
- Fujimoto, T. (2017) Change of Dwellings in the Contact Zone: Anthropological Research on Sedentarization of Kazakh Society. *The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017 (Proceedings, p.78).
- 彭 宇潔 (2017) 「民族誌的視点からの装身具と身体装飾—狩猟採集民と他集団との関係に注目して—」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日 (予稿集 72 頁)。
- Peng, Y. (2017) Ethnographic perspective of ornaments and body decoration: Emphasizing relationships between hunter-gatherers and other groups. *The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017 (Proceedings, p.73).
- 野林厚志 (2017) 「「適応」を再考する—ニッチと文化の境界—」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日 (予稿集 66 頁)。
- Nobayashi, A. (2017) Use and Abuse of Adaptation Theory: Ecological Niche and Boundaries of "Culture". *The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017 (Proceedings, p.67).
- Nakatani, A. (2017) Conversing through textiles: Meditation across producing and consuming ends of Balinese songket, *Fashionable Tradition: Innovation and Continuity in the Production and Consumption of Handmade Textiles and Crafts, A Joint CASCA and IUAES Conference*, May 2-7, 2017 University of Ottawa, Canada.
- Nobayashi, A. (2017) Taste or cuisine: changes in "authentic" Taiwanese indigenous culinary practices. *A joint inter-congress/conference of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) and Canadian Anthropology Society (CASCA)*, University of Ottawa, Canada, May 2-7, 2017 (Proceedings, p.142).
- 山田仁史 (2017) 「民族誌データに基づく人類集団動態モデルの構築—本研究がめざすもの—」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日 (予稿集 91-92 頁)。
- Yamada, H. (2017) Constructing dynamic models of human group interactions based on ethnographic data: Aim of the present study. *The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017,

-
- (Proceedings, pp.93-94).
- 山中由里子 (2017) 「想像界の生物相 (2) : 人魚イメージの世界的分布と水棲動物の棲息地」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日 (予稿集 87 頁)。
- Yamanaka, Y. (2017) The Biota of the Imaginary (2): Global Distribution of Mermaid Imagery in Relation to the Habitat of Aquatic Animals. *The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017 (Proceedings, p.88).
- 吉田世津子 (2017) 「クルグズ人の定住化と墓の形態変化—中央アジア・社会とモノの変化に関する予備的考察—」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』、国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日 (予稿集 89 頁)。
- Yoshida, S. (2017) Sedentarization of the Kyrgyzes and their Tomb Form Changes: a preliminary study of the interrelation between social and material changes in Central Asia. *The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2016 (Proceedings, p.90).
- 大西秀之 (2017) 「技術論をめぐる人類学と後期ハイデガーの応答」『実存思想協会 2017 年春の研究会』、杏林大学、2017 年 3 月 14 日。

PaleoAsia Project Series 13

パレオアジア文化史学

—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究—

Cultural History of PaleoAsia

発行日：2018年3月30日

編者：野林厚志（「パレオアジア文化史学」B01班研究代表者）

編集：彭 宇潔（「パレオアジア文化史学」B01班研究協力者）

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

国立民族学博物館 TEL. 06-6876-2151

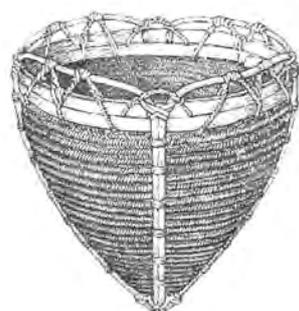
発行：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度
計画研究 B01班（研究課題番号 16H06411）

I S B N：978-4-909148-12-4

印刷・製本：株式会社遊文舎

〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31

TEL. 06-6304-9325



文部科学省科学研究費補助金
新学術領域研究（研究領域提案型）
2016-2020
パレオアジア文化史学

計画研究 B01 班 2017 年度 研究報告